

インストールガイド

Novell® Identity Manager

4.0.1

2011 年 04 月 15 日

www.novell.com



保証と著作権

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、この文書の内容または使用について、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。また文書の商品性、および特定の目的への適合性については、明示と黙示を問わず一切保証しないものとします。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、本書の内容を改訂または変更する権利を常に留保します。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、このような改訂または変更を個人または事業体に通知する義務を負いません。

米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、すべてのノベル製ソフトウェアについて、いかなる保証、表明または約束も行っておりません。またノベル製ソフトウェアの商品性、および特定の目的への適合性については、明示と黙示を問わず一切保証しないものとします。米国 Novell, Inc. およびノベル株式会社は、ノベル製ソフトウェアの内容を変更する権利を常に留保します。

本契約の下で提供される製品または技術情報はすべて、米国の輸出管理規定およびその他の国の輸出関連法規の制限を受けます。お客様は、すべての輸出規制を遵守し、製品の輸出、再輸出、または輸入に必要なすべての許可または等級を取得するものとします。お客様は、現在の米国の輸出除外リストに掲載されている企業、および米国の輸出管理規定で指定された輸出禁止国またはテロリスト国に本製品を輸出または再輸出しないものとします。お客様は、取引対象製品を、禁止されている核兵器、ミサイル、または生物化学兵器を最終目的として使用しないものとします。ノベル製ソフトウェアの輸出に関する詳細については、[Novell International Trade Services の Web ページ \(http://www.novell.com/info/exports/\)](http://www.novell.com/info/exports/) を参照してください。弊社は、お客様が必要な輸出承認を取得しなかったことに対し如何なる責任も負わないものとします。

Copyright © 2007-2011 Novell, Inc. All rights reserved. 本ドキュメントの一部または全体を無断で複写転載することは、その形態を問わず禁じます。

Novell, Inc.

404 Wyman Street, Suite 500

Waltham, MA 02451

U.S.A.

www.novell.com

オンラインマニュアル: 本製品とその他の Novell 製品の最新のオンラインマニュアルにアクセスするには、[Novell マニュアルの Web ページ \(http://www.novell.com/documentation\)](http://www.novell.com/documentation) を参照してください。

Novell の商標

Novell の商標一覧については、「[商標とサービスの一覧 \(http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html\)](http://www.novell.com/company/legal/trademarks/tmlist.html)」を参照してください。

サードパーティ資料

サードパーティの商標は、それぞれの所有者に帰属します。

目次

このガイドについて	7
ページのパート I 計画	9
1 開発環境のセットアップ	11
2 プロジェクト計画の作成	13
2.1 検出フェーズ	13
2.1.1 現在のビジネスプロセスの定義	14
2.1.2 Identity Manager ソリューションがどのように現在のビジネスプロセスに影響するか の定義	15
2.1.3 ビジネスおよび技術上の主な利害関係者の特定	16
2.1.4 すべての利害関係者へのインタビュー	16
2.1.5 高レベル方針および同意実行パスの作成	16
2.2 要件および設計分析フェーズ	17
2.2.1 ビジネス要件の定義	18
2.2.2 ビジネスプロセスの分析	19
2.2.3 エンタープライズデータモデルの設計	20
2.3 概念の検証	22
2.4 データの検証と準備	22
2.5 運用パイロット	23
2.6 運用開始計画	23
2.7 運用展開	23
3 技術上のガイドライン	25
3.1 管理ツールのガイドライン	26
3.1.1 Analyzer のガイドライン	27
3.1.2 Designer のガイドライン	27
3.1.3 iManager のガイドライン	27
3.1.4 役割マッピング管理者のガイドライン	27
3.2 メタディレクトリサーバのガイドライン	28
3.3 eDirectory のガイドライン	29
3.3.1 eDirectory の Identity Manager オブジェクト	29
3.3.2 Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製	30
3.3.3 スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理	31
3.4 ユーザアプリケーション	34
3.5 監査とレポートのガイドライン	34
ページのパート II インストール	37
4 基本的な Identity Manager システムのチェックリスト	39
4.1 前提条件	40
4.2 計画	40
4.3 インストール	40
4.4 リモートローダによるドライバ環境設定	41

4.5	リモートローダを使用しないドライバ環境設定	41
4.6	追加の設定	42
5	Identity Manager の入手場所	43
6	システム要件	47
6.1	eDirectory と iManager	48
6.2	メタディレクトリサーバ	49
6.2.1	サポートされているプロセッサ	50
6.2.2	サーバオペレーティングシステム	50
6.3	リモートローダ	51
6.4	ユーザアプリケーション	53
6.5	監査とレポート	54
6.6	ワークステーション	55
6.6.1	ワークステーションのプラットフォーム	56
6.6.2	Web ブラウザ	57
6.7	リソースの要件	57
7	Identity Manager のインストール	59
7.1	Analyzer のインストール	59
7.2	Designer のインストール	60
7.3	eDirectory をインストールする	61
7.4	iManager のインストール	61
7.5	メタディレクトリサーバのインストール	62
7.5.1	メタディレクトリサーバの root 以外のインストール	63
7.5.2	メタディレクトリサーバのサイレントインストール	65
7.6	リモートローダのインストール	66
7.6.1	要件	66
7.6.2	サポートされているドライバ	66
7.6.3	インストール手順	67
7.6.4	リモートローダのサイレントインストール	69
7.6.5	Java リモートローダを UNIX または Linux にインストールする	70
7.6.6	32 ビットおよび 64 ビットのリモートローダの共存	71
7.7	ドライバファイルのインストール	71
7.8	Roles Based Provisioning Module のインストール	72
7.9	カスタムドライバのインストール	72
7.10	役割マッピング管理者のインストール	73
7.11	Identity Reporting Module または Sentinel のインストール	73
8	Novell Identity Manager 製品を有効にする	75
8.1	Identity Manager 製品のライセンスの購入	75
8.2	プロダクトアクティベーションキーのインストール	75
8.3	Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示	76
8.4	Identity Manager のドライバの有効化	77
8.5	Analyzer の有効化	78
8.6	Designer および役割マッピング管理者の有効化	78

9 Identity Manager のトラブルシューティング	79
10 新機能	85
10.1 Identity Manager 4.0.1 の新機能	85
10.1.1 Identity Manager Advanced Edition と Standard Edition の比較	85
10.1.2 Telemetry	85
10.1.3 リソース要求アクティビティ	85
10.1.4 Identity Reporting Module に追加された新しいモジュール	86
10.1.5 Designer のパレットに追加されたアプリケーション	86
10.2 Identity Manager 4.0 の新機能	86
10.2.1 Identity Reporting Module	86
10.2.2 新しいドライバ	87
10.2.3 XDAS 監査のサポートに対応	87
10.2.4 ドライバの環境設定ファイルをパッケージが置換	88
10.2.5 役割マッピング管理者	88
10.2.6 Analyzer	88
10.2.7 統合インストーラ	88
ページのパート III Identity Manager のアップグレード	89
11 アップグレードとマイグレーション	91
ページのパート IV Identity Manager のアンインストール	93
12 Identity Manager コンポーネントのアンインストール	95
12.1 eDirectory からのオブジェクトの削除	95
12.2 メタディレクトリサーバのアンインストール	96
12.2.1 Linux/UNIX でのアンインストール	96
12.2.2 Windows でのアンインストール	96
12.2.3 ルート以外のインストールのアンインストール	96
12.3 リモートローダのアンインストール	97
12.3.1 Linux/UNIX でのアンインストール	97
12.3.2 Windows でのアンインストール	97
12.4 Roles Based Provisioning Module のアンインストール	97
12.4.1 ドライバの削除	98
12.4.2 ユーザアプリケーションのアンインストール	98
12.4.3 アプリケーションサーバとデータベースのアンインストール	98
12.5 Identity Reporting Module のコンポーネントのアンインストール	99
12.5.1 レポートングドライバの削除	100
12.5.2 Identity Reporting Module のアンインストール	100
12.5.3 イベント監査サービスのアンインストール	100
12.6 iManager のアンインストール	100
12.7 eDirectory のアンインストール	101
12.8 Analyzer のアンインストール	102
12.9 Designer のアンインストール	102
12.10 役割マッピング管理者のアンインストール	103

このガイドについて

Novell Identity Manager は、アプリケーション、ディレクトリ、およびデータベース間で情報を共有するためのデータ共有および同期サービスです。このサービスでは、分散された情報をリンクし、ユーザは識別情報の変更時に指定システムを自動的に更新するポリシーを設定できます。Identity Manager は、アカウントプロビジョニング、セキュリティ、シングルサインオン、ユーザセルフサービス、認証、認可、自動化されたワークフロー、および Web サービスの基盤になります。Identity Manager を使用すると、分散された識別情報を統合、管理、および制御できるため、適切なユーザに適切なリソースを安全に提供できます。

このガイドには、現在の環境で役立つ Identity Manager システムの計画、インストール、またはアップグレードの方法に関する情報が記載されています。

- ◆ 9 ページのパート I 「計画」
 - ◆ 11 ページの第 1 章 「開発環境のセットアップ」
 - ◆ 13 ページの第 2 章 「プロジェクト計画の作成」
 - ◆ 25 ページの第 3 章 「技術上のガイドライン」
- ◆ 37 ページのパート II 「インストール」
 - ◆ 39 ページの第 4 章 「基本的な Identity Manager システムのチェックリスト」
 - ◆ 43 ページの第 5 章 「Identity Manager の入手場所」
 - ◆ 47 ページの第 6 章 「システム要件」
 - ◆ 59 ページの第 7 章 「Identity Manager のインストール」
 - ◆ 75 ページの第 8 章 「Novell Identity Manager 製品を有効にする」
 - ◆ 79 ページの第 9 章 「Identity Manager のトラブルシューティング」
 - ◆ 85 ページの第 10 章 「新機能」
- ◆ 89 ページのパート III 「Identity Manager のアップグレード」
 - ◆ 91 ページの第 11 章 「アップグレードとマイグレーション」
- ◆ 93 ページのパート IV 「Identity Manager のアンインストール」

対象読者

このガイドは、計画を立案し、Identity Manager をネットワーク環境に実装する管理者、コンサルタント、およびネットワークエンジニアを対象としています。

マニュアルの更新

このマニュアルの最新のバージョンについては、Identity Manager のマニュアルの Web サイト (<http://www.novell.com/documentation/idm401/index.html>) を参照してください。

追加のマニュアル

Identity Manager ドライバの追加マニュアルについては、Identity Manager ドライバのマニュアル Web サイト (<http://www.novell.com/documentation/idm401/drivers/index.html>) を参照してください。

ユーザアプリケーションマニュアルについては、[Identity Manager Roles Based Provisioning Module マニュアル Web サイト \(http://www.novell.com/documentation/idmrpbpm401/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idmrpbpm401/index.html) を参照してください。

計画

Identity Manager 4.0.1 を使用すると、ビジネスの識別情報およびリソースを管理できます。また、現在は手動で行っている多くのビジネスプロセスが自動化されます。

Identity Manager ソリューションを構成するさまざまなコンポーネントについて疑問がある場合、各コンポーネントの詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 概要ガイド](#)』を参照してください。

現在の環境で効率的な Identity Manager ソリューションを作成するには、最初に時間をかけてソリューションを計画および設計する必要があります。計画には、製品に精通するためのテストラボのセットアップ、および Identity Manager ソリューションを実装するためのプロジェクト計画の作成という2つの主要な側面があります。プロジェクト計画を作成する場合、ビジネスプロセスを定義して、実装計画を作成します。ほとんどの企業には多くの異なるビジネスプロセスがあり、多くの異なるユーザが管理しています。完全な Identity Manager ソリューションはこれらのプロセスの大部分に影響します。現在の環境で効率的に実装できるよう、Identity Manager マネージャを計画する時間を設けることは極めて重要です。

すべてのコンポーネントが同じサーバ上に存在する新しい Identity Manager ソリューションを作成している場合は、インストールについて『[Identity Manager 4.0.1 統合インストールガイド](#)』を参照してください。これは、より早くシステムを設定するために簡略化されたインストーラです。

Identity Manager 実装時には、各段階において Identity Manager のエキスパートに相談して支援を受けることを強くお勧めします。提携オプションの詳細については、[Novell ソリューションパートナーの Web サイト \(http://www.novell.com/partners/\)](#) を参照してください。Novell エデュケーションでは、Identity Manager の実装を扱う各種コースも用意しています。

- ◆ [11 ページの第 1 章「開発環境のセットアップ」](#)
- ◆ [13 ページの第 2 章「プロジェクト計画の作成」](#)
- ◆ [25 ページの第 3 章「技術上のガイドライン」](#)

開発環境のセットアップ

1

Identity Manager 展開の計画フェーズを開始する前に、有用な計画を作成できるよう、Identity Manager 製品に精通しておく必要があります。Identity Manager ソリューションのテスト、分析、および開発が可能な開発環境を設定すると、Identity Manager の各コンポーネントについて学習したり、予測が難しい問題を見つけたりすることができます。

たとえば、異なるシステム間で情報を同期すると、その情報が各システムで異なる形式で表示されるとします。データを変更し、これら 2 つのシステム間で同期がどのように行われるかを確認することによって、この変更が同じ情報を使用する他のシステムに影響を及ぼすかどうかを判断できます。

開発環境を設定するもう 1 つの大きな理由は、ソリューションをライブデータに適用する前にそれらが機能するかを確認するためです。Identity Manager はデータを変更および削除します。テスト環境があれば、運用環境でデータも失うことなく、変更を加えることができます。

Identity Manager の各開発に対して展開環境をセットアップする必要があります。各展開は異なります。Identity Manager ソリューションに含める必要のあるさまざまなシステム、ビジネスポリシー、および手順があります。開発環境を使って、各ソリューションに最適なソリューションを作成できます。

Identity Manager ソリューションの開発時に使用する最も重要なツールは Designer です。Designer を使用することで、現在の環境の情報をすべてキャプチャし、その情報を使用して、ニーズに合った Identity Manager ソリューションを作成できます。計画に際しては、あらゆる側面において Designer を使用し、すべての情報をキャプチャしてください。Designer を使用すると、技術情報だけでなく、ビジネス情報が含まれるプロジェクト計画の作成が容易になります。Designer の詳細については、『[Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド](#)』を参照してください。

開発環境をセットアップするには、[39 ページの第 4 章「基本的な Identity Manager システムのチェックリスト](#)」の情報を使用します。これは、すべての Identity Manager コンポーネントのインストールチェックリストです。このリストを使用して、プロジェクト計画の開発に使用できる Identity Manager の全コンポーネントがインストールおよび設定されていることを確認してください。開発環境を設定する際に [25 ページの第 3 章「技術上のガイドライン](#)」の情報をを使用すると、Identity Manager の各コンポーネントをインストールして設定しながら、技術上の検討事項を学ぶことができます。

開発環境を作成したら、次のステップは、Identity Manager ソリューションを実装するためのプロジェクト計画の作成です。[13 ページの第 2 章「プロジェクト計画の作成](#)」の情報をを使用して、プロジェクト計画を作成します。

プロジェクト計画の作成

2

この計画作成用資料には、通常の Identity Manager プロジェクトに含まれる立ち上げから完全な運用展開までのアクティビティの概要が記載されています。識別情報管理方針を実装するには、現在のビジネスプロセスすべてが何であるか、これらのプロセスのニーズは何か、現在の環境の利害関係者は誰を理解してから、ソリューションを設計し、利害関係者から賛同を得て、ソリューションをテストおよび展開する必要があります。この項の目的は、このプロセスを十分に理解できるようにして、Identity Manager を使用する利点を最大限に引き出すことができるようにすることです。

この節は内容を完全に網羅しているわけではなく、可能性のあるすべての環境設定を扱うことや、そのまま実行に移すことを目的とはしていません。各環境は異なっており、使用するアクティビティのタイプによっては柔軟性が必要になります。

- ◆ 13 ページのセクション 2.1 「検出フェーズ」
- ◆ 17 ページのセクション 2.2 「要件および設計分析フェーズ」
- ◆ 22 ページのセクション 2.3 「概念の検証」
- ◆ 22 ページのセクション 2.4 「データの検証と準備」
- ◆ 23 ページのセクション 2.5 「運用パイロット」
- ◆ 23 ページのセクション 2.6 「運用開始計画」
- ◆ 23 ページのセクション 2.7 「運用展開」

2.1 検出フェーズ

Identity Manager ソリューションはビジネスの多くの側面に影響します。効率的なソリューションを作成するには、現在のビジネスプロセスすべてを定義する時間を設けたうえで、多くの Identity Manager の実装によってこれらのプロセスがどのように変わるか、これらの変更の影響を受けるユーザ、および変更の実装方法を定義する必要があります。

検出フェーズにより、すべての利害関係者間で問題とソリューションについて共通の理解が得られます。このフェーズでは、Identity Manager ソリューションの影響を受ける主要なビジネスおよびシステム情報が含まれる計画またはロードマップを作成します。また、すべての利害関係者が Identity Manager ソリューションの作成に参加できるため、各自のビジネス領域にどのような影響があるかを理解できます。

次のリストは、検出フェーズの成功に必要なステップを示しています。検出および設計フェーズを進んでいくと、リストに追加する必要がある追加項目が見つかる場合があります。

- ◆ 14 ページのセクション 2.1.1 「現在のビジネスプロセスの定義」
- ◆ 15 ページのセクション 2.1.2 「Identity Manager ソリューションがどのように現在のビジネスプロセスに影響するかの定義」
- ◆ 16 ページのセクション 2.1.3 「ビジネスおよび技術上の主な利害関係者の特定」
- ◆ 16 ページのセクション 2.1.4 「すべての利害関係者へのインタビュー」
- ◆ 16 ページのセクション 2.1.5 「高レベル方針および同意実行パスの作成」

2.1.1 現在のビジネスプロセスの定義

Identity Manager を使用すると、ビジネスプロセスが自動化され、現在の環境で識別情報を容易に管理できます。現在のビジネスプロセスがどうなっているがわからなければ、これらのプロセスを自動化する Identity Manager ソリューションを設計することはできません。Designer のアーキテクチャモードを使用して、現在のビジネスプロセスをキャプチャし、グラフィカルに表示することができます。詳細については、『[「Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド」](#)』の「[アーキテクトモード](#)」を参照してください。

たとえば、お客様の会社で次のビジネスプロセスを特定することが考えられます。

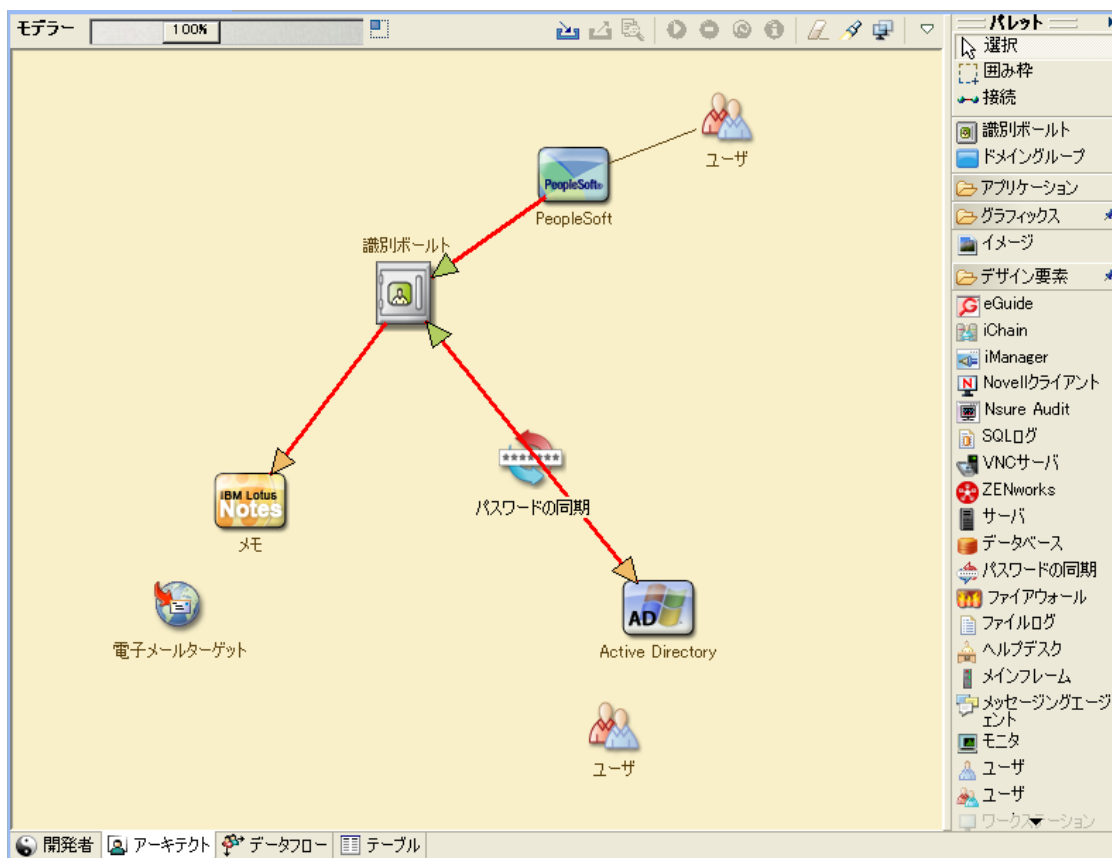
- ◆ 従業員が退職すると、電子メールシステムではその従業員のユーザアカウントは削除されますが、他のすべてのシステムではユーザアカウントは無効になるだけで、削除されません。
- ◆ ユーザの電子メールアドレスの形式。
- ◆ 販売担当者がアクセスできるシステムまたはリソース。
- ◆ マネージャがアクセスできるシステムまたはリソース。
- ◆ 新しいアカウントを生成するシステム。人事システムか、ワークフロー要求によるものか。
- ◆ パスワードの変更頻度、パスワードの複雑さ、およびパスワードを同期するシステムを定義した会社のパスワードポリシー。

ビジネスプロセスを定義する際に次の項目のリストを使用すると、すべてのプロセスの理解に役立ちます。

- ◆ 現在のビジネス上の問題の特定および明確化。
- ◆ これらの問題に対処するのに必要なイニシアチブの決定。
- ◆ イニシアチブの影響を受けるサービスおよびシステムの決定。

このステップにより、現在のビジネス内容、および改善が必要なプロセスに関して高レベルの概要を作成できます。たとえば、[図 2-1](#) では、Designer を使用して PeopleSoft システムから新しいユーザアカウントが生成される仕組みを説明しています。ユーザアカウントは識別ボールドに同期されてから、Lotus Notes および Active Directory に同期されます。パスワードは Active Directory と識別ボールドの間で同期されています。アカウントは Notes システムへは同期されますが、識別ボールドへ逆方向には同期されません。

図 2-1 ビジネスプロセスの例



プロセスを決定したら、Identity Manager を利用する方法を特定する作業を開始します。15 ページのセクション 2.1.2 「Identity Manager ソリューションがどのように現在のビジネスプロセスに影響するか」に進みます。

2.1.2 Identity Manager ソリューションがどのように現在のビジネスプロセスに影響するか

現在のビジネスプロセスを定義した後、Identity Manager ソリューションに組み込むプロセスを決定する必要があります。

最も適切なのは、ソリューション全体を考察してから、実装するプロセスに優先順位を付ける方法です。Identity Manager にはビジネスの多くの側面を対称にしているため、独自のソリューションとして各ビジネスプロセスに取り組むよりも、ソリューション全体を計画の方が容易です。

優先して自動化すべきビジネスプロセスのリストを作成してから、これらの変更によって影響を受けるシステムを特定します。それが終了したら 16 ページのセクション 2.1.3 「ビジネスおよび技術上の主な利害関係者の特定」に進みます。

2.1.3 ビジネスおよび技術上の主な利害関係者の特定

Identity Manager ソリューションに關与するすべての利害関係者を特定することは、ソリューションの成功にとって重要です。ほとんどの会社では、ビジネスプロセスのビジネスおよび技術上の側面をすべて理解していて、問い合わせることができる人物が1名しかいないということはありません。Identity Manager ソリューションの影響を受けるサービスおよびシステムを特定するだけでなく、サービスまたはシステムの担当者を特定する必要もあります。

たとえば、電子メールシステムをソリューションに統合する場合、電子メールシステムの内容、電子メールシステムの管理者、および連絡先情報を一覧にする必要があります。

Designer プロジェクトには、こうした情報をすべて追加することができます。各アプリケーションアイコンには、システムおよびシステム管理者の情報を保存できる場所があります。詳細については、『「[Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド](#)」』の「[アプリケーションプロパティの設定](#)」を参照してください。

各ビジネスプロセスに關与するユーザをすべて特定したら、次のステップは [16 ページのセクション 2.1.4 「すべての利害関係者へのインタビュー」](#) です。

2.1.4 すべての利害関係者へのインタビュー

ビジネスおよび技術上の利害関係者にインタビューすることにより、Identity Manager ソリューションの完全な設計に必要な情報を収集できます。さらにこのインタビューにより、Identity Manager ソリューションおよびソリューションがどのような影響を及ぼすかについて各利害関係者を教育することもできます。以下は、インタビュー時にカバーすべき項目のリストを示しています。

- ◆ Identity Manager ソリューションで対応するビジネスプロセスを特定および明確化する。インタビューする相手が、現在の計画に変更をもたらす可能性がある情報を持っていることがあります。
- ◆ ソリューションによって利害関係者がどのような影響を受けるか、および彼らが抱えている懸念にどのように対応するかを判断する。また、各自が担当するソリューションの部分にどの程度の時間がかかるのかを利害関係者に尋ねます。予測しているかどうかはわかりませんが、この情報を収集すると、ソリューションの範囲を判断するのに役立ちます。
- ◆ ビジネスおよびシステムの重要な情報を利害関係者からキャプチャする。場合によっては、提案した計画がビジネスプロセスまたはシステムに悪影響を及ぼすこともあります。この情報をキャプチャすると、Identity Manager ソリューションに関して情報に基づいた決定を下すことができます。

主な利害関係者にインタビューを行ったら、次のステップは [16 ページのセクション 2.1.5 「高レベル方針および同意実行パスの作成」](#) です。

2.1.5 高レベル方針および同意実行パスの作成

情報をすべて収集したら、Identity Manager ソリューションの高レベルの方針またはロードマップを作成する必要があります。Identity Manager ソリューションに含めたい機能はすべて追加してください。たとえば、新しいユーザアカウントはワークフローを通じた要求によって生成しますが、ユーザのタイプはユーザにアクセス権が付与されているリソースによって異なります。

可能であれば、同じミーティングで利害関係者すべてにこの高レベル方針を提示する。これにより、次の作業を行えます。

- ◆ 含めたイニシアチブが最適なことを確認し、優先度の最も高いイニシアチブを特定する。
- ◆ 要件および設計フェーズに備えて計画アクティビティを特定する。
- ◆ これらのイニシアチブを1つ以上実行するために必要なものを判別する。
- ◆ **Identity Manager** ソリューションの同意実行パスを作成する。
- ◆ 利害関係者の追加の教育を定義する。

検出により、すべての利害関係者間で問題とソリューションについて共通の理解が得られます。分析フェーズでは、一般的に利害関係者がディレクトリ、Novell eDirectory、Novell Identity Manager、およびXML統合の基本的な知識を持っていることを前提としているため、検出フェーズは、分析フェーズへの移行を容易にします。

検出フェーズを完了したら、[17 ページのセクション 2.2 「要件および設計分析フェーズ」](#)に進みます。

2.2 要件および設計分析フェーズ

この分析フェーズの開始点として、検出フェーズで作成した高レベルロードマップを入手します。このドキュメントおよび Designer プロジェクトの両方に、技術的およびビジネス上の詳細を追加する必要があります。これにより、Identity Manager ソリューションの実装に使用するデータモデルおよび高レベルの Identity Manager アーキテクチャ設計が作成されます。

設計の焦点は特に識別情報管理にあります。ファイルと印刷など、従来、リソース管理ディレクトリに関連付けられていた要素の多くにも対応できます。Identity Manager は、オペレーティングシステムのファイルシステムに直接アクセスできないディレクトリとユーザアカウントを同期します。たとえば、Active Directory にユーザアカウントを持っていても、それだけでは Active Directory サーバのファイルシステムへのアクセス権は付与されません。

検出フェーズで収集した情報を使用して、次の質問例に回答し、収集する必要がある他の情報を確認します。このためには、利害関係者への追加インタビューが必要になることがあります。

- ◆ 使用されているシステムソフトウェアのバージョン。
- ◆ eDirectory の設計は適切か。たとえば、同期するユーザオブジェクトのマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカが Identity Manager サーバにあるかどうか。ない場合、eDirectory の設計は適切ではありません。
- ◆ すべてのシステムのデータの品質が適切かどうか(データの品質が使用に適さない場合、ビジネスポリシーを目的どおりに実装できません)。たとえば、同期するシステムに重複するユーザアカウントがあったり、各システム全体でデータ形式が統一されていない可能性があります。情報を同期する前に、各システムのデータを評価する必要があります。
- ◆ 現在の環境用にデータの操作が必要か。たとえば、人事システムではユーザ雇用日付形式は 2008/02/23 のみで、識別ボールドでは 02-23-2008 である可能性があります。この場合、同期を実行するにはデータを操作する必要があります。

Identity Manager には、データの分析およびクリーニングのプロセスを簡素化するためのツールが含まれています。詳細については、『[Analyzer 4.0.1 for Identity Manager 管理ガイド](#)』を参照してください。

現在の環境に適切な決定を下せるよう、[25 ページの第 3 章「技術上のガイドライン」](#)の情報をレビューします。

要件を分析したら、実装の範囲およびプロジェクト計画を設定し、必要条件のアクティビティを実施する必要があるかどうかを決定します。大きなミスを防ぐために、情報の収集および要件の文書化はできる限り完全に行ってください。以下は、考えられる要件リストを示しています。

- ◆ すべてのシステム、信頼されたデータソース、イベント、情報の流れ、データ形式の基準、接続システムと Identity Manager 内の属性間のマッピング関係を示すデータモデル。
- ◆ ソリューションに適した Identity Manager アーキテクチャ。
- ◆ 追加のシステム接続要件の詳細。
- ◆ データ検証およびレコード照合の方針。
- ◆ Identity Manager インフラストラクチャをサポートするディレクトリ設計。

次のタスクは、要件および設計の評価中に完了する必要があります。

- ◆ [18 ページの「ビジネス要件の定義」](#)
- ◆ [19 ページの「ビジネスプロセスの分析」](#)
- ◆ [20 ページの「エンタープライズデータモデルの設計」](#)

2.2.1 ビジネス要件の定義

検出フェーズでは、組織のビジネスプロセス、およびビジネスプロセスを定義するビジネス要件を収集しました。ビジネス要件のリストを作成してから、次のタスクを完了し、Designer プロセスのマッピングを開始します。

- ◆ ビジネス要件のリストを作成し、このプロセスの影響を受けるプロセスを特定します。たとえば、従業員の解雇に関するビジネス要件として、その従業員のネットワークおよび電子メールアカウントのアクセス権を必ず解雇日と同じ日に削除するようにします。この解雇プロセスの影響を受けるのは、電子メールシステムおよび識別ポータルです。
- ◆ プロセスフロー、プロセストリガ、およびデータマッピング関係を確立します。たとえば、特定のプロセスで何かが発生する場合に、他にどのようなプロセスがトリガされるか、などです。
- ◆ アプリケーション間のデータフローをマッピングします。Designer を使用すると、この情報を表示できます。詳細については、『[「Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド」](#)』の「[データフローの管理](#)」を参照してください。
- ◆ たとえば、2/25/2007 から 25 Feb 2007 などにフォーマットを変換する必要がある場合のデータ変換を特定し、Analyzer を使用してデータを変更します。詳細については、『[Analyzer 4.0.1 for Identity Manager Administration Guide](#)』を参照してください。
- ◆ 存在するデータの従属関係を文書化します。

特定の値が変更された場合、その値に従属関係があるかどうかを調べるのは重要なことです。特定のプロセスが変更された場合、そのプロセスに従属関係があるかどうか知っておくことも重要です。

たとえば、人事システムで「一時的な」従業員ステータス値を選択することは、制限された権限と特定の勤務時間のネットワークへのアクセス権を持つユーザオブジェクトを、IT 部署が eDirectory で作成する必要があることを意味しています。

- ◆ 優先度を一覧表示します。

関係者全員のすべての要求、要望を即座に満たせるわけではありません。プロビジョニングシステムの設計および展開の優先度はロードマップの計画に役立ちます。

展開の一部を先に実装し、他の部分を後から実装することで展開を分割するか、組織内部の人員グループに基づく段階的な展開を使用すると有利になる場合があります。

- ◆ 前提条件を定義します。

展開の特定のフェーズを実行するのに必要な前提条件は、文書化する必要があります。これには、Identity Manager とのインタフェースを持つ接続システムへのアクセス権も含まれます。

- ◆ 信頼されるデータソースを特定します。

システム管理者やマネージャが自分の担当範囲と思われる項目を早期に明らかにすることで、関係者全員の同意を得て、円滑に作業を進めることができます。

たとえば、アカウント管理者には、特定のファイルおよびディレクトリに対する権限を従業員に付与するため、所有権が必要な場合があります。これは、アカウントシステムでローカルトラスティの割り当てを実装することにより行うことができます。

ビジネス要件を定義したら、[19 ページのセクション 2.2.2 「ビジネスプロセスの分析」](#)に進みます。

2.2.2 ビジネスプロセスの分析

ビジネス要件の分析が完了したら、Identity Manager ソリューションの範囲を絞り込めるよう、追加の情報を収集する必要があります。アプリケーションまたはシステムを実際に行っているマネージャ、管理者、および従業員などの主要なユーザにインタビューする必要があります。想定される問題としては、次のようなものが上げられます。

- ◆ データの送信元はどこか。
- ◆ データの送信先はどこか。
- ◆ データの責任者は誰か。
- ◆ データが属すビジネス機能の所有権を持っているのは誰か。
- ◆ データの変更時に連絡しなければならないのは誰か。
- ◆ データの変更がもたらす影響は何か。
- ◆ データ処理（収集や編集）にはどのような作業方法が存在するか。
- ◆ どのような種類の操作が実行されるか。
- ◆ データの品質と整合性を保証するために取られている方法は何か。
- ◆ システムはどこにあるか（どの部署のどのサーバか）。
- ◆ 自動処理に適していないプロセスは何か。

たとえば、人事における PeopleSoft システムの管理者には次のような質問をするとよいでしょう。

- ◆ PeopleSoft データベースに保存されているデータは何か。
- ◆ 従業員アカウントの各種パネルに表示される内容は何か。
- ◆ プロビジョニングシステム全体に反映するのに必要なアクションは何か (追加、変更、または削除など)。
- ◆ これらのうち、どれが必須で、どれがオプションか。
- ◆ PeopleSoft で実行されたアクションに基づいてトリガするのに必要なアクションは何か。
- ◆ 無視すべき操作、イベント、アクションは何か。
- ◆ データはどのように変換されて Identity Manager にマップされるか。

主要な人へのインタビューにより、プロセス全体をよりはっきりと把握できる、組織の他の領域を導き出すこともあります。

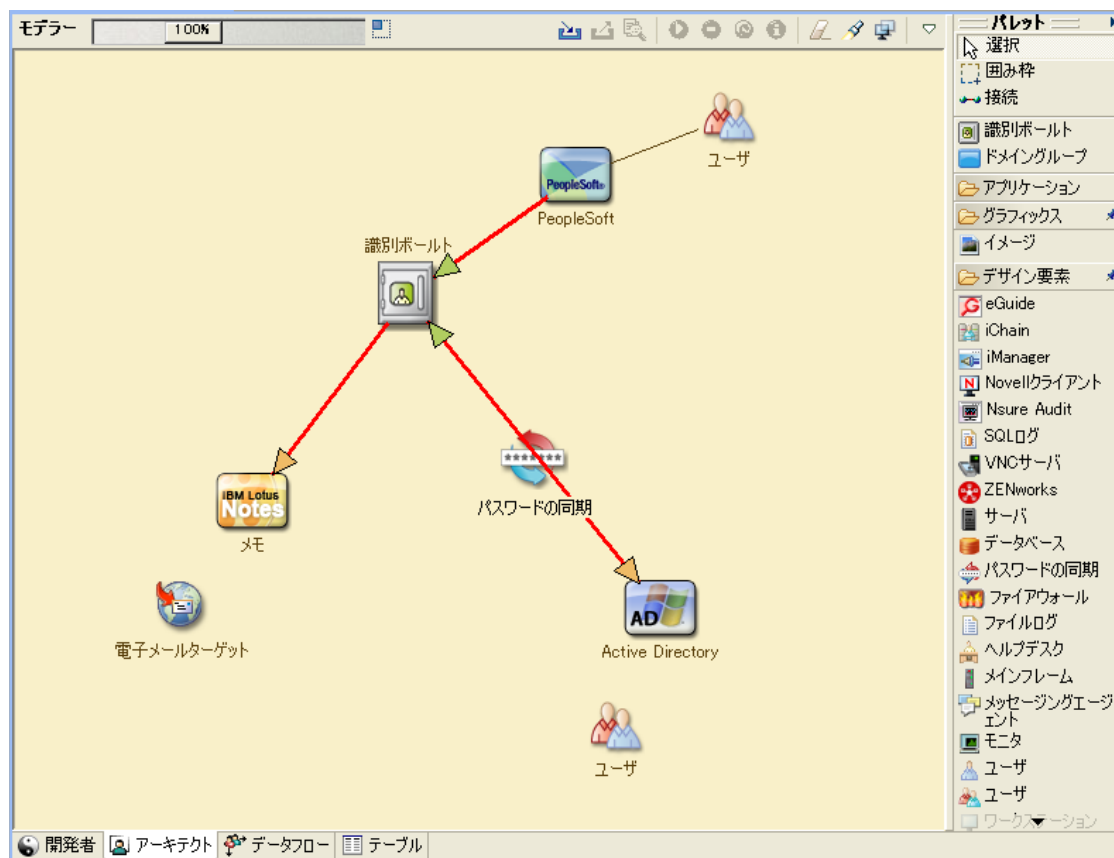
これら情報をすべて収集したら、現在の環境に適したエンタープライズデータモデルを設計することができます。20 ページのセクション 2.2.3 「エンタープライズデータモデルの設計」に進み、設計を開始します。

2.2.3 エンタープライズデータモデルの設計

ビジネスプロセスを定義したら、Designer を使用して、現在のビジネスプロセスを反映したデータモデルの設計を開始できます。

Designer のモデルは、データの作成場所、移動先、および移動できない場所を図示しています。重要なイベントがデータフローに与える影響の程度についても考慮することができます。たとえば、[図 2-2](#) は、データは PeopleSoft から流れていますが、逆に PeopleSoft へ同期するデータはないことを示しています。

図 2-2 Designer によるデータフロー



提案したビジネスプロセスと、そのプロセスに自動プロビジョニングを実装する利点について説明した図を作成することもできます。

モデルの開発は、次のような質問に回答することから始めます。

- ◆ 移動されるオブジェクトの種類 (ユーザー、グループなど) は何か。
- ◆ どのイベントが重要か。
- ◆ 同期が必要な属性はどれか。
- ◆ 管理対象のさまざまな種類のオブジェクトに対し、ビジネス全体で保存されるデータは何か。
- ◆ 同期は一方向か双方向か。
- ◆ 各属性に対して、信頼されるソースであるシステムはどれか。

システム間のさまざまな値の相互関係について考慮することも重要です。

たとえば、PeopleSoft の従業員ステータスフィールドには、従業員、契約社員、およびインターンの 3 つの設定値があるとします。一方、Active Directory システムには、常駐および臨時の 2 つの値しかないとします。この場合では、PeopleSoft の「契約業者」ステータスと、Active Directory の「常駐」および「臨時」の値の間の関係を決定する必要があります。

この作業では、各ディレクトリシステム、システムを互いに関連付ける方法、および複数のシステム全体で同期する必要があるオブジェクトと属性を理解することに焦点を当てます。設計が完了したら、次のステップでは提案検証を作成します。[22 ページのセクション 2.3 「概念の検証」](#)に進みます。

2.3 概念の検証

ラボ環境でサンプルを実装して、概念検証用のテストを作成、実施することで、お客様の会社のビジネスポリシーおよびデータフローを反映させることができます。この実装は、要件分析および設計時に開発されたデータモデルの設計を基にし、運用準備段階の最終手順になります。[11 ページの第 1 章 「開発環境のセットアップ」](#) で作成したテストをラボで実行します。

注：この手順を行うことで、管理サポートを得ることができ、最終的な実装作業を行う能力を培うことができます。

[25 ページの第 3 章 「技術上のガイドライン」](#)には、提案検証を検証するのに役立つ情報が記載されています。ここには、技術上のガイドラインが記載されており、Identity Manager の展開を成功させるのに役立ちます。

提案検証を作成したら、システム内にあるデータを評価するための計画も作成する必要があります。このステップは、システム間で競合が発生しないことを確認するのに役立ちます。[22 ページのセクション 2.4 「データの検証と準備」](#)に進み、こうした競合が発生しないことを確認します。

2.4 データの検証と準備

運用システム内のデータでは、品質と整合性が保たれない場合があるため、システムの同期時に不整合が発生する可能性があります。この段階では、リソース実装チームと、統合されるシステム内のデータを「所有」または管理するビジネス単位またはグループの分離の明白な点が示されます。場合によっては、関連付けられたリスクとコストの要素が、1 つのプロビジョニングプロジェクトには収まらない場合もあります。

分析および設計フェーズで完成させたデータモデルを使用する必要があります。データを適切に準備するには、実行可能なレコード照合、およびデータ形式方針も必要です。データモデルとフォーマット戦略を定義することで、次の 2 つの重要な手順を完了できます。

- ◆ 識別ポータルへのロードに適した運用データセットを作成する (分析および設計アクティビティで定義)。これには、予想されるロードの方法 (バルクロードか、コネクタ経由のロードのどちらか) も含まれます。検証または形式指定されるデータの要件も識別されます。
- ◆ パフォーマンスの要因を特定し、使用機器および Identity Manager の展開の全体的な分散アーキテクチャに照らして、これらの要因を検証する。

データを準備したら、[23 ページのセクション 2.5 「運用パイロット」](#)に進みます。

2.5 運用パイロット

運用パイロットは、運用環境にマイグレートするための最初の手順です。このフェーズ中には、追加のカスタマイズが発生する可能性があります。この限定された導入では、前のアクティビティで目的の結果が得られているかどうかを確認し、運用開始の同意を得ることができます。パイロットでは、プロセスのこの時点までに作成された計画を検証します。

注: このフェーズでは、ソリューションの受け入れ基準と完全な運用までに必要なマイルストーンが得られます。

パイロットソリューションは、データモデルおよび目的のプロセス成果に対してライブ提案検証および検証を提供します。パイロットが完了したら、[23 ページのセクション 2.6 「運用開始計画」](#)に進みます。

2.6 運用開始計画

このフェーズでは、運用展開の計画に移ります。計画では、次のいくつかの作業を実行する必要があります。

- ◆ サーバプラットフォーム、ソフトウェアリビジョン、およびサービスパックの確認
- ◆ 全体的な環境の確認
- ◆ 混在共存環境における識別ボールドの設計の確認
- ◆ ビジネスロジックが正確であることの確認
- ◆ データ同期が計画通りに実行されていることの確認
- ◆ レガシプロセスの切り替えの計画
- ◆ 予期しない問題のロールバック方針の計画

この計画には、開始の各ステップの実装日と完了日を記載する必要があります。各利害関係者はこれらの日付を入力し、各自にとって日付に問題がないことに同意します。これにより、開始に関与する各担当者に、変更の実施時期と完了時期を通知できます。

運用開始計画が完了したら、[23 ページのセクション 2.7 「運用展開」](#)に進みます。

2.7 運用展開

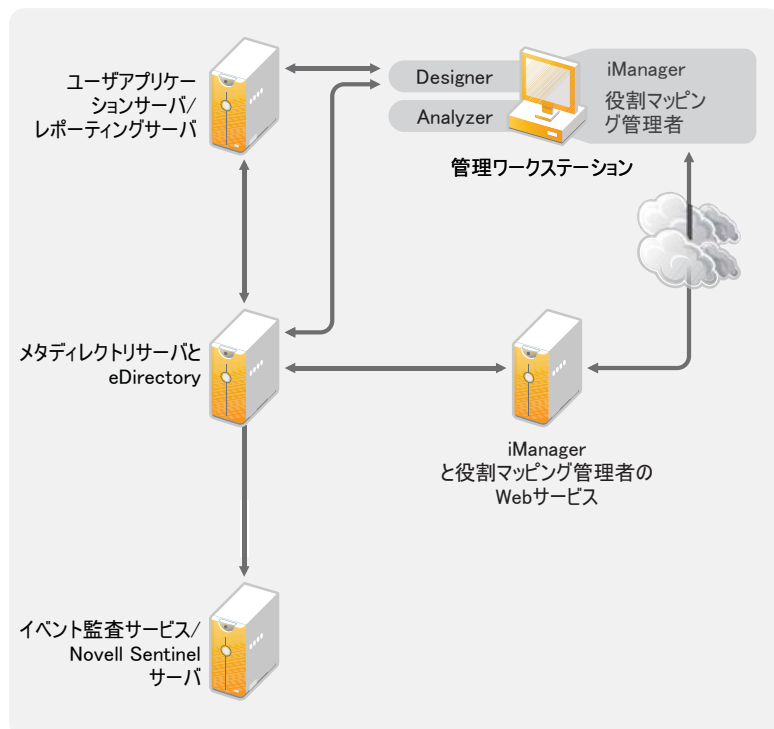
運用展開フェーズでは、Identity Manager ソリューションがライブ環境で作成されるようにすべての計画を実行に移します。運用開始計画に従って、Identity Manager ソリューションのさまざまな要素を所定の位置に配置します。計画の複雑さに応じて、すぐに達成される場合もあれば、完了するまでに時間がかかる場合もあります。

技術上のガイドライン

3

Designer で収集した情報を使用することで、Identity Manager の各コンポーネントについて、インストールの場所や設定オプションなどの技術的判断を下すことができます。各コンポーネントの概要については、『[Identity Manager 4.0.1 概要ガイド](#)』を参照してください。図 3-1 は、Identity Manager ソリューションとして考えられる設定の 1 つです。

図 3-1 Identity Manager のコンポーネント



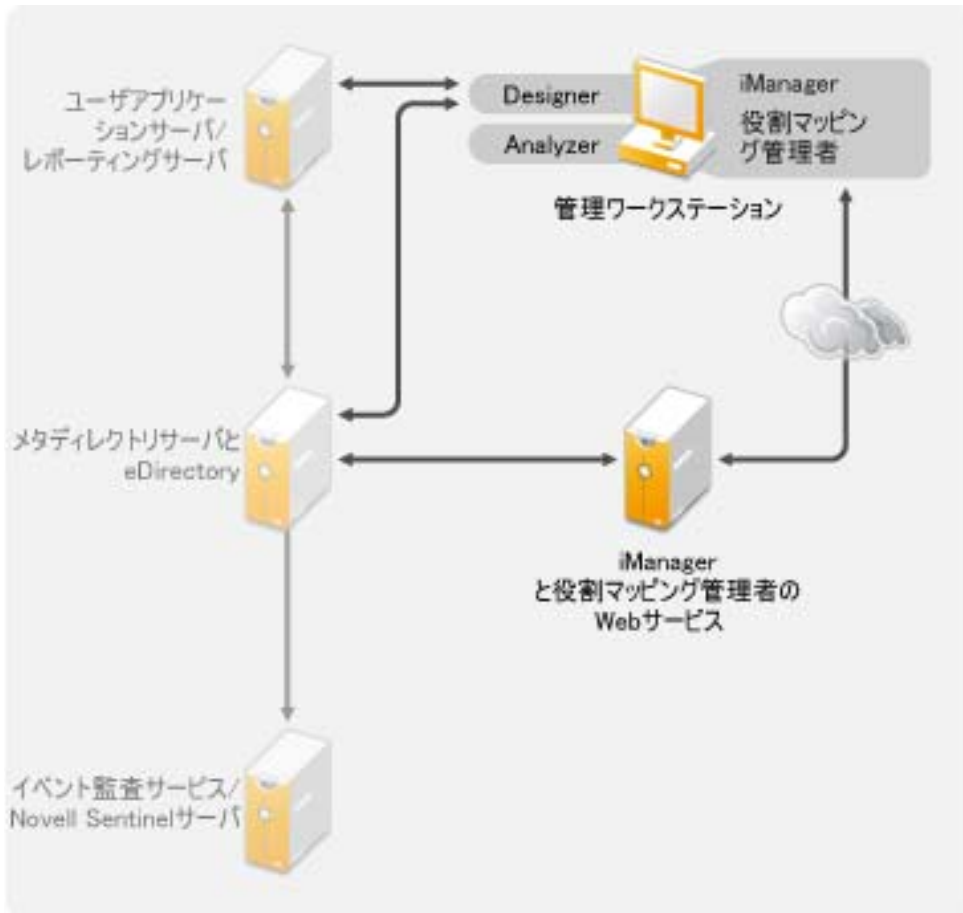
Identity Manager はカスタマイズ性に優れています。次の項では、技術的なベストプラクティスによるガイドラインについて説明します。これらの項は、現在の環境で最適に機能する Identity Manager ソリューションをセットアップおよび設定するのに役立ちます。これらのガイドラインが現在の環境にどのように適用されるかを左右する変動要素には、サーバに搭載されているハードウェアのタイプ、WAN の設定方法、および同期するオブジェクトの数などがあります。

- ◆ 26 ページのセクション 3.1 「管理ツールのガイドライン」
- ◆ 28 ページのセクション 3.2 「メタディレクトリサーバのガイドライン」
- ◆ 29 ページのセクション 3.3 「eDirectory のガイドライン」
- ◆ 34 ページのセクション 3.4 「ユーザアプリケーション」
- ◆ 34 ページのセクション 3.5 「監査とレポートのガイドライン」

3.1 管理ツールのガイドライン

図 3-2 で説明されているように、Identity Manager ソリューションの主な管理ツールは、Designer と iManager の 2 つです。Designer は Identity Manager ソリューションの計画および作成中に使用し、iManager は Identity Manager ソリューションの日常的な管理タスクに使用します。

図 3-2 Identity Manager 管理ツール



ユーザアプリケーションは、Web ベースの管理ページを使用します。ユーザアプリケーションの詳細については、*Identity Manager Roles Based Provisioning Module 4.0 ユーザアプリケーション: 管理ガイド*の「ユーザアプリケーションの管理」を参照してください。

- ◆ 27 ページのセクション 3.1.1 「Analyzer のガイドライン」
- ◆ 27 ページのセクション 3.1.2 「Designer のガイドライン」
- ◆ 27 ページのセクション 3.1.3 「iManager のガイドライン」
- ◆ 27 ページのセクション 3.1.4 「役割マッピング管理者のガイドライン」

3.1.1 Analyzer のガイドライン

Analyzer は、ワークステーションにインストールされるシッククライアントです。Analyzer は、Identity Manager ソリューションに追加するシステムのデータを調査し、クリーンアップするのに使用されます。計画段階で Analyzer を使用すると、必要な変更、およびそれらの変更を行うための最善の方法を判断するのに役立ちます。

Analyzer の使用上、特に注意すべき事項はありません。詳細については、『[Analyzer 4.0.1 for Identity Manager Administration Guide](#)』を参照してください。

3.1.2 Designer のガイドライン

Designer はシッククライアントで、ワークステーションにインストールされます。Designer は、Identity Manager ソリューションの設計、テスト、文書化、および展開に使用します。計画フェーズ全体で Designer を使用すると、1 箇所で集中的に情報をキャプチャできます。また、ソリューションの全コンポーネントを確認する際には、管理者が気付いていない可能性のある問題を認識するのにも役立ちます。

複数のスタッフが同じプロジェクトに従事していない限り、Designer の使用上、特に注意すべき事項はありません。Designer を使用すると、プロジェクトのバージョンを制御できます。詳細については、『[Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド](#)』の「[バージョンコントロール](#)」を参照してください。

3.1.3 iManager のガイドライン

iManager とは、Identity Manager の管理ツールである Web アプリケーションのことです。Identity Manager をインストールする場合、eDirectory ツリーに iManager サーバがすでにインストールされている必要があります。

常に 10 名を超える管理者が同時に iManager で作業する場合は、iManager をホストする専用サーバを用意することをお勧めします。26 ページの [図 3-2](#) は、この Identity Manager ソリューション設定を示しています。管理者が 1 人だけの場合、メタディレクトリサーバで問題なく iManager を実行できます。

3.1.4 役割マッピング管理者のガイドライン

役割マッピング管理者とは、主な IT システム内部で付与される権限および許可を検出する Web アプリケーションのことです。このサービスによって、IT 管理者だけでなく、ビジネスアナリストがどの権限がどのビジネス役割に関連付いているかを定義および保守できます。

役割マッピング管理者の使用上、特に注意すべき事項はありません。役割マッピング管理者は、26 ページの [図 3-2](#) で示すように別のサーバ上で実行したり、メタディレクトリサーバ上で実行したりできます。詳細については、『[Identity Manager Role Mapping Administrator 4.0.1 インストールおよび環境設定ガイド](#)』を参照してください。

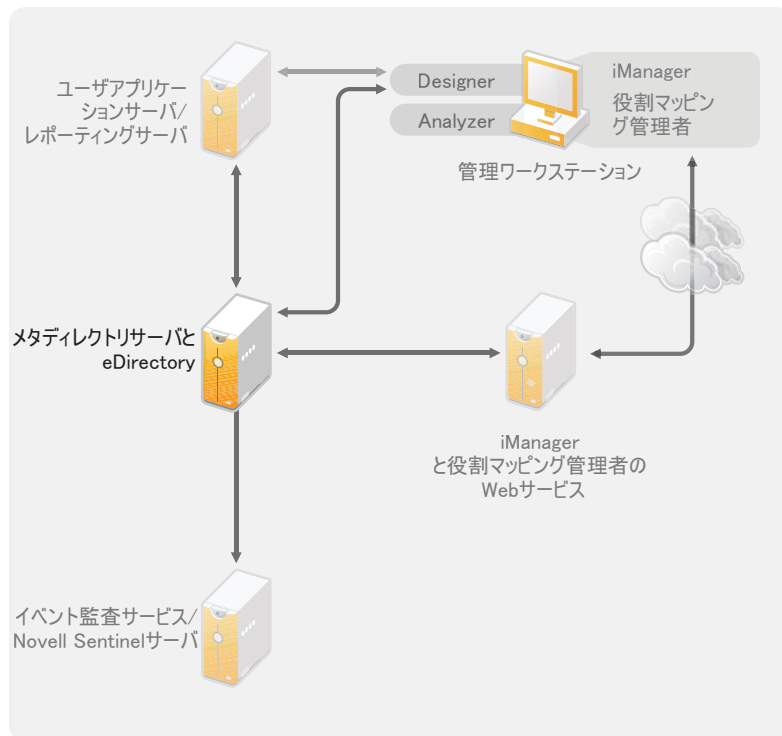
3.2 メタディレクトリサーバのガイドライン

作業負荷に応じて、Identity Manager ソリューションに1つ以上のメタディレクトリサーバを用意することができます。図 3-3 に示すように、メタディレクトリサーバには eDirectory がインストールされている必要があります。図には示されていませんが、リモートローダを追加すると、現在の環境の作業負荷および設定に役立ちます。

ドライバは接続アプリケーションと同じサーバで実行する必要があります。たとえば、Active Directory ドライバを設定するには、図 3-3 のサーバはメンバーサーバまたはドメインコントローラである必要があります。メンバーサーバまたはドメインコントローラに eDirectory および Identity Manager をインストールしない場合、メンバーサーバまたはドメインコントローラにリモートローダをインストールできます。リモートローダはすべてのイベントを Active Directory からメタディレクトリサーバへ送信します。リモートローダはメタディレクトリサーバから情報を受信し、接続アプリケーションに渡します。

リモートローダを使用すると、Identity Manager ソリューションの柔軟性が高まります。詳細については、『Identity Manager 4.0.1 リモートローダガイド』を参照してください。

図 3-3 メタディレクトリサーバ



サーバのパフォーマンスに影響を及ぼす変動要素は数多くあります。通常は、メタディレクトリサーバで実行するドライバの数は 10 個以下にすることをお勧めします。ただし、各ドライバで数百万のオブジェクトを同期している場合、1つのサーバでは 10 個のドライバを実行できないことがあります。一方で、1つのドライバで 100 個のオブジェクトを同期している場合、1つのサーバで 10 個以上のドライバを実行できる可能性があります。

サーバがどのように動作するのかは、ラボ環境に Identity Manager ソリューションをセットアップした際にテストできます。iManager のヘルスマonitoring ツールを使用してベースラインを取得すると、環境に最適な判断を下すことができます。ヘルスマonitoring ツールの詳細については、『「Identity Manager 4.0.1 共通ドライバ管理ガイド」』の「[ドライバヘルスのモニタリング](#)」を参照してください。

各ドライバの注意事項については、Identity Manager ドライバマニュアルの [Web サイト \(http://www.novell.com/documentation/idm36drivers/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/idm36drivers/index.html) を参照してください。ドライバ固有の情報は各ドライバガイドに記載されています。

3.3 eDirectory のガイドライン

eDirectory は識別ポータルにあたり、Identity Manager ソリューションによって同期されるオブジェクトを保存します。次の項では、eDirectory の展開を計画するのに役立つガイドラインについて説明します。

- ◆ [29 ページのセクション 3.3.1 「eDirectory の Identity Manager オブジェクト」](#)
- ◆ [30 ページのセクション 3.3.2 「Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製」](#)
- ◆ [31 ページのセクション 3.3.3 「スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理」](#)

3.3.1 eDirectory の Identity Manager オブジェクト

次のリストは、eDirectory に保存されている主要な Identity Manager オブジェクト、およびそれらが互いにどのように関係しているのかを示しています。Identity Manager のインストール時に作成されるオブジェクトはありません。Identity Manager オブジェクトは Identity Manager ソリューションの設定時に作成されます。

- ◆ **ドライバセット**：ドライバセットは Identity Manager ドライバおよびライブラリオブジェクトを格納するコンテナです。1つのサーバで一度にアクティブにできるドライバセットは1つだけです。ただし、複数のサーバを1つのドライバセットに関連付ける場合があります。また、1つのドライバは同時に複数のサーバと関連付けることができます。ただし、ドライバは一度に1つのサーバでしか実行できません。そのドライバは他のサーバで無効化しておく必要があります。ドライバセットに関連付けられているすべてのサーバにメタディレクトリサーバがインストールされている必要があります。
- ◆ **ライブラリ**：ライブラリオブジェクトは共通に使用するポリシーのリポジトリで、複数の場所から参照できます。ライブラリはドライバセットに保存されます。ドライバセットのすべてのドライバが参照できるようにライブラリにポリシーを配置できます。
- ◆ **ドライバ**：ドライバは、アプリケーションと識別ポータル間の接続を提供します。また、システム間でデータの同期や共有も可能にします。ドライバはドライバセットに保存されます。
- ◆ **ジョブ**：ジョブは繰り返して実行されるタスクを自動化します。たとえば、ジョブを使用することで、特定の日にアカウントを無効にしたり、ワークフローを開始して会社のリソースに対するユーザのアクセス権の拡張を要求したりするようにシステムを設定できます。ジョブはドライバセットに保存されます。

3.3.2 Identity Manager がサーバで必要とするオブジェクトの複製

Identity Manager 環境で、複数の Identity Manager ドライバを実行するために複数のサーバを呼び出す場合は、計画において、それらの Identity Manager ドライバを実行するサーバ上で特定の eDirectory オブジェクトが複製されていることを確認してください。

読み込み、または同期を行うためにドライバで必要なオブジェクト、および属性のすべてがフィルタされたレプリカに含まれているのであれば、フィルタされたレプリカを使用することもできます。

Identity Manager のドライバオブジェクトに、同期対象のすべてのオブジェクトに対する十分な eDirectory 権限を付与する必要がある点に注意してください。これは、権限を明示的に付与するか、必要な権限を持つオブジェクトと同等のドライバオブジェクトセキュリティを作成することにより行います。

Identity Manager ドライバを実行中の eDirectory サーバ(または、リモートローダを使用している場合はドライバが参照している eDirectory サーバ)はマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカを保持している必要があります。

- ◆ そのサーバのドライバセットオブジェクト。

Identity Manager が実行されている各サーバには、1つのドライバセットオブジェクトが必要です。特定の必要がない限り、複数のサーバを同じドライバセットオブジェクトに関連付けしないでください。

注: ドライバセットオブジェクトを作成すると、デフォルト設定を使用して独立したパーティションが作成されます。ドライバセットオブジェクトには、独立したパーティションを作成することをお勧めします。Identity Manager を機能させるには、ドライバセットオブジェクトの完全なレプリカをサーバが格納している必要があります。ドライバセットオブジェクトがインストールされている場所の完全なレプリカがサーバにある場合、パーティションは不要です。

- ◆ そのサーバのサーバオブジェクト。

サーバオブジェクトは、ドライバがオブジェクトの鍵のペアを生成できるようにするために必要です。さらに、リモートローダの認証にも必要です。

- ◆ ドライバのこのインスタンスを同期するオブジェクト。

ドライバは、オブジェクトのレプリカがドライバと同じサーバにない場合は、それらのオブジェクトを同期できません。実際に、スコープフィルタリングのルールを作成して別途指定しない限り、Identity Manager ドライバはサーバで複製されるすべてのコンテナ内のオブジェクトを同期します。

たとえば、ドライバですべてのユーザオブジェクトを同期したい場合、最も簡単なのは、すべてのユーザのマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカを格納するサーバにあるドライバのインスタンスを1つ使用する方法です。

ただし、多くの環境にはすべてのユーザのレプリカが含まれる1つのサーバがありません。むしろ、ユーザの完全なセットは複数のサーバに分散しています。この場合、次の3つから選択します。

- ◆ **ユーザを1つのサーバに集約します。** 既存のサーバにレプリカを追加することにより、すべてのユーザを保持する1つのサーバを作成できます。必要なユーザオブジェクトおよび属性がフィルタされたレプリカに含まれている限り、必要に応じてフィルタされたレプリカを使用し、eDirectory データベースのサイズを小さくできます。

- ◆ **スコープフィルタリングを行って、複数のサーバ上にあるドライバの複数のインスタンスを使用します。**ユーザを1つサーバに集約したくない場合は、どのサーバセットにすべてのユーザを保持するかを判別し、それらの各サーバに Identity Manager ドライバの1つのインスタンスを設定する必要があります。

ドライバの別々のインスタンスが同じユーザを同期しないようにするには、「スコープフィルタリング」を使用して、ドライバの各インスタンスが同期するユーザを定義する必要があります。スコープフィルタリングは、特定のコンテナに対するドライバの管理範囲を制限するルールを各ドライバに追加することを意味しています。詳細については、[31 ページの「スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理」](#)を参照してください。

- ◆ **スコープフィルタリングを行わずに、複数のサーバにあるドライバの複数のインスタンスを使用します。**フィルタされたレプリカを使用せずに、複数のサーバでドライバの複数のインスタンスを実行する場合は、ドライバが同じ識別ボールド内でさまざまなオブジェクトセットを処理できるようにするポリシーを、複数のドライバインスタンスで定義する必要があります。
- ◆ テンプレートの使用を選択した場合は、ユーザの作成時にドライバで使用されるテンプレートオブジェクト。

Identity Manager ドライバが、ユーザの作成時に eDirectory テンプレートオブジェクトを指定するよう求めることはありません。ただし、eDirectory でユーザを作成する際にドライバがテンプレートを使用するように指定した場合は、ドライバが実行されているサーバでテンプレートオブジェクトを複製する必要があります。

- ◆ Identity Manager ドライバがユーザの管理に使用するすべてのコンテナ。
たとえば、無効になったユーザアカウントを保持する **Inactive Users** という名前のコンテナを作成した場合、ドライバが実行されているサーバ上にそのコンテナのマスタレプリカまたは読み書き可能レプリカ（可能であればマスタレプリカ）が必要です。
- ◆ ドライバが参照する必要がある他のすべてのオブジェクト（たとえば、Avaya PBX ドライバ用の作業順序オブジェクト）。

他のオブジェクトがドライバによって読み込まれるだけで変更はされない場合、サーバ上にあるそれらのオブジェクトのレプリカは読み込み専用レプリカにすることができます。

3.3.3 スコープフィルタリングを使用した異なるサーバ上のユーザの管理

スコープフィルタリングは、特定のコンテナに対するドライバのアクション範囲を制限するルールを各ドライバに追加することを意味しています。スコープフィルタリングを使用する必要のある2つの状況を次に示します。

- ◆ ドライバにより、特定のコンテナ内のユーザだけを同期する。

Identity Manager ドライバは、デフォルトでは、実行されているサーバで複製されるすべてのコンテナ内にあるオブジェクトを同期します。範囲を絞り込むには、スコープフィルタリングルールを作成する必要があります。

- ◆ Identity Manager ドライバによりすべてのユーザを同期するが、一部のユーザは同じサーバ上で複製しない。

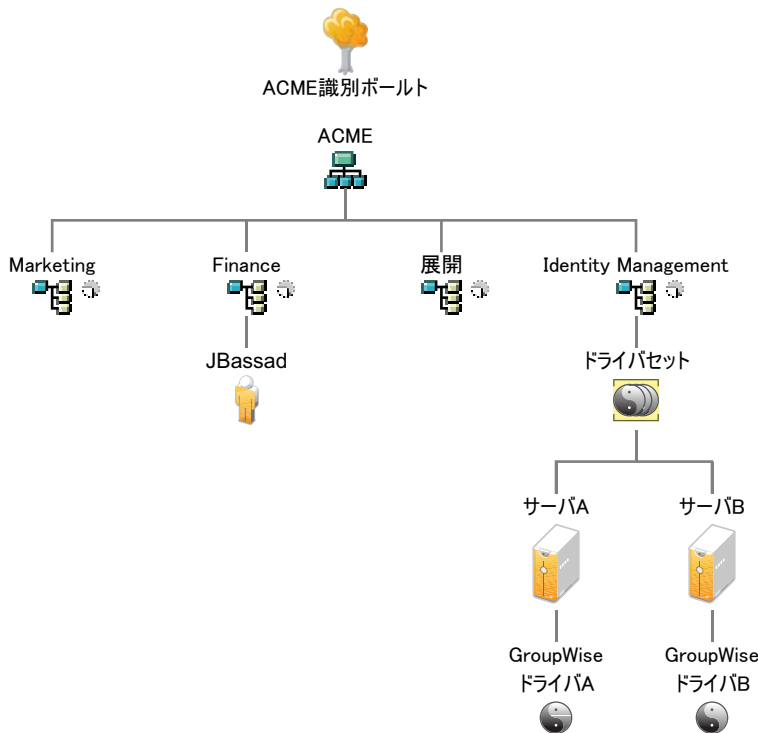
すべてのユーザを1つのサーバ上で複製せずに同期する場合は、どのサーバセットですべてのユーザを保持するかを決定し、それらの各サーバで Identity Manager ドライバのインスタンスを作成する必要があります。ドライバの2つのインスタンスが同じユーザを同期しないようにするには、スコープフィルタリングを使用して、ドライバの各インスタンスが同期するユーザを定義する必要があります。

注: スコープフィルタリングは、サーバのレプリカが今のところ重複していない場合でも使用してください。今後、レプリカがサーバに追加され、意図せずに重複が発生する可能性があります。スコープフィルタリングを適切な場所に設定すると、今後レプリカがサーバに追加された場合でも、Identity Manager ドライバは同じサーバを同期しなくなります。

次に、スコープフィルタリングの使用例を示します。

次の図は、ユーザを保持する3つのコンテナ (Marketing、Finance、および Development) が存在する識別ポータルを示しています。また、ドライバセットを保持する Identity Management コンテナも示しています。これらの各コンテナは、独立したパーティションです。

図 3-4 スコープフィルタリングのツリーの例



この例では、33 ページの 図 3-5 にもあるように Identity Manager 管理者は2つの識別ポータルサーバ (Server A および Server B) を持っています。どちらのサーバにも、すべてのユーザのコピーが含まれているわけではありません。各サーバには、3つのパーティションのうち2つが含まれているため、サーバが保持している対象の範囲が重複しています。

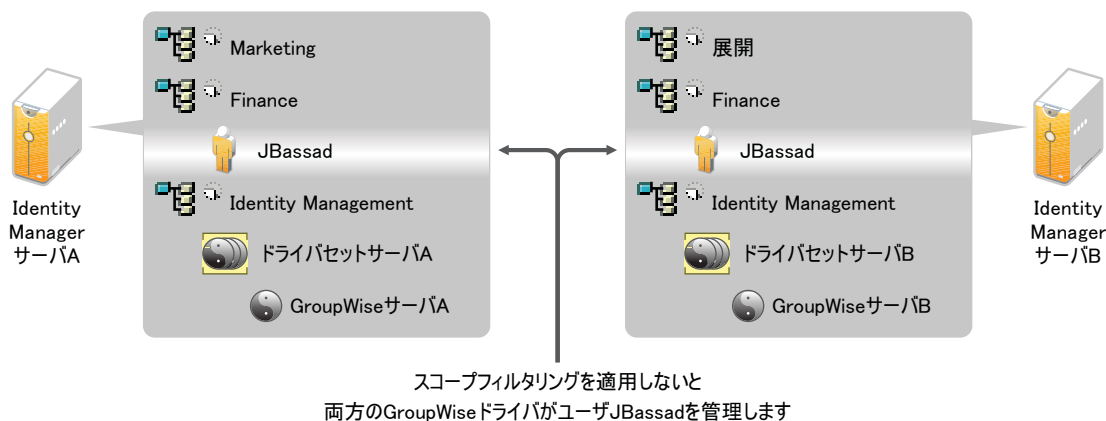
管理者にとっては、ツリー内のすべてのユーザを GroupWise ドライバにより同期することが望ましいのですが、すべてのユーザのレプリカを1つのサーバに集約することは望ましくありません。代わりに、GroupWise ドライバの2つのインスタンスを使用する（各サーバに1つのインスタンスを使用）よう指定します。Identity Manager をインストールして、各 Identity Manager サーバで GroupWise ドライバを設定します。

Server A は、Marketing コンテナおよび Finance コンテナのレプリカを保持しています。このサーバには Identity Management コンテナのレプリカもあり、Server A のドライバセットおよび Server A の GroupWise Driver オブジェクトを保持しています。

Server B は Development および Finance コンテナのレプリカを保持し、Identity Management コンテナは Server B のドライバセットおよび Server B の GroupWise Driver オブジェクトを保持しています。

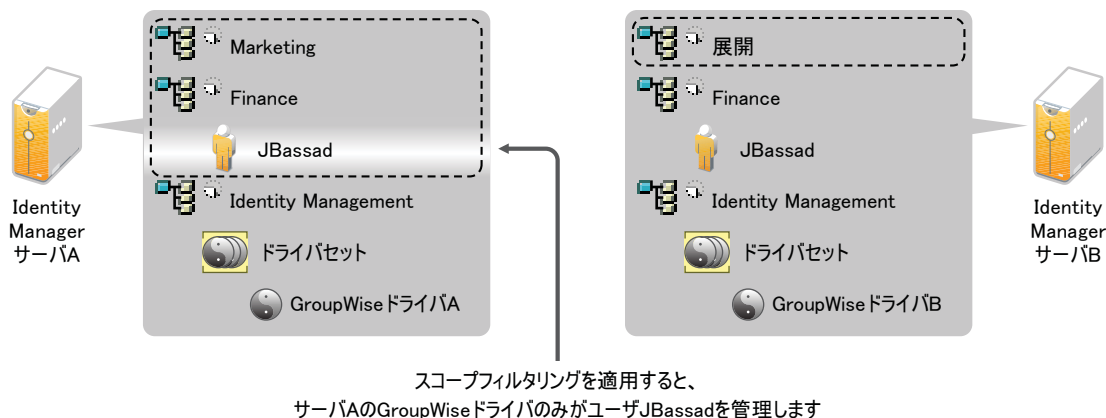
Server A と Server B はどちらも Finance コンテナのレプリカを保持しているため、どちらのサーバも Finance コンテナにあるユーザ JBassad を保持しています。スコープフィルタリングを設定しないと、GroupWise Driver A および GroupWise Driver B の両方により JBassad が同期されます。

図 3-5 レプリカが重複しており、スコープフィルタリングを使用していない2つのサーバ



次の図は、スコープフィルタリングで各コンテナを同期するドライバを定義することにより、ドライバの両方のインスタンスで同じユーザを管理するのを回避する様子を示しています。

図 3-6 スコープフィルタリングによる、各コンテナを同期するドライバの定義



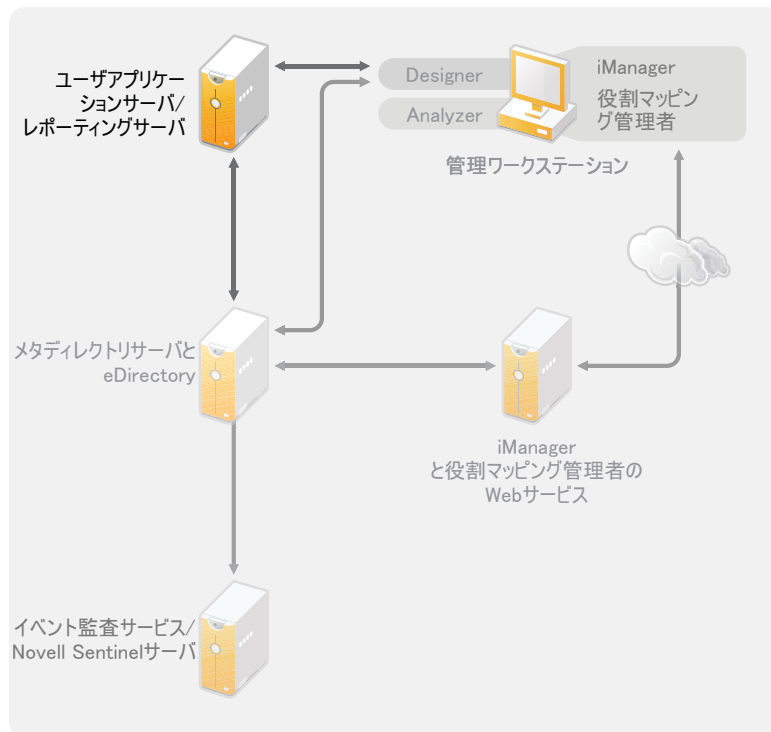
Identity Manager には、定義済みルールが付属しています。スコープフィルタリングに役立つルールは2つあります。「イベント変換 - スコープフィルタリング - 包含サブツリー」および「イベント変換 - スコープフィルタリング - 除外サブツリー」は、『[Identity Manager 4.0.1 のポリシーの理解](#)』で説明されています。

この例では、Server A および Server B には定義済みルール **Include Subtrees** を使用します。指定されたコンテナのユーザだけを同期するように、各ドライバには異なる範囲を定義します。Server A は、Marketing および Finance を同期します。Server B は、Development を同期します。

3.4 ユーザアプリケーション

図 3-7 に示すように、ユーザアプリケーションは専用のサーバで実行する必要があります。複数のユーザアプリケーションサーバが必要なことがあります。

図 3-7 ユーザアプリケーション

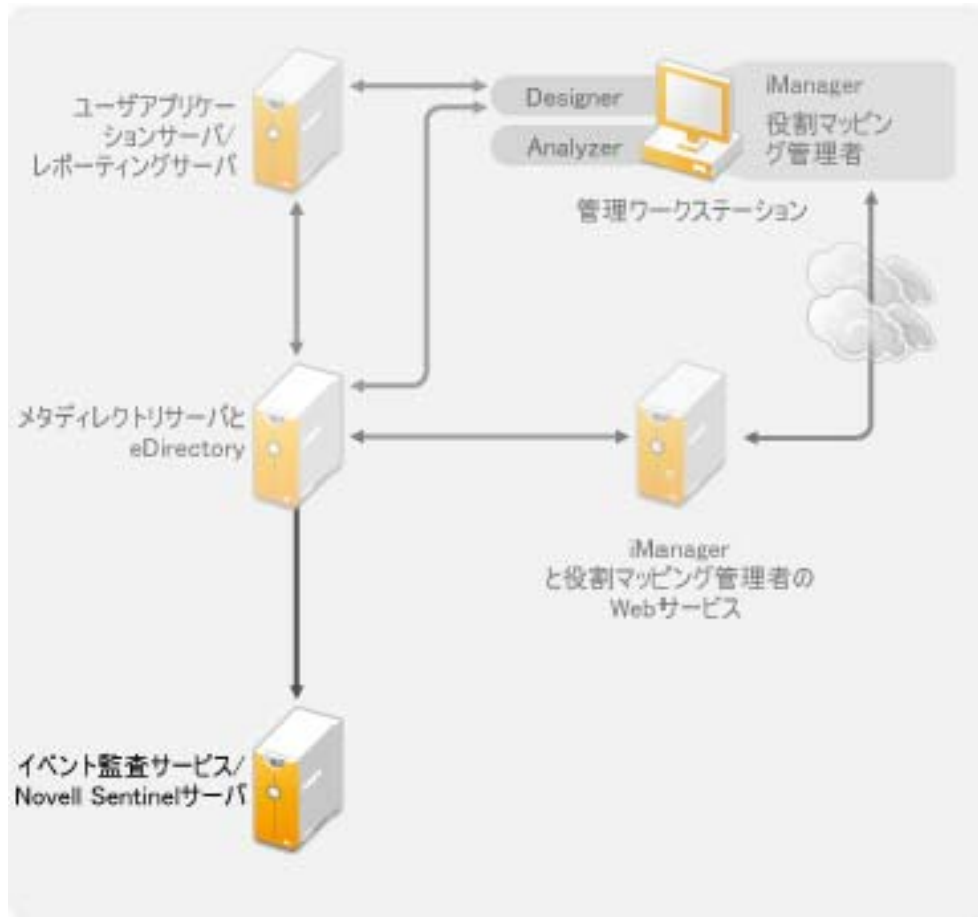


『ユーザアプリケーション管理ガイド』の「パフォーマンス調整 (<http://www.novell.com/documentation/idmrpbm40/agpro/data/b2gx735.html>)」項に記載されている情報を参考にし、ユーザアプリケーションサーバの最適な設定方法を調べます。

3.5 監査とレポートのガイドライン

Identity Manager ソリューションの一環として監査とレポートが必要である場合、Identity Audit または Novell Sentinel を実装する必要があります。図 3-8 に示すように、独自のサーバ上でイベント監視サービスか Sentinel のいずれかを実行する必要があります。ソリューションに必要なサーバの数は、現在の環境内にあるドライバの数と、監査するように定義したイベントの数によって決まります。

図 3-8 Sentinel



インストール



以下のセクションでは、統合インストーラを使用せずに Identity Manager システムをインストールするのに必要な情報が含まれています。簡単なインストールおよび環境設定を行う場合、個別にコンポーネントをインストールする代わりに新しい統合インストーラを使用してください。統合インストーラの詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 統合インストールガイド](#)』を参照してください。

ただし、1 つ以上の Identity Manager コンポーネントを個別にインストールする必要がある場合、以下のセクションの情報を使用して個別のインストールを完了します。

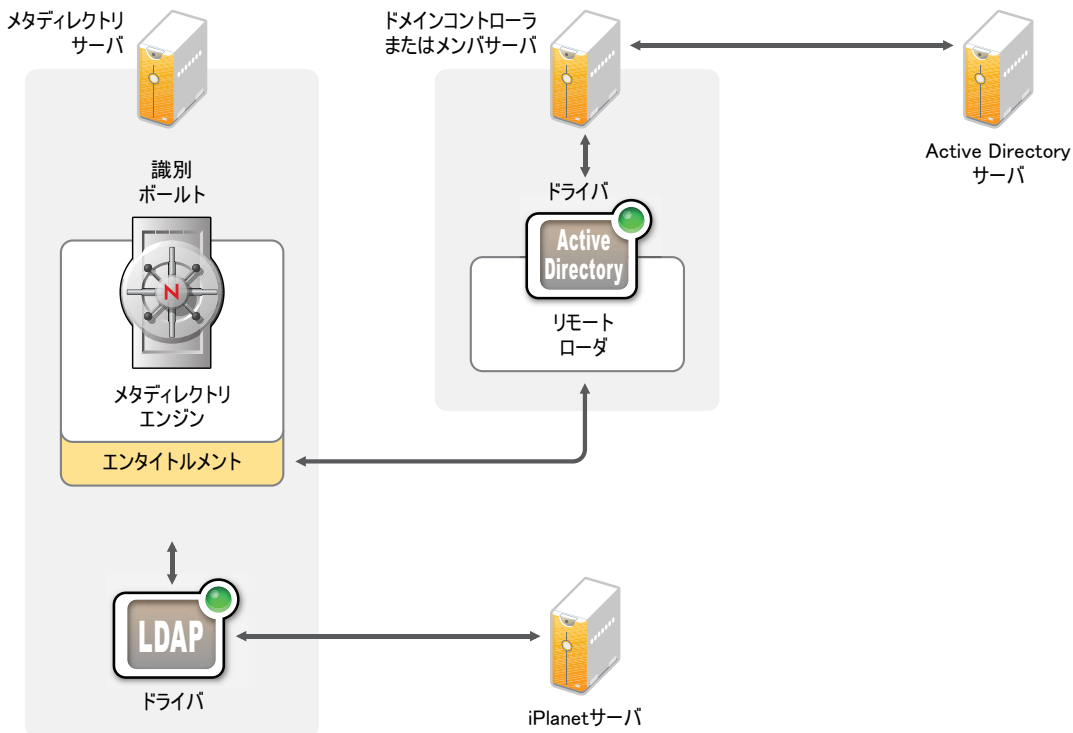
- ◆ [39 ページの第 4 章「基本的な Identity Manager システムのチェックリスト](#)」
- ◆ [43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所](#)」
- ◆ [47 ページの第 6 章「システム要件](#)」
- ◆ [59 ページの第 7 章「Identity Manager のインストール](#)」
- ◆ [75 ページの第 8 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする](#)」
- ◆ [79 ページの第 9 章「Identity Manager のトラブルシューティング](#)」
- ◆ [85 ページの第 10 章「新機能](#)」

基本的な Identity Manager システム のチェックリスト

すべての機能の利点を生かすように Identity Manager を設定するには、多くの異なる方法があります。図 4-1 は、Identity Manager の基本的な構成を表しています。この構成では、データを同期することによりユーザをプロビジョニングしています。Identity Manager の設定とは関係なく、常に基本システムから開始してください。

Identity Manager システムを設定する場合、このチェックリストを使用して、すべてのステップが完了していることを確認します。

図 4-1 基本的な Identity Manager システム



- ◆ 40 ページのセクション 4.1 「前提条件」
- ◆ 40 ページのセクション 4.2 「計画」
- ◆ 40 ページのセクション 4.3 「インストール」
- ◆ 41 ページのセクション 4.4 「リモートローダによるドライバ環境設定」
- ◆ 41 ページのセクション 4.5 「リモートローダを使用しないドライバ環境設定」
- ◆ 42 ページのセクション 4.6 「追加の設定」

4.1 前提条件

- システムが [47 ページの第 6 章「システム要件」](#) にリストされているシステム要件を満たしているかどうかを確認します。

4.2 計画

計画は、Identity Manager の実装および展開を成功させる上での鍵です。

- 開発環境を作成します。Identity Manager システムにアクセスして、Identity Manager ソリューションを評価することが重要です。運用環境を変更する前に、開発環境ですべてのテストおよび開発を行います。詳細については、[11 ページの第 1 章「開発環境のセットアップ」](#) を参照してください。
- Identity Manager の展開のプロジェクト計画を作成します。プロジェクト計画には、主なビジネスプロセスの定義、それらのプロセスを自動化する Identity Manager ソリューションの作成、および技術上の実装計画の作成が含まれます。Identity Manager の展開を成功させるには、プロジェクト計画が必要です。詳細については、[13 ページの第 2 章「プロジェクト計画の作成」](#) を参照してください。
- プロジェクト計画を作成したら、Analyzer を使用してデータをクリーンアップし、同期のために準備します。詳細については、『[Analyzer 4.0.1 for Identity Manager Administration Guide](#)』を参照してください。

4.3 インストール

- Analyzer をインストールします。詳細については、[59 ページのセクション 7.1「Analyzer のインストール」](#) を参照してください。
- Designer をインストールします。詳細については、[60 ページのセクション 7.2「Designer のインストール」](#) を参照してください。
- eDirectory をインストールします。詳細については、[61 ページのセクション 7.3「eDirectory をインストールする」](#) を参照してください。
- iManager をインストールします。詳細については、[61 ページのセクション 7.4「iManager のインストール」](#) を参照してください。
- メタディレクトリサーバおよびドライバをインストールします。詳細については、[59 ページの第 7 章「Identity Manager のインストール」](#) を参照してください。
- Identity Manager をアクティベートします。詳細については、[75 ページの第 8 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#) を参照してください。
- (オプション) Identity Manager システム用のエンタイトルメントを設計して作成します。

エンタイトルメントは、単一のユーザまたはグループに対して定義した条件のセットで、複数のドライバに適用できます。条件を満たすと、エンタイトルメントはイベントを開始し、ビジネスリソースへのアクセス権を付与または取り消します。エンタイトルメントを使用することで、リソースを付与および取り消す際の制御と自動化のレベルが強化されます。

エンタイトルメントの主な利点は、ビジネスロジックを作成および定義し、そのロジックを複数のドライバに適用できる点です。変更が必要な場合は、各ドライバではなくエンタイトルメントで変更を行います。

エンタイトルメントは次の3つのエージェントによって実装されます。

- ◆ エンタイトルメントサービスドライバを使用した役割ベースのエンタイトルメント
- ◆ ワークフロー
- ◆ 役割ベースのプロビジョニングモジュール

エンタイトルメントの詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 エンタイトルメントガイド](#)』を参照してください。

4.4 リモートローダによるドライバ環境設定

リモートローダを使用すると、接続システムに eDirectory をインストールしていなくても、そのシステムと情報を同期できます。リモートローダはメタディレクトリサーバと情報を同期し、メタディレクトリサーバが識別ポータルにデータを保存します。Identity Manager は識別ポータルとして eDirectory を使用します。

- ❑ 接続システムと通信するマシンにリモートローダをインストールします。リモートローダは、接続システムとメタディレクトリサーバの間で通信するため、Identity Manager は eDirectory がインストールされていないマシンと通信することができます。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 リモートローダガイド](#)』の「[リモートローダのインストール](#)」を参照してください。
- ❑ ドライバ用のリモートローダを設定します。特定のドライバと通信するには、リモートローダの特別なインスタンスを定義します。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 リモートローダガイド](#)』の「[リモートローダの設定](#)」を参照してください。
- ❑ リモートローダと通信するようにドライバを設定します。各ドライバにはドライバガイドが用意されています。ドライバに固有の情報については、[Identity Manager 4.0.1 ドライバマニュアルの Web サイト \(http://www.novell.com/documentation/idm401drivers/\)](#) を参照してください。
- ❑ (オプション) ドライバのエンタイトルメントを有効にします。適切なポリシーが設定されていることを確認し、エンタイトルメントを実行します。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 エンタイトルメントガイド](#)』を参照してください。
- ❑ 現在の環境にある各ドライバに対してこれらのステップを繰り返します。

4.5 リモートローダを使用しないドライバ環境設定

- ❑ ドライバを作成して設定します。各ドライバにはドライバガイドが用意されています。ドライバに固有の情報については、[Identity Manager 4.0.1 ドライバマニュアルの Web サイト \(http://www.novell.com/documentation/idm401drivers/\)](#) を参照してください。
- ❑ (オプション) ドライバのエンタイトルメントを有効にします。適切なポリシーが設定されていることを確認し、エンタイトルメントを実行します。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 エンタイトルメントガイド](#)』を参照してください。
- ❑ 現在の環境にある各ドライバに対してこれらのステップを繰り返します。

4.6 追加の設定

基本の Identity Manager システムがインストールおよび設定されている場合、次の機能を追加できます。

- **パスワード管理** : Identity Manager を使用してパスワードを管理する場合、追加設定をいくつか行う必要があります。『[Identity Manager 4.0.1 パスワード管理ガイド](#)』の「[パスワード管理チェックリスト](#)」を使用して、すべての設定ステップが完了していることを確認します。
- **役割の管理** : 1つの場所ではなく異なるシステム間で役割を管理する場合に備えて、Identity Manager には役割マッピング管理者と呼ばれるツールが含まれています。このツールを使用すると、IT インフラストラクチャを理解することなくビジネス役割をシステム間でマッピングすることができます。詳細については、『[Identity Manager Role Mapping Administrator 4.0.1 インストールおよび環境設定ガイド](#)』を参照してください。
- **Roles Based Provisioning** : Identity Manager ソリューションに Roles Based Provisioning を追加する場合、『[Identity Manager Roles Based Provisioning Module 4.0.1 ユーザーアプリケーション: インストールガイド](#)』の「[インストールチェックリスト](#)」を使用し、環境設定のすべての手順が完了したか確認します。
- **監査とレポート** : 監査とレポートを Identity Manager ソリューションに追加すると、ビジネスポリシーが会社のポリシーに準拠していることを示す手段が提供されます。監査とレポートを使用するには、Identity Reporting Module または Novell Sentinel を Identity Manager ソリューションに追加できます。Identity Reporting モジュールの詳細については、『[Identity Reporting Module Guide](#)』を参照してください。Novell Sentinel の詳細については、『[Novell Sentinel 用 Identity Manager 4.0.1 レポートガイド](#)』を参照してください。

Identity Manager の入手場所

5

Identity Manager 4.0.1 は、Advanced Edition および Standard Edition が利用可能です。それぞれに個別の ISO イメージが存在します。Identity Manager 4.0.1 Advanced Edition には、エンタープライズクラスのユーザプロビジョニング向けの機能一式が含まれます。Identity Manager Standard Edition には、お客様のさまざまな要件を満たすために、Identity Manager Advanced Edition で利用できる機能のサブセットが含まれています。Standard Edition では、Identity Manager の以前のバージョンに存在したすべての機能がそのまま提供されます。Identity Manager 4.0.1 Advanced Edition および Standard Edition の機能の詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 Overview Guide](#)』の「[Identity Manager 4.0.1 Overview Guide](#)」を参照してください。

Identity Manager の評価版をダウンロードし、90 日間無料で使用できます。ただし、Identity Manager コンポーネントは、インストール後 90 日以内にアクティベートしないと、シャットダウンされます。90 日間またはそれ以降、いつでも製品ライセンスの購入と Identity Manager のアクティベーションを選択することも可能です。詳細については、[75 ページの第 8 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#)を参照してください。

Identity Manager とそのサービスをダウンロードする

- 1 **Novell のダウンロード Web サイト (<http://download.novell.com>)** にアクセスします。
- 2 [製品または技術] メニューで、[Novell Identity Manager] を選択し、[検索] をクリックします。
- 3 Novell Identity Manager のダウンロードページで、目的のファイルの横にある [ダウンロード] ボタンをクリックします。[表 5-1](#) には各ファイルの説明が含まれています。

要件に基づいて、適切な ISO イメージを選択できます。各 ISO には、32 ビット版と 64 ビット版の製品が含まれています。

重要 : Identity Manager Advanced Edition から Standard Edition に移行するには、Advanced Edition をアンインストールしてから、Standard Edition の ISO イメージを Identity Manager のメディアからインストールします。Standard Edition から Advanced Edition にアップグレードするには、Identity Manager Advanced Edition の ISO イメージを使用します。Advanced Edition にアップグレードするには、正しいアクティベーションを適用する必要があります。Standard Edition から Advanced Edition へのアップグレードに関する詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 Upgrade and Migration Guide](#)』を参照してください。

- 4 画面の指示に従って、ファイルをコンピュータ上のディレクトリにダウンロードします。
- 5 必要なすべてのファイルがダウンロードされるまで、[ステップ 3](#) 以降を繰り返します。
- 6 ダウンロードされた .iso ファイルをボリュームとしてマウントするか、.iso ファイルを使用してソフトウェアの DVD を作成します。作成したメディアの有効性をまだ確認していない場合は、[Media Check (メディアチェック)] オプションを使用してそれを確認できます。

注: Linux の ISO ファイルは、ファイルサイズが大きいため、片面 2 層の DVD にコピーする必要があります。

表 5-1 Identity Manager の ISO イメージ

ISO	プラットフォーム	説明
Identity_Manager_4.0.1_Windows_Advanced.iso	Windows	メタディレクトリサーバ、Designer、iManager、役割マッピング管理者、Analyzer、Identity Reporting Module、および Roles Based Provisioning Module の DVD イメージを含みます。
Identity_Manager_4.0.1_Windows_Standard.iso	Windows	メタディレクトリサーバ、Designer、iManager、Analyzer、Identity Reporting Module、および Roles Based Provisioning Module の DVD イメージを含みます。
Identity_Manager_4.0.1_Linux_Advanced.iso	Linux	メタディレクトリサーバ、Designer、iManager、役割マッピング管理者、Analyzer、Identity Reporting Module、および Roles Based Provisioning Module の DVD イメージを含みます。
Identity_Manager_4.0.1_Linux_Standard.iso	Linux	メタディレクトリサーバ、Designer、iManager、Analyzer、Identity Reporting Module、および Roles Based Provisioning Module の DVD イメージを含みます。
Identity_Manager_4.0.1_Solaris_Advanced.iso	Solaris	メタディレクトリサーバの DVD イメージを含みます。その他のコンポーネントは、Solaris プラットフォームではサポートされていません。
Identity_Manager_4.0.1_Solaris_Standard.iso	Solaris	メタディレクトリサーバの DVD イメージを含みます。その他のコンポーネントは、Solaris プラットフォームではサポートされていません。

Identity Manager の購入には、サービスドライバといくつかの一般的なドライバのアクティベーションが含まれています。

- ◆ サービスドライバ: 以下は、メタディレクトリサーバを起動すると有効になるサービスドライバのリストです。
 - ◆ データ収集サービス
 - ◆ エンタイトルメントサービス
 - ◆ ID プロバイダ
 - ◆ ループバックサービス
 - ◆ Managed System Gateway
 - ◆ 手動タスクサービス
 - ◆ Null サービス
 - ◆ 役割およびリソースサービス

- ◆ ユーザアプリケーション
- ◆ WorkOrder
- ◆ **共通ドライバ**: メタディレクトリサーバを起動すると有効になる共通ドライバのリストを次に示します。
 - ◆ Active Directory
 - ◆ ADAM
 - ◆ eDirectory
 - ◆ GroupWise
 - ◆ LDAP
 - ◆ Lotus Notes

他のすべての Identity Manager ドライバのアクティベーションは別途購入する必要があります。ドライバのアクティベーションは、Identity Manager 統合モジュールとして販売されています。Identity Manager 統合モジュールには、1 つまたは複数のドライバを含めることができます。購入した Identity Manager 統合モジュールごとにプロダクトアクティベーションキーが提供されます。詳細については、[Identity Manager ドライバ製品の Web ページ \(http://www.novell.com/products/identitymanager/drivers/\)](http://www.novell.com/products/identitymanager/drivers/) を参照してください。

Identity Manager Advanced Edition および Standard Edition では、別々のアクティベーションが利用可能です。詳細については、75 ページの「[Novell Identity Manager 製品を有効にする](#)」を参照してください。Identity Manager Advanced Edition から Standard Edition への移行はサポートされません。Identity Manager Standard Edition を使用するには、Identity Manager のメディアからインストールする必要があります。

ユーザアプリケーションの Roles Based Provisioning Module は、Identity Manager を購入すると付属しています。これは、ユーザの ID を管理するために、強力な役割ベースの承認ワークフローを追加します。

Identity Manager の購入には、Identity Manager ソリューションを設計、作成、および管理するのに役立つ次のようないくつかのツールが含まれています。

- ◆ Analyzer
- ◆ Designer
- ◆ iManager
- ◆ 役割マッピング管理者

注: Identity Manager 4.0.1 Standard Edition では、役割マッピング管理者は利用できません。

Identity Reporting Module は、Identity Manager ソリューションを監査しそのソリューションに関するレポートを作成できる、Identity Manager の別のコンポーネントです。レポートを使用すると、ビジネスのコンプライアンス規制に従うのに役立ちます。

Identity Manager コンポーネントの詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 概要ガイド](#)』を参照してください。

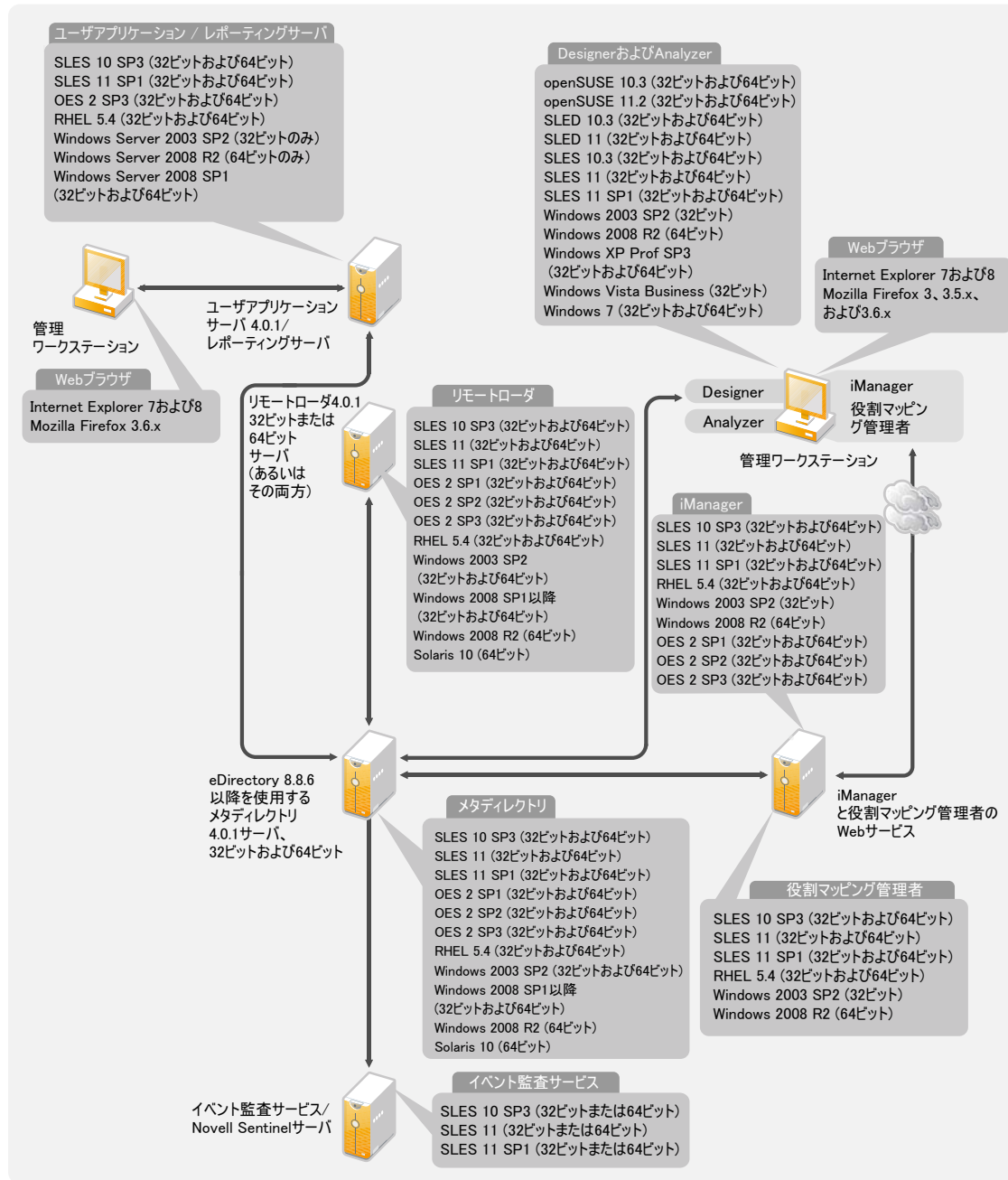
システム要件

6

Novell Identity Manager コンポーネントは複数のシステムおよびプラットフォームにインストールすることができます。

図 6-1 は、サポートされているプラットフォームおよびシステムを示しています。

図 6-1 Identity Manager コンポーネントのシステム要件



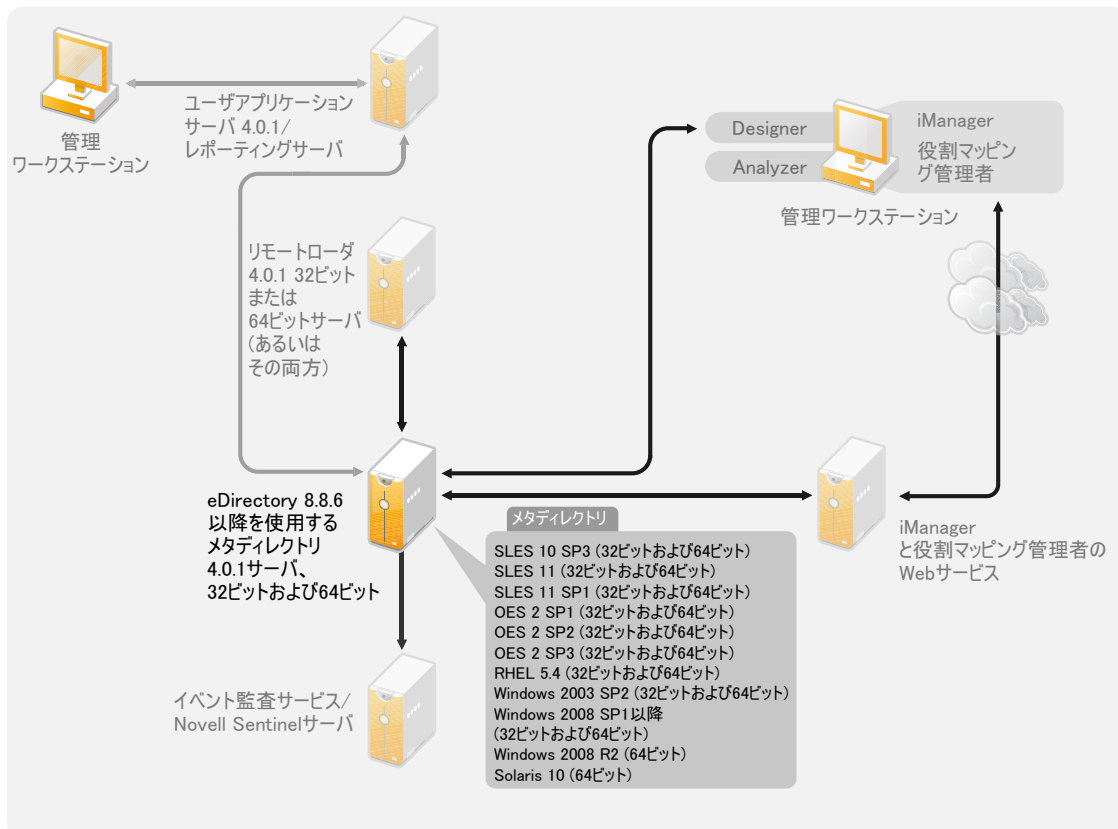
システム設定によっては、適切なシステムに Identity Manager コンポーネントをインストールするために、Identity Manager のインストールプログラムを複数回実行しなければならない場合があります。

- ◆ 48 ページのセクション 6.1 「eDirectory と iManager」
- ◆ 49 ページのセクション 6.2 「メタディレクトリサーバ」
- ◆ 51 ページのセクション 6.3 「リモートローダ」
- ◆ 53 ページのセクション 6.4 「ユーザアプリケーション」
- ◆ 54 ページのセクション 6.5 「監査とレポート」
- ◆ 55 ページのセクション 6.6 「ワークステーション」
- ◆ 57 ページのセクション 6.7 「リソースの要件」

6.1 eDirectory と iManager

Identity Manager では、eDirectory と iManager をインストールする必要があります。これらの製品は、Identity Manager の基礎を提供し、Identity Manager Advanced Edition の ISO イメージに含まれています。図 6-2 は、これらのコンポーネントを示しています。

図 6-2 Identity Manager の基本製品



これらの製品の次のバージョンが必要です。

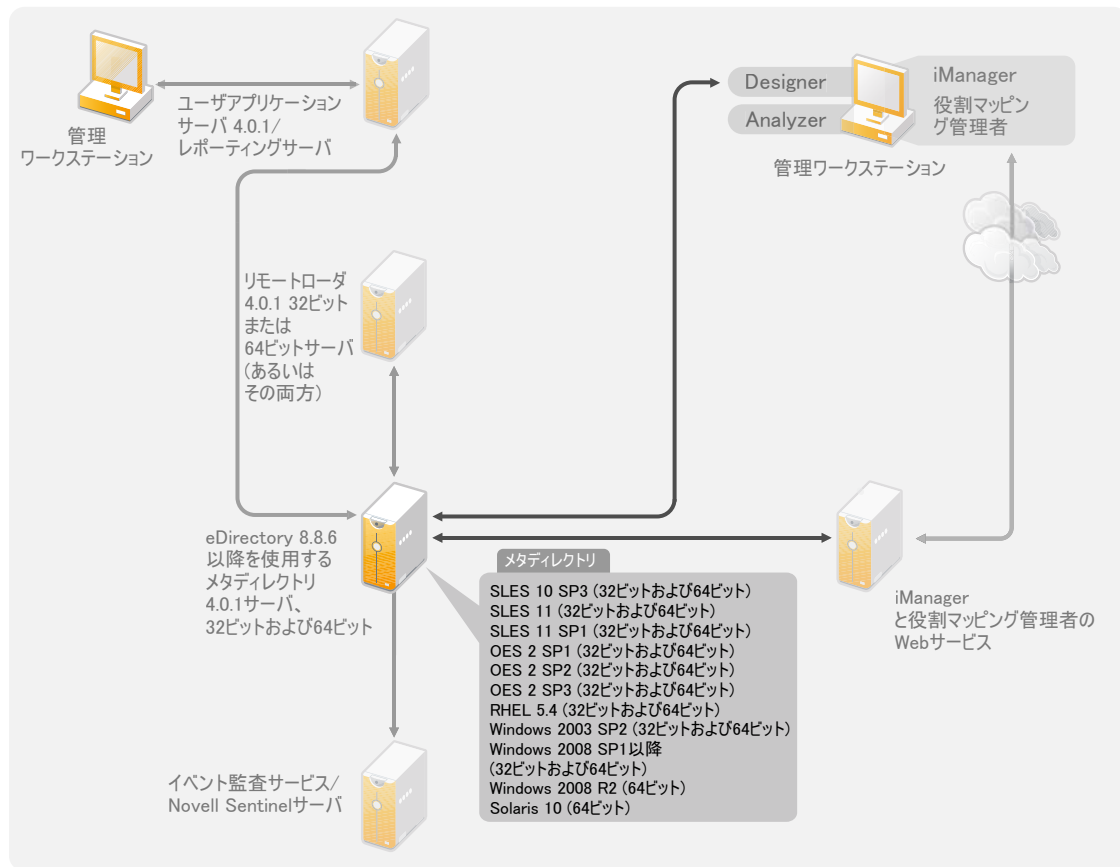
- ◆ eDirectory 8.8.6 以降 (32 ビットまたは 64 ビット)
- ◆ iManager 2.7.4

eDirectory のシステム要件については、『[Novell eDirectory 8.8 Installation Guide \(http://www.novell.com/documentation/edir88/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/edir88/index.html)』を参照してください。iManager のシステム要件については、『[iManager 2.7 Installation Guide \(http://www.novell.com/documentation/imanager27/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/imanager27/index.html)』の「[Installing iManager \(http://www.novell.com/documentation/imanager27/imanager_install_274/data/alw39eb.html\)](http://www.novell.com/documentation/imanager27/imanager_install_274/data/alw39eb.html)」セクションを参照してください。

6.2 メタディレクトリサーバ

メタディレクトリサーバは、リモートローダを使用して設定されているかどうかにかかわらず、ドライバからのイベントを処理します。サポートされているオペレーティングシステムのリストについては、[図 6-3](#) を参照してください。

図 6-3 メタディレクトリサーバでサポートされているオペレーティングシステム



メタディレクトリサーバのインストール中に、インストールされている eDirectory のバージョンがインストールプログラムによって検出されます。

注 : eDirectory 8.8.6 以降 (32 ビットまたは 64 ビット) がインストールされている必要があります。インストールされていない場合、インストールプログラムが実行されません。

- ◆ 50 ページのセクション 6.2.1 「サポートされているプロセッサ」
- ◆ 50 ページのセクション 6.2.2 「サーバオペレーティングシステム」

6.2.1 サポートされているプロセッサ

このリストのプロセッサは、Identity Manager のテスト中に使用されます。SPARC プロセッサは Solaris のテストに使用されます。

Linux (Red Hat および SUSE Linux Enterprise Server) および Windows オペレーティングシステムでサポートされている 32 ビットプロセッサは次のとおりです。

- ◆ Intel x86-32
- ◆ AMD x86-32

Linux (Red Hat および SUES Linux Enterprise Server) および Windows オペレーティングシステムでサポートされている 64 ビットプロセッサは次のとおりです。

- ◆ Intel EM64T
- ◆ AMD Athlon64
- ◆ AMD Opteron

すべてのオペレーティングシステムには最新のサポートパックを適用している必要があります。

6.2.2 サーバオペレーティングシステム

メタディレクトリサーバは、64 ビットオペレーティングシステムに 32 ビットアプリケーションとしてインストールできます。表 6-1 は、メタディレクトリサーバが動作可能な、サポートされているサーバオペレーティングシステムのリストを示しています。

表 6-1 サポートされているサーバオペレーティングシステム

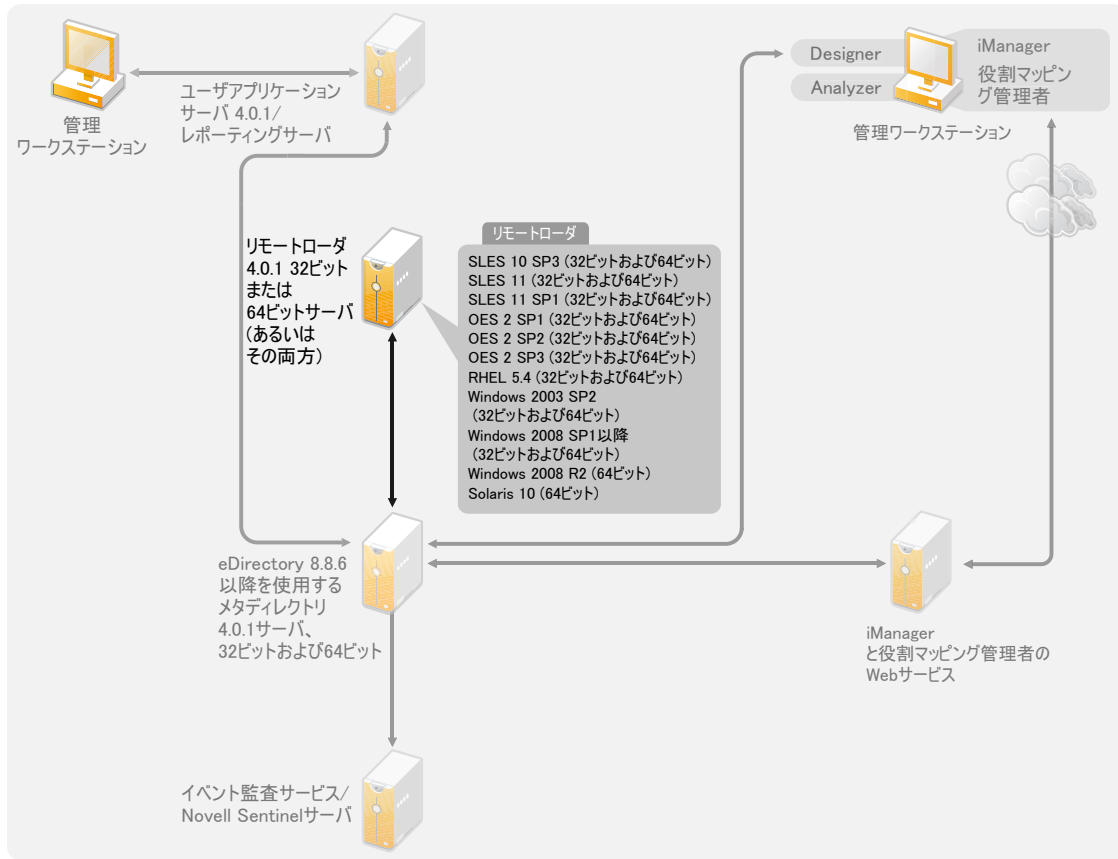
サーバオペレーティングシステムのバージョン	注
Windows Server 2003 SP2 以降 (32 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードでのみ実行されます。
Windows 2008 以降のサポートパック (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。
Windows Server 2008 R2 (64 ビット)	メタディレクトリサーバは 64 ビットモードでのみ実行されます。
Red Hat 5.4 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
SUSE Linux Enterprise Server 10 SP3 以降のサポートパック (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。

サーバオペレーティングシステムのバージョン	注
SUSE Linux Enterprise Server 11 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
OES 2 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行されます。
OES 2 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行されます。
OES 2 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Solaris 10 (64 ビット)	メタディレクトリサーバは 64 ビットモードでのみ実行されます。
Xen	Xen は、Xen 仮想マシンで SLES 10/11 がゲストオペレーティングシステムとして並行仮想化モードで実行されている場合にサポートされます。
VMware ESX	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。
Red Hat Enterprise Linux 5 仮想化	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。
Hyper-V を使用した Windows Server 2008 R2 仮想化	メタディレクトリサーバは 32 ビットモードまたは 64 ビットモードのいずれかで実行します。

6.3 リモートローダ

リモートローダを使用すると、Identity Manager ソリューションを柔軟に設定できます。これは、32 ビットと 64 ビット両方のサポートを提供します。デフォルトの設定では、インストールプログラムによってオペレーティングシステムのバージョンが検出され、該当するバージョンのリモートローダがインストールされます。

図 6-4 リモートローダでサポートされているオペレーティングシステム



メタディレクトリサーバが 32 ビットアプリケーションとして 64 ビットオペレーティングシステムにインストールされている場合、同じマシンに 32 ビットと 64 ビットの両方のリモートローダをインストールすることができます。

表 6-2 は、リモートローダでサポートされているオペレーティングシステムを示しています。

表 6-2 リモートローダでサポートされているオペレーティングシステム

サーバオペレーティングシステムのバージョン	注
Windows Server 2003 SP2 (32 ビット版および 64 ビット版)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Windows Server 2008 以降のサポートパック (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Windows Server 2008 Server R2 (64 ビット)	リモートローダは 64 ビットモードでのみ実行します。
Red Hat 5.4 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。

サーバオペレーティングシステムのバージョン	注
SUSE Linux Enterprise Server 10 SP3 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
SUSE Linux Enterprise Server 11 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。Novell では、Identity Manager をインストールする前に、製造元の自動更新機能を使用して最新の OS パッチを適用することをお勧めします。
OES 2 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
OES 2 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
OES 2 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Solaris 10 (64 ビット)	リモートローダは 64 ビットモードでのみ実行します。
Xen	Xen は、Xen 仮想マシンで SLES 10/11 がゲストオペレーティングシステムとして並行仮想化モードで実行されている場合にサポートされます。
VMware ESX (64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Red Hat Enterprise Linux 5 仮想化 (64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。
Hyper-V を使用した Windows Server 2 R64 仮想化 (64 ビット)	リモートローダは 32 ビットモードおよび 64 ビットモードで実行します。

Java リモートローダは、ネイティブのリモートローダが利用できないプラットフォームでサポートされています。.NET リモートローダは、.NET プラットフォームバージョン 2 でサポートされています。

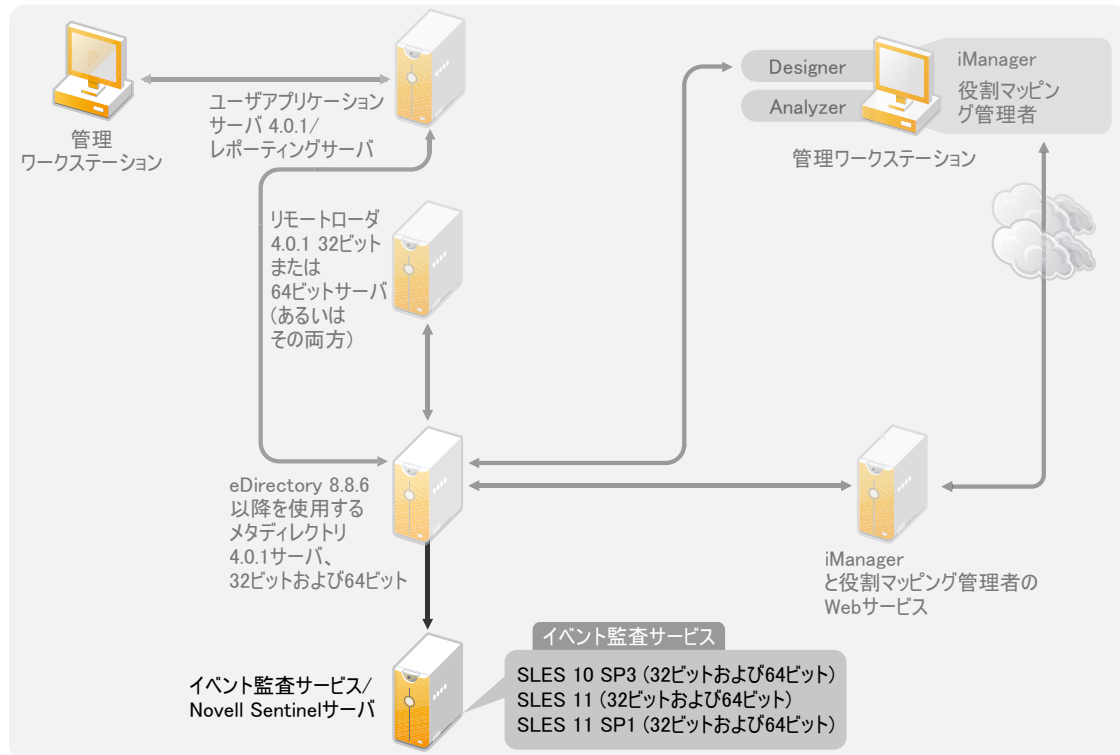
6.4 ユーザアプリケーション

ユーザアプリケーションのシステム要件については、『[Identity Manager Roles Based Provisioning Module 4.0.1 User Application: Installation Guide](#)』の「[System Requirements](#)」セクションを参照してください。Roles Based Provisioning Module 4.0.1 は、JBoss 5.1 をアプリケーションサーバ、PostgreSQL 8.4.3 をデータベースとして使用します。

6.5 監査とレポート

Identity Manager に関する監査とレポートの情報を収集するには、Identity Reporting Module と Novell Sentinel の 2 つのツールを使用します。図 6-5 は、Identity Manager 4.0.1 でサポートされている Sentinel のバージョンを一覧表示しています。

図 6-5 Sentinel



Identity Reporting Module は Identity Manager Advanced Edition のコンポーネントです。Novell Sentinel は、Identity Manager システムに追加できるオプションのコンポーネントですが、Sentinel は Identity Manager に付属していません。

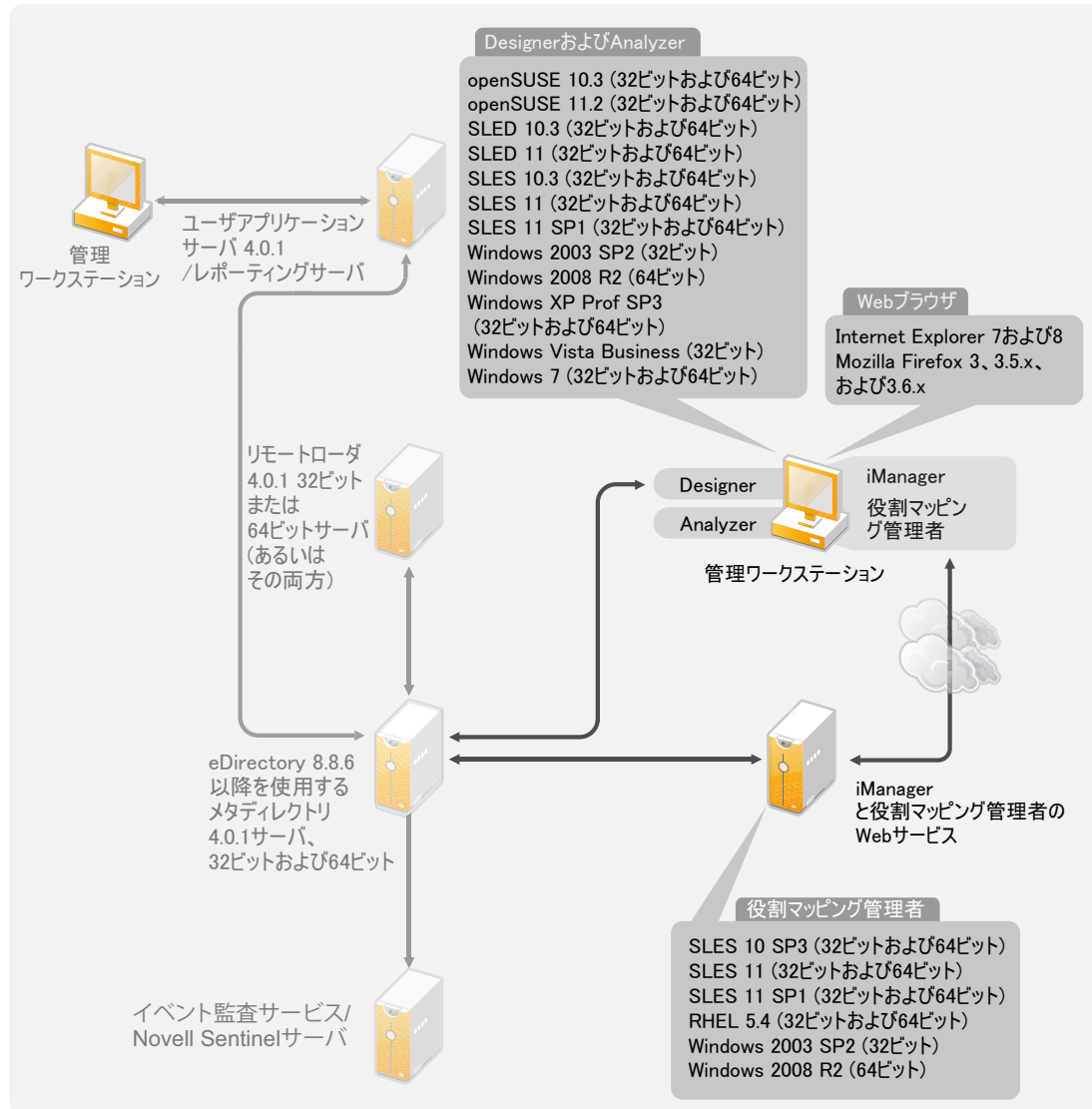
監査とレポートを追加すると、多くの会社が遵守する必要があるコンプライアンス基準を満たすことができます。追跡する必要のあるイベントの監査記録を作成でき、会社の監査基準を満たすレポートを生成できます。

Identity Reporting Module のシステム要件および設定情報については、『[Identity Reporting Module Guide](#)』の「[System Requirements](#)」セクションを参照してください。Sentinel と Identity Manager の設定情報については、『[Novell Sentinel 用 Identity Manager 4.0.1 レポートガイド](#)』を参照してください。Novell Sentinel のシステム要件については、『[Novell Sentinel Installation Guide \(http://www.novell.com/documentation/sentinel6/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/sentinel6/index.html)』の「[Supported Platforms and Best Practices](#)」の章を参照してください。

6.6 ワークステーション

ワークステーションは、Designer、iManager、役割マッピング管理者、ユーザアプリケーション管理 Web ページにアクセスするのに使用されます。図 6-6 は、Identity Manager 4.0.1 でサポートされているワークステーションのさまざまなコンポーネントを一覧表示しています。

図 6-6 ワークステーションでサポートされているコンポーネント



ワークステーションに影響を及ぼす項目には、次の3つがあります。

- ◆ 56 ページのセクション 6.6.1 「ワークステーションのプラットフォーム」
- ◆ 57 ページのセクション 6.6.2 「Web ブラウザ」

6.6.1 ワークステーションのプラットフォーム

表 6-3 は、Designer および iManager でサポートされているワークステーションプラットフォームのリストを示しています。

システム要件については、個々のコンポーネントのマニュアルを参照してください。

- ◆ iManager: 『*Novell iManager 2.7 Installation Guide*』の「[Installing iManager \(http://www.novell.com/documentation/imanager27/imanager_install_274/data/alw39eb.html\)](http://www.novell.com/documentation/imanager27/imanager_install_274/data/alw39eb.html)」を参照してください。
- ◆ Designer: 『*Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 Administration Guide*』の「[System Requirements](#)」セクションを参照してください。

表 6-3 サポートされているワークステーションプラットフォーム

プラットフォーム	詳細
Windows 7 (32 ビットおよび 64 ビット)	32 ビットおよび 64 ビット両方のバージョンがサポートされています。
Windows Vista (32 ビット)	32 ビットバージョンのみがサポートされています。
Windows XP Professional SP3 (32 ビットおよび 64 ビット)	32 ビットおよび 64 ビット両方のバージョンがサポートされています。
Windows 2003 SP2 (32 ビット)	32 ビットバージョンのみがサポートされています。
Windows 2008 R2 (64 ビット)	64 ビットの Business Edition のみサポートされています。
openSUSE 10.3 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
openSUSE 11.2 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
SUSE Linux Enterprise Desktop 10 SP3 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
SUSE Linux Enterprise Desktop 11 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
SUSE Linux Enterprise Server 10 SP3 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
SUSE Linux Enterprise Server 11 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。
SUSE Linux Enterprise Server 11 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)	自動更新機能を使用して最新のパッチを適用します。

6.6.2 Web ブラウザ

iManager は Identity Manager を管理するために必要なプラグインのすべてを実行します。役割マッピング管理者を使用すると、IT インフラストラクチャを理解することなく異なるシステムでビジネス役割をマッピングできます。Web ブラウザ経由で両方のアプリケーションにアクセスします。

iManager および役割マッピング管理者用にサポートされている Web ブラウザは次のとおりです。

- ◆ Internet Explorer 7 および 8
- ◆ Mozilla Firefox 3、3.5.x、および 3.6.x

役割マッピング管理者のシステム要件については、『[Identity Manager Role Mapping Administrator 4.0.1 Installation and Configuration Guide](#)』の「System Requirements」セクションを参照してください。

6.7 リソースの要件

表 6-4 Identity Manager のリソース要件

Identity Manager のコンポーネント	最小要件
メタディレクトリサーバ	2048MB
リモートローダ	256MB
ドライバ	200MB
iManager プラグイン	80MB

Identity Manager のインストール

7

Identity Manager には、インストールプロセスを簡素化し、すべてのコンポーネントを同時にインストールおよび設定する統合インストーラが含まれています。Identity Manager システムを初めてインストールする場合、統合インストーラを使用してください。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 統合インストールガイド](#)』を参照してください。

Identity Manager を使用した経験があり、アイテムごとに個別にインストールする場合、Identity Manager にはコンポーネントごとに個別のインストーラが含まれています。

Analyzer および Designer は、Identity Manager 実装の計画フェーズでインストールおよび使用することが重要です。詳細については、[13 ページの第 2 章「プロジェクト計画の作成」](#)を参照してください。

リストされている順序でコンポーネントをインストールします。さまざまなコンポーネントの説明については、『[Identity Manager 4.0.1 概要ガイド](#)』を参照してください。

- ◆ [59 ページのセクション 7.1「Analyzer のインストール」](#)
- ◆ [60 ページのセクション 7.2「Designer のインストール」](#)
- ◆ [61 ページのセクション 7.3「eDirectory をインストールする」](#)
- ◆ [61 ページのセクション 7.4「iManager のインストール」](#)
- ◆ [62 ページのセクション 7.5「メタディレクトリサーバのインストール」](#)
- ◆ [66 ページのセクション 7.6「リモートローダのインストール」](#)
- ◆ [71 ページのセクション 7.7「ドライバファイルのインストール」](#)
- ◆ [72 ページのセクション 7.8「Roles Based Provisioning Module のインストール」](#)
- ◆ [72 ページのセクション 7.9「カスタムドライバのインストール」](#)
- ◆ [73 ページのセクション 7.10「役割マッピング管理者のインストール」](#)
- ◆ [73 ページのセクション 7.11「Identity Reporting Module または Sentinel のインストール」](#)

7.1 Analyzer のインストール

Analyzer とは、ワークステーションベースのツールで、データを分析し、クリーンアップし、Identity Manager との同期のための準備を行うことができるツールです。Analyzer をインストールし、Identity Manager の実装計画を通じて使用するようになしてください。計画の詳細については、[9 ページのパート I「計画」](#)を参照してください。

- 1 使用するワークステーションのオペレーティングシステムがサポートされていることを確認します。
詳細については、[55 ページのセクション 6.6「ワークステーション」](#)を参照してください。
- 2 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。
- 3 ワークステーションのプラットフォームに適したプログラムを実行してインストールを開始します。

Linux: IDM4.0.1_Lin/products/Analyzer/install

バイナリファイルを実行するために、「./install」と入力します。

Windows: IDM4.0.1_Win:/products/Analyzer/install.exe

- 4 次の情報を使用して、インストールを完了します。

インストール場所: Analyzer をインストールするワークステーション上の場所を指定します。

ショートカットを作成し、言語を選択します。 Analyzer のショートカットを配置するデスクトップ上の場所を選択し、Analyzer をインストールするのに使用する言語を選択します。

Analyzer は、現在インストールされています。Analyzer を初めて起動すると、有効化するようにプロンプトが表示されます。Analyzer は有効にするまで使用できません。詳細については、75 ページの第 8 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」を参照してください。

7.2 Designer のインストール

Designer はワークステーションベースのツールで、Identity Manager ソリューションを設計することができます。Designer は最初にインストールし、Identity Manager の実装計画部分全体で使用してください。計画の詳細については、9 ページのパート I 「計画」を参照してください。

- 1 使用するワークステーションのオペレーティングシステムがサポートされていることを確認します。Designer が適切に機能するためには、32 ビットの NICI パッケージをインストールします。Designer を 64 ビットシステムにインストールする場合、libgthread-2_0-0-32bit-2.17.2+2.17.3+20080708+r7171-3.1.x86_64.rpm 互換ライブラリが Designer にインストールされていることを確認します。詳細については、55 ページのセクション 6.6 「ワークステーション」および『*Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 Administration Guide*』を参照してください。
- 2 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」を参照してください。
- 3 ワークステーションのプラットフォームに適したプログラムを実行してインストールを開始します。

Linux: IDM4.0.1_Lin/products/Designer/install

バイナリファイルを実行するために、「./install」と入力します。

Windows: IDM4.0.1_Win:/products/Designer/install.exe

- 4 次の情報を使用して、インストールを完了します。

インストールフォルダ: Designer をインストールするワークステーション上の場所を指定します。

ショートカットの作成: ショートカットをデスクトップ上に配置するか、デスクトップメニュー内に配置するかを選択します。

Designer をインストールする前に、このパッケージがインストールされていることを確認してください。YaST を使用すると、依存関係およびインストール済みのパッケージを確認できます。詳細については、『*Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド*』を参照してください。

7.3 eDirectory をインストールする

Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。

eDirectory 8.8.6 は、Identity Manager のメディアに含まれています。32 ビットプラットフォームと 64 ビットプラットフォーム両方用のインストーラがあります。インストーラの場所は、プラットフォームごとに異なります。

- ◆ **Linux 32 ビット** : IDM4.0.1_Lin/products/eDirectory/x86/setup/nds-install
- ◆ **Linux 64 ビット** : IDM4.0.1_Lin/products/eDirectory/x64/setup/nds-install
- ◆ **Solaris 32 ビット** : IDM4.0.1_Solaris/products/eDirectory/x86/setup/nds-install
- ◆ **Solaris 64 ビット** : IDM4.0.1_Solaris/products/eDirectory/x64/setup/nds-install
バイナリファイルを実行するために、「./nds-install」と入力します。
- ◆ **Windows 32 ビット** : IDM4.0.1_Win:\products\eDirectory\x86\nt\Setup.exe
- ◆ **Windows 64 ビット** : IDM4.0.1_Win:\products\eDirectory\x64\windows\Setup.exe

eDirectory をインストールする方法は、ご利用中のプラットフォームごとに異なります。ご利用中のプラットフォーム向けのインストール手順については、『[Novell eDirectory 8.8 インストールガイド](#) (<http://www.novell.com/documentation/edir88/edirin88/data/a2iii88.html>)』の該当するセクションを参照してください。

注 : Linux および Solaris の場合、インストール後に eDirectory を設定してから、メタディレクトリサーバをインストールしてください。設定手順については、『[Novell eDirectory 8.8 インストールガイド](#)』の「[Linux、Solaris、または AIX システムにおける Novell eDirectory の設定](#)」 (<http://www.novell.com/documentation/edir88/edirin88/data/bnn8z89.html>) を参照してください。

7.4 iManager のインストール

Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。

iManager 2.7.4 は、Identity Manager のメディアに含まれています。Windows および Linux 用のインストーラがあります。iManager は Solaris ではサポートされていません。インストーラの場所は、プラットフォームごとに異なります。

- ◆ **Linux** : IDM4.0.1_Lin/products/iManager/installs/linux/iManagerInstallLinux.bin
バイナリファイルを実行するために、「./iManagerInstallLinux.bin」と入力します。
- ◆ **Windows** : IDM4.0.1_Win:\products\iManager\installs\win\iManagerInstall.exe

iManager をインストールする方法は、ご利用中のプラットフォームごとに異なります。手順については、『[iManager インストールガイド](#) (http://www.novell.com/documentation/imanager27/imanager_install_27/data/hk42s9ot.html)』の該当するセクションを参照してください。

7.5 メタディレクトリサーバのインストール

Linux/UNIX プラットフォームの場合、root または root 以外のユーザとしてメタディレクトリサーバをインストールできます。root 以外のインストールを使用する場合、インストール手順は異なります。インストール手順については、63 ページのセクション 7.5.1 「メタディレクトリサーバの root 以外のインストール」を参照してください。

この手順は、Identity Manager がサポートしているさまざまなプラットフォーム用のメタディレクトリサーバ、Web コンポーネント、およびユーティリティの GUI を使用したインストールに適用できます。これらのコンポーネントのサイレントインストールを実行する場合は、65 ページのセクション 7.5.2 「メタディレクトリサーバのサイレントインストール」を参照してください。

- 1 47 ページの第 6 章「システム要件」のシステム要件のリストを満たしていることを確認します。
- 2 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」を参照してください。
- 3 (Linux/UNIX のみ) Linux/UNIX へのインストールを開始する前に、eDirectory の環境変数がエクスポートされていることを確認するには、コマンドプロンプトに移動し、次のように入力します。

```
set | grep PATH
```

この環境変数は、eDirectory のインストールパスを設定します。環境変数が設定されていると、eDirectory のインストールパスが一覧にされます。環境変数が設定されていないと、Identity Manager のインストールは失敗します。

現在のシェルで環境変数を設定する

```
./opt/novell/eDirectory/bin/ndspath
```

コマンドを実行するには、ピリオド (.) とスラッシュ (/) の間にスペースが必要です。詳細については、「NDS インストールユーティリティを使用した eDirectory コンポーネントのインストール ([http://www.novell.com/documentation/edir88/edirin88/data/a79kg0w.html#ai39feq](http://www.novell.com/documentation/edir88/edirin88/index.html?page=/documentation/edir88/edirin88/data/a79kg0w.html#ai39feq))」を参照してください。

- 4 プラットフォーム用に正しいプログラムを使用してインストール開始します。

Linux - GUI インストール: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin [-i gui]

Linux - コマンドラインインストール: IDM4.0.1.1_Lin/products/IDM/install.bin -i console

Solaris - GUI インストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin [-i gui]

Solaris - コマンドラインインストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin -i console

Linux または Solaris でバイナリファイルを実行するには、/install.bin [-i {gui | console}] と入力します。

Windows: IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\idm_install.exe

- 5 次の情報を使用して、インストールを完了します。

コンポーネントの選択: メタディレクトリサーバ、iManager プラグイン、およびユーティリティを選択し、メタディレクトリサーバをインストールします。

- ◆ **Novell Identity Manager メタディレクトリサーバ:** このオプションを使用するには、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要があります、Identity Manager の 64 ビット版がインストールされます。このオプションを指定すると、Identity Manager のスキーマが拡張され、メタディレクトリサーバ、Identity Manager ドライバ、および Novell Audit Agent がインストールされます。
- ◆ **Novell Identity Manager メタディレクトリサーバ (32 ビット):** このオプションを使用するには、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要があります、Identity Manager の 32 ビット版がインストールされます。このオプションを指定すると、Identity Manager のスキーマが拡張され、メタディレクトリサーバ、Identity Manager ドライバ、および Novell Audit Agent がインストールされます。
- ◆ **Novell Identity Manager 接続システムサーバ (64 ビット):** このオプションでは、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要はありません。このオプションは、64 ビットのリモートローダをインストールする場合にのみ選択します。詳細については、[66 ページのセクション 7.6 「リモートローダのインストール」](#) を参照してください。
- ◆ **Novell Identity Manager 接続システムサーバ (.NET):** このオプション (Windows のみ) は、.NET リモートローダサービスと SharePoint のドライバをこのサーバ上にインストールします。
- ◆ **Identity Manager 用の Novell Identity Manager プラグイン:** このオプションは、このサーバに iManager がインストールされている場合に選択します。これにより、Identity Manager 用の iManager プラグインがインストールされます。
- ◆ **ユーティリティ:** 接続システムのドライバ設定に使用するユーティリティをインストールします。すべてのドライバにユーティリティが存在するわけではありません。必要かどうかわからない場合は、選択しておいてください。ディスク容量を大量に使用することはありません。
- ◆ **選択したコンポーネントのカスタマイズ:** このオプションを使用すると、インストールを選択したコンポーネントをカスタマイズできます。このオプションを選択する前に、インストールする関連コンポーネントをあらかじめ選択しておく必要があります。

認証: スキーマを拡張するために、eDirectory で十分な権限を持つユーザおよびパスワードを指定します。ユーザ名は LDAP 形式で指定します。たとえば、cn=idmadmin,o=company などです。

- 6 Identity Manager をアクティベートします。詳細については、[75 ページの第 8 章 「Novell Identity Manager 製品を有効にする」](#) を参照してください。
- 7 ドライバオブジェクトを作成して設定します。この情報は各ドライバガイドに記載されています。詳細については、[Identity Manager ドライバマニュアル \(http://www.novell.com/documentation/idm40drivers/\)](http://www.novell.com/documentation/idm40drivers/) を参照してください。

7.5.1 メタディレクトリサーバの root 以外のインストール

root 以外のユーザとして Identity Manager をインストールすると、UNIX/Linux サーバのセキュリティを強化できます。eDirectory が root によってインストールされている場合、Identity Manager を root 以外のユーザとしてインストールすることはできません。

root 以外でインストールした場合、次の項目はインストールされません。

- ◆ **リモートローダ**：リモートローダを root 以外のユーザとしてインストールする必要がある場合には、Java リモートローダを使用します。詳細については、[70 ページのセクション 7.6.5 「Java リモートローダを UNIX または Linux にインストールする」](#)を参照してください。
- ◆ **UNIX/Linux アカウントドライバ**：機能させるには root 権限が必要です。
- ◆ **Novell Sentinel プラットフォームエージェント**：ルートから Novell Sentinel プラットフォームエージェントをインストールします。/etc/opt/novell/sentinelpa/conf ディレクトリに Dirxml.properties を作成します。イベントログファイルが生成される場所（デフォルトは /var/opt/novell/sentinelpa/data/AuditEvents.log）では、non-root のユーザに対して write 許可が設定されている必要があります。

次の手順を使用して、メタディレクトリサーバの root 以外のインストールを実行します。

- 1 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章 「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。
- 2 root 以外のユーザで eDirectory 8.8.6 以降をインストールします。詳細については、「[「root ユーザ以外での eDirectory 8.8.6 のインストール」を参照してください。](#)」(<http://www.novell.com/documentation/edir88/edirin88/index.html?page=/documentation/edir88/edirin88/data/a79kg0w.html#bs6a3gs>)
- 3 eDirectory のインストールに使用される root 以外のユーザでログインします。
Identity Manager は、root 以外のバージョンの eDirectory をインストールする際に使用したユーザと同じユーザでインストールする必要があります。Identity Manager をインストールするユーザには、root 以外でインストールした eDirectory のディレクトリおよびファイルに対する書き込みアクセス権が必要です。
- 4 使用するプラットフォームのインストールプログラムを実行します。
Linux: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/linux/setup/idm-nonroot-install
Solaris: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/solaris/setup/idm-nonroot-install
- 5 次の情報を使用して、インストールを完了します。

root 以外でインストールした eDirectory の基本ディレクトリ：root 以外でインストールした eDirectory があるディレクトリを指定します。たとえば、/home/user/install/eDirectory です。

eDirectory スキーマの拡張：これが eDirectory のこのインスタンスにインストールされている最初の Identity Manager サーバである場合、「Y」と入力してスキーマを拡張します。スキーマを拡張しないと、Identity Manager は機能しません。

root 以外でインストールした eDirectory によってホストされていて、root 以外のユーザが所有している eDirectory の各インスタンスのスキーマを拡張するようメッセージが表示されます。

スキーマを拡張するよう選択した場合、スキーマを拡張する権限を持つ eDirectory ユーザの完全識別名 (DN) を指定します。スキーマを拡張するには、ユーザにツリー全体に対するスーパーバイザ権限が必要です。root 以外のユーザとしてスキーマを拡張する場合の詳細については、schema.log ファイルを参照してください。このファイルは、eDirectory の各インスタンスの data ディレクトリにあります。

インストール完了後、/opt/novell/eDirectory/bin/idm-install-schema プログラムを実行して、追加の eDirectory インスタンスのスキーマを拡張します。

ユーティリティ:(オプション) Identity Manager ドライバユーティリティが必要な場合は、Identity Manager のインストールメディアから Identity Manager サーバにコピーする必要があります。ユーティリティはすべて IDM4.0.1_platform/product/IDM/platform/setup/utilities ディレクトリに含まれています。

- 6 Identity Manager をアクティベートします。詳細については、75 ページの第 8 章「Novell Identity Manager 製品を有効にする」を参照してください。
- 7 ドライバオブジェクトを作成して設定します。この情報は各ドライバガイドに記載されています。詳細については、Identity Manager ドライバマニュアル (<http://www.novell.com/documentation/idm40drivers/>) を参照してください。

7.5.2 メタディレクトリサーバのサイレントインストール

Identity Manager のサイレントインストールを実行するには、インストールを完了するのに必要なパラメータを含むプロパティファイルを作成する必要があります。Identity Manager のメディアにはサンプルファイルが含まれています。

- ◆ **Linux:** IDM4.0.1_Lin/products/IDM/linux/setup/silent.properties
- ◆ **Solaris:** IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/solaris/setup/silent.properties
- ◆ **Windows:** IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\silent.properties

プラットフォームの正しいプログラムを使用して、サイレントインストール開始します。

- ◆ **Linux:** IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin -i silent -f <ファイル名>.properties
- ◆ **Solaris:** IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin -i silent -f <ファイル名>.properties
- ◆ **Windows:** IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\idm_install.exe -i silent -f <ファイル名>.properties

Identity Manager インストーラを実行する場所で、以下の属性を使用して、プロパティファイル<ファイル名>.properties を作成します。

```
EDIR_USER_NAME=cn=admin,o=test
EDIR_USER_PASSWORD=test
METADIRECTORY_SERVER_SELECTED=true
CONNECTED_SYSTEM_SELECTED=false
X64_CONNECTED_SYSTEM_SELECTED=false
WEB_ADMIN_SELECTED=false
UTILITIES_SELECTED=false
```

デフォルトのインストール場所については、/tmp/idmInstall.log を参照してください。

iManager をインストールした後で、iManager プラグインをインストールする場合は、WEB_ADMIN_SELECTED の値を true に設定する必要があります。

複数のインスタンスに Identity Manager のサイレントインストールを実行する場合は、<ファイル名>.properties ファイルに以下が含まれていることを確認する必要があります。

```
EDIR_NCP_PORT=524
EDIR_NDS_CONF=/etc/opt/novell/eDirectory/conf
EDIR_IP_ADDRESS=<xxx.xx.xx.xx>
```

パスワードは、メタディレクトリのサイレントインストール用のファイルに格納されます。またはファイルに書き込む代わりに、EDIR_USER_PASSWORD 環境変数を使用してパスワードを入力することもできます。EDIR_USER_PASSWORD 変数がプロパティファイルで設定されていない場合、インストーラは EDIR_USER_PASSWORD 環境変数から値を読み込みます。

7.6 リモートローダのインストール

リモートローダをインストールすると、接続システムと同じサーバに識別ボールドとメタディレクトリサーバがインストールされていなくても、ドライバが接続システムにアクセスできるようにすることで、Identity Manager の機能を拡張できます。計画プロセスの一環として、リモートローダを使用するかどうかを決定する必要があります。計画プロセスの詳細については、25 ページの第 3 章「技術上のガイドライン」を参照してください。

- ◆ 66 ページのセクション 7.6.1 「要件」
- ◆ 66 ページのセクション 7.6.2 「サポートされているドライバ」
- ◆ 67 ページのセクション 7.6.3 「インストール手順」
- ◆ 69 ページのセクション 7.6.4 「リモートローダのサイレントインストール」
- ◆ 70 ページのセクション 7.6.5 「Java リモートローダを UNIX または Linux にインストールする」
- ◆ 71 ページのセクション 7.6.6 「32 ビットおよび 64 ビットのリモートローダの共存」

root 以外のユーザを使用してリモートローダをインストールする場合、Java リモートローダを使用します。環境をカスタマイズし、HP-UX などのサポートされないプラットフォーム上に Java リモートローダをインストールする場合も、Java リモートローダを使用することができます。詳細については、70 ページのセクション 7.6.5 「Java リモートローダを UNIX または Linux にインストールする」を参照してください。

7.6.1 要件

リモートローダでは、各ドライバの接続システムが使用できること、および関連 API が提供されている必要があります。各ドライバに固有のオペレーティングシステムおよび接続システムの要件については、『Identity Manager ドライバマニュアル (<http://www.novell.com/documentation/idm40drivers>)』を参照してください。

7.6.2 サポートされているドライバ

すべての Identity Manager ドライバがリモートローダによってサポートされているわけではありません。以下は、リモートローダ機能を持つドライバのリストです。

- ◆ Active Directory
- ◆ Avaya PBX
- ◆ データ収集サービス
- ◆ 区切りテキスト
- ◆ GroupWise (32 ビットのリモートローダでのみ利用可能)
- ◆ JDBC
- ◆ JMS

- ◆ LDAP
- ◆ Linux および UNIX 用ドライバ
- ◆ Lotus Notes
- ◆ Managed System Gateway
- ◆ 手動タスクサービス
- ◆ PeopleSoft 5.2
- ◆ Remedy ARS
- ◆ RACF
- ◆ SalesForce.com
- ◆ SAP Business Logic
- ◆ SAP GRC (CMP のみ)
- ◆ SAP HR
- ◆ SAP Portal
- ◆ SAP User Management
- ◆ スクリプティング
- ◆ SharePoint
- ◆ SOAP
- ◆ WorkOrder

次に示すドライバではリモートローダを使用できません。

- ◆ eDirectory
- ◆ エンタイトルメントサービス
- ◆ 役割サービス
- ◆ ユーザアプリケーション

7.6.3 インストール手順

リモートローダには、各プラットフォーム用に異なるプログラムがあり、これによってリモートローダはメタディレクトリサーバと通信できます。

- ◆ **Linux/UNIX:** rdxml は実行可能ファイルで、メタディレクトリサーバが、Solaris または Linux 環境で実行されている Identity Manager ドライバと通信できるようにします。
- ◆ **Windows:** リモートローダコンソールは、rlconsole.exe を使用して dirxml_remote.exe を操作します。このファイルは実行可能ファイルで、メタディレクトリサーバが、Windows で実行されている Identity Manager ドライバと通信できるようにします。

リモートローダをインストールする

- 1 [47 ページの第 6 章「システム要件」](#) に示されているシステム要件を満たしていることを確認します。
- 2 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#) を参照してください。

- 3 使用するプラットフォームに適したプログラムを使用してインストールを開始します。

Linux - GUI インストール: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin [-i gui]

Linux - コマンドラインインストール: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin -i console

Solaris - GUI インストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin [-i gui]

Solaris - コマンドラインインストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin -i console

Windows: IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\idm_install.exe

Linux または Solaris でバイナリファイルを実行するには、/install.bin [-i {gui | console}] と入力します。

- 4 提供されている次の情報を使用して、インストールを完了します。

コンポーネントの選択: 接続システムサーバおよびユーティリティを選択し、リモートローダをインストールします。

- **Novell Identity Manager メタディレクトリサーバ:** このオプションは、メタディレクトリサーバをインストールする場合にのみ選択します。このオプションを使用するには、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要があります。詳細については、[62 ページのセクション 7.5 「メタディレクトリサーバのインストール」](#) を参照してください。
- **Novell Identity Manager 接続のシステムサーバ 32 ビット:** このオプションでは、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要はありません。アプリケーションサーバにリモートローダサービスの 32 ビット版がインストールされます。
- **Novell Identity Manager 接続のシステムサーバ 64 ビット:** このオプションでは、このサーバに識別ポータルがインストールされている必要はありません。アプリケーションサーバにリモートローダサービスの 64 ビット版がインストールされます。
- **Novell Identity Manager 接続システムサーバ (.NET):** このオプション (Windows のみ) は、.NET リモートローダサービスと SharePoint のドライバをこのサーバ上にインストールします。
- **Identity Manager 用の Novell Identity Manager プラグイン:** このオプションは、このサーバに iManager がインストールされている場合に選択します。これにより、Identity Manager 用の iManager プラグインがインストールされます。
- **ユーティリティ:** 接続システムのドライバ設定に使用するユーティリティをインストールします。すべてのドライバにユーティリティが存在するわけではありません。必要かどうかわからない場合は、選択しておいてください。ディスク容量を大量に使用することはありません。
- **カスタム:** このオプションは、インストールする機能をカスタマイズする場合に選択します。これにより、次のオプションを選択することができます。このオプションを選択する前に、インストールするコンポーネントを選択してください。
 - **リモートローダサービス 32 ビット:** メタディレクトリサーバと通信するサービス。
 - **リモートローダサービス 64 ビット:** メタディレクトリサーバと通信するサービス。

- ◆ **ドライバ:** インストールするドライバファイルを選択します。ドライバファイルはすべてインストールする必要があります。別のリモートローダインスタンスを追加する必要がある場合、インストールを再実行する必要はありません。

- ◆ **Novell Identity Manager 接続システムサーバ (.NET): (Windows のみ) .NET** リモートローダサービスと SharePoint ドライバをインストールします。

インストールのカスタマイズを続行するように選択する場合は、他のオプションを選択する必要があります。

(Windows のみ) 接続したシステムサーバのインストール先: 接続システムサーバをインストールするディレクトリを指定します。

(Windows のみ) .NET リモートローダのインストール先: .NET リモートローダのインストールされるディレクトリを指定します。

(Windows のみ) ユーティリティのインストール先: ユーティリティをインストールするディレクトリを指定します。

- 5 ドライバオブジェクトを作成して設定し、リモートローダを使用します。この情報は各ドライバガイドに記載されています。詳細については、[Identity Manager ドライバ マニュアル \(http://www.novell.com/documentation/idm40drivers/\)](http://www.novell.com/documentation/idm40drivers/) を参照してください。
- 6 リモートローダ環境設定ファイルを作成し、接続システムを操作します。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 リモートローダガイド](#)』の「[環境設定ファイルの作成による Linux/UNIX 用のリモートローダの設定](#)」を参照してください。

7.6.4 リモートローダのサイレントインストール

リモートローダのサイレントインストールを実行するには、インストールを完了するのに必要なパラメータを含むプロパティファイルを作成する必要があります。Identity Manager のメディアにはサンプルファイルが含まれています。

- ◆ **Linux:** IDM4.0.1_Lin/products/IDM/linux/setup/silent.properties
- ◆ **Solaris:** IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/solaris/setup/silent.properties
- ◆ **Windows:** IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\silent.properties

プラットフォームの正しいプログラムを使用して、サイレントインストール開始します。

- ◆ **Linux:** IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin -i silent -f <ファイル名>.properties
- ◆ **Solaris:** IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin -i silent -f <ファイル名>.properties
- ◆ **Windows:** IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\idm_install.exe -i silent -f <ファイル名>.properties

Identity Manager インストーラを実行する場所で、以下の属性を使用して、プロパティファイル<ファイル名>.properties を作成します。

```
METADIRECTORY_SERVER_SELECTED=false
CONNECTED_SYSTEM_SELECTED=true
X64_CONNECTED_SYSTEM_SELECTED=true
WEB_ADMIN_SELECTED=false
UTILITIES_SELECTED=false
```

デフォルトのインストール場所については、/tmp/idmInstall.log を参照してください。

iManager をインストールした後で、iManager プラグインをインストールする場合は、WEB_ADMIN_SELECTED の値を true に設定する必要があります。

7.6.5 Java リモートローダを UNIX または Linux にインストールする

dirxml_jremote は、純粋な Java リモートローダです。あるサーバで実行中のメタディレクトリサーバと、rdxml が実行されていない別の場所で実行中の Identity Manager ドライバの間のデータ交換に使用されます。互換性のある JRE (1.5.0 以上) および Java ソケットがあれば、どのシステムでも動作します。Identity Manager がサポートする Linux/UNIX プラットフォームでサポートされます。

- 1 Java 1.5.x JDK/JRE がホストシステムで使用できることを確認します。
- 2 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。
- 3 Identity Manager のメディアに含まれる Java リモートローダのインストールファイルを探します。

Linux: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/java_remoteloader

Solaris: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/java_remoteloader

- 4 dirxml_jremote_dev.tar.gz ファイルをリモートサーバの目的の場所にコピーします。
- 5 リモートローダ上の目的の場所に dirxml_jremote.tar.gz または dirxml_jremote_mvs.tar ファイルをコピーします。

例: /usr/idm

mvs、untar、および dirxml_jremote_mvs.tar ファイルの詳細については、usage.html ドキュメントを参照してください。

- 6 dirxml_jremote.tar.gz ファイルと dirxml_jremote_dev.tar.gz ファイルを圧縮解除して展開します。

例: gunzip dirxml_jremote.tar.gz または tar -xvf dirxml_jremote_dev.tar

- 7 アプリケーションシム.jar ファイルを、dirxml_jremote.tar の抽出時に作成された lib サブディレクトリにコピーします。

tar ファイルには.jar ファイルが含まれていないため、メタディレクトリサーバサーバから手動でこれらの.jar ファイルを lib ディレクトリにコピーする必要があります。lib ディレクトリは、解凍を行ったディレクトリの下にあります。

メタディレクトリサーバにおける.jar ファイルのデフォルトのインストールディレクトリは、/opt/novell/eDirectory/lib/dirxml/classes です。

- 8 次のいずれかを実行して、dirxml_jremote スクリプトをカスタマイズします。
- ◆ RDXML_PATH 環境変数を設定し、PATH 環境変数を通じて Java 実行可能ファイルに到達可能であることを確認します。次のコマンドを入力して、環境変数を設定します。
 1. set RDXML_PATH=path
 2. export RDXML_PATH
 - ◆ dirxml_jremote スクリプトを編集して、Java 実行可能ファイルへのパスを Java を実行するスクリプトラインに追加します。
- 9 アプリケーションシムで使用するサンプルの config8000.txt ファイルを設定します。詳細については、『「Identity Manager 4.0.1 リモートローダガイド」』の「環境設定ファイルの作成による Linux/UNIX 用のリモートローダの設定」を参照してください。

7.6.6 32 ビットおよび 64 ビットのリモートローダの共存

Identity Manager 4.0.1 では、64 ビットのオペレーティングシステム上で 32 ビットおよび 64 ビットのリモートローダの共存が可能です。64 ビットのオペレーティングシステム上にインストールされている 32 ビットのリモートローダをアップグレードする場合、32 ビットのリモートローダがアップグレードされると同時に、64 ビットのリモートローダもインストールされます。32 ビットのリモートローダと 64 ビットのリモートローダを同じマシン上で使用できます。

32 ビットおよび 64 ビットの両方のリモートローダーを同じマシン上に置くことにした場合、監査イベントは 64 ビットリモートローダーでのみ生成されます。32 ビットのリモートローダをインストールする前に 64 ビットのリモートローダをインストールすると、イベントは 32 ビットの lcache に記録されます。

7.7 ドライバファイルのインストール

メタディレクトリサーバまたはリモートローダをインストールせずにドライバファイルをインストールできます。ドライバファイルは、ドライバのシムおよびドライバユーティリティで構成されます。

ドライバファイルをインストールする

- 1 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」を参照してください。
- 2 プラットフォーム用に正しいプログラムを使用してインストール開始します。

Linux - GUI インストール: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin [-i gui]

Linux - コマンドラインインストール: IDM4.0.1_Lin/products/IDM/install.bin -i console

Solaris - GUI インストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin [-i gui]

Solaris - コマンドラインインストール: IDM4.0.1_Solaris/products/IDM/install.bin -i console

Linux または Solaris でバイナリファイルを実行するには、/install.bin [-i {gui | console}] と入力します。

Windows: IDM4.0.1_Win:\products\IDM\windows\setup\idm_install.exe
- 3 使用許諾契約書の条項を確認して同意し、[次へ] をクリックします。

4 [Select Components] ページで次のオプションを選択します。

Novell Identity Manager メタディレクトリサーバ: このオプションを選択するか、[*Connected System Server*] オプションを選択できます。両方のオプションを選択する必要はありません。

このオプションにはドライバファイルが含まれています。

Novell Identity Manager 接続のシステムサーバ: このオプションを選択するか、[*Metadirectory Server*] オプションを選択できます。両方のオプションを選択する必要はありません。

このオプションにはドライバファイルが含まれています。

Novell のユーティリティ 一部のドライバを設定するのに役立つユーティリティをインストールするには、このオプションを選択します。

選択したコンポーネントのカスタマイズ: メタディレクトリサーバまたはリモートローダをインストールせずにドライバファイルのみを選択できます。

5 [Next] をクリックします。

6 [Metadirectory Engine] オプションおよび [Remote Loader Service] オプションを選択解除します。

7 [Metadirectory Server] オプションまたは [Connected System Server] オプションで [Drivers] オプションが選択されていることを確認します。

[Drivers] オプションを展開し、インストールするドライバのみを選択することができます。デフォルトでは、すべてのドライバが選択されています。

8 [Next] をクリックします。

9 [Authentication] ページで、eDirectory の中でスキーマを拡張するのに十分な権限を持つユーザ名およびパスワードを指定します。ユーザ名は LDAP 形式で指定します。たとえば、cn=idmadmin,o=company などです。

10 [Next] をクリックします。

11 インストールの概要を確認し、[Next] をクリックします。

12 インストールの完了を知らせるメッセージを確認し、[Done] をクリックします。

これで、ドライバのファイルがリモートローダまたはメタディレクトリサーバにインストールされます。

7.8 Roles Based Provisioning Module のインストール

Roles Based Provisioning Module をインストールするには、『[Identity Manager Roles Based Provisioning Module 4.0.1 ユーザアプリケーション: マイグレーションガイド](#)』を参照してください。

7.9 カスタムドライバのインストール

ご使用の環境に合ったカスタムドライバを作成できます。カスタムドライバの作成またはインストールについては、[Novell 開発者キット \(http://developer.novell.com/wiki/index.php/Dirxml\)](http://developer.novell.com/wiki/index.php/Dirxml) を参照してください。

7.10 役割マッピング管理者のインストール

役割マッピング管理者とは、主な IT システム内部で付与される権限および許可を検出する Web サービスのことです。

注：役割マッピング管理者は、Standard Edition では使用できません。

役割マッピング管理者をインストールするには

- 1 Novell のダウンロード Web サイトから必要な Identity Manager のファイルをダウンロードしていることを確認します。詳細については、[43 ページの第 5 章「Identity Manager の入手場所」](#)を参照してください。
- 2 Identity Manager のメディアの次の場所に含まれる役割マッピング管理者のインストールファイルを探します。

Linux: IDM4.0.1_Lin/products/RMA/IDMRMAP.jar

Windows: IDM4.0.1_Win:\products\RMA\IDMRMAP.jar

- 3 コマンドラインから役割マッピング管理者のインストールディレクトリに移動し、「java -jar IDMRMAP.jar」と入力します。

注：Linux を使用している場合、セキュリティ上の理由から、root 以外のユーザで役割マッピング管理者をインストールする必要があります。

- 4 使用許諾契約書の条項を確認し、「Yes」と入力します。
- 5 役割マッピング管理者用のインストールディレクトリを指定します。デフォルトパスは現在の場所です。
- 6 役割衝突管理者の名前を表す URL 部分を指定します。デフォルト値は IDMRMAP です。
- 7 HTTP ポートを指定します。デフォルト値は「8081」です。
- 8 環境設定管理者のパスワードを指定します。

これで役割マッピング管理者がインストールされます。インストールの完了後、アプリケーションは自動的に開始されません。インストールディレクトリにある次のスクリプトを使用してアプリケーションを開始および停止します。

- **Linux:** 開始スクリプトは start.sh で、停止スクリプトは stop.sh です。
- **Windows:** 開始スクリプトは start.bat で、停止スクリプトは stop.bat です。

役割マッピング管理者がインストールされ開始されたら、それを設定する必要があります。設定情報については、『[Identity Manager 役割マッピング管理者 4.0.1 インストールおよび設定ガイド](#)』の「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

7.11 Identity Reporting Module または Sentinel のインストール

Identity Reporting Module および Sentinel は、Identity Manager ソリューションにオプションで追加されるものです。監査とレポートを追加すると、多くの会社が遵守する必要があるコンプライアンス基準を満たすことができます。追跡する必要のあるイベントの監査記録を作成でき、レポートを生成して会社の監査基準をすべて満たしているか確認できます。

Identity Reporting モジュールのインストールおよび設定については、『[Identity Reporting Module ガイド](#)』を参照してください。Sentinel と Identity Manager の設定情報については、『[Novell Sentinel 用 Identity Manager 4.0.1 レポートングガイド](#)』を参照してください。Sentinel のシステム要件については、『[Novell Sentinel インストールガイド \(http://www.novell.com/documentation/sentinel6/index.html\)](http://www.novell.com/documentation/sentinel6/index.html)』を参照してください。

Novell Identity Manager 製品を有効にする

8

ここでは、Novell Identity Manager をベースとする製品でアクティベーションがどのように機能するかについて説明します。Identity Manager、統合モジュール、およびプロビジョニングモジュールは、インストールから 90 日以内にアクティベートする必要があります。アクティベートしないと、90 日後にシャットダウンします。90 日以内のいつでも、またはその後でも、Identity Manager 製品をアクティベートするよう選択できます。

Identity Manager とドライバをアクティベートするには、次のタスクを完了します。

- ◆ 75 ページのセクション 8.1 「Identity Manager 製品のライセンスの購入」
- ◆ 75 ページのセクション 8.2 「プロダクトアクティベーションキーのインストール」
- ◆ 76 ページのセクション 8.3 「Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示」
- ◆ 77 ページのセクション 8.4 「Identity Manager のドライバの有効化」
- ◆ 78 ページのセクション 8.5 「Analyzer の有効化」
- ◆ 78 ページのセクション 8.6 「Designer および役割マッピング管理者の有効化」

8.1 Identity Manager 製品のライセンスの購入

Identity Manager 製品ライセンスを購入し、製品をアクティブ化するには、[Novell Identity Manager 購入方法 Web ページ \(http://www.novell.com/products/identitymanager/howtobuy.html\)](http://www.novell.com/products/identitymanager/howtobuy.html) を参照してください。

製品のライセンスを購入いただくと、Novell より電子メールでカスタマ ID が送信されます。電子メールには、プロダクトアクティベーションキーを入手可能な Novell サイトの URL も含まれています。カスタマ ID がわからない場合、またはカスタマ ID を受け取っていない場合は、Novell アクティベーションセンターにご連絡ください。米国の電話番号は 1-800-418-8373 です。その他の地域では、1-801-861-8373 です (801 市外局番を使用した通話には料金がかかります)。また、[オンラインチャット \(http://support.novell.com/chat/activation\)](http://support.novell.com/chat/activation) も利用できます。

8.2 プロダクトアクティベーションキーのインストール

プロダクトアクティベーションキーは、iManager を使用してインストールする必要があります。


- 1 ライセンスを購入すると、Novell からカスタマ ID の電子メールが送信されます。電子メールの「注文の詳細」セクションには、資格情報を入手可能なサイトへのリンクも含まれています。リンクをクリックすると、サイトに移動します。
- 2 ライセンスのダウンロードリンクをクリックして、以下のいずれかを実行します。
 - ◆ プロダクトアクティベーションキーファイルを保存します。

または

- ◆ プロダクトアクティベーションキーファイルを開き、プロダクトアクティベーションキーの内容をクリップボードにコピーします。

注意深く内容をコピーし、余分な線やスペースが含まれないようにします。資格情報の最初のダッシュ (-) から (----BEGIN PRODUCT ACTIVATION CREDENTIAL) 資格情報の最後のダッシュ (-) まで (END PRODUCT ACTIVATION CREDENTIAL----) をコピーする必要があります。



警告: アクティベートされていない既存の Advanced Edition システムに Standard Edition のアクティベーションを適用すると、Identity Manager メタディレクトリサーバとドライバが停止します。

- 3 iManager を開きます。
 - 4 [Identity Manager] > [Identity Manager の概要] の順に選択します。
 - 5  をクリックし、ツリー構造でドライバセットを参照して選択します。
 - 6 [Identity Manager の概要] ページで、アクティブにするドライバを含むドライバセットをクリックします。
 - 7 [ドライバセットの概要] ページで、[アクティベーション] > [インストール] の順にクリックします。
 - 8 Identity Manager コンポーネントをアクティブにするドライバセットを選択して、[次へ] をクリックします。
 - 9 次のいずれかの操作を行います。
 - ◆ Identity Manager アクティベーションキーを保存した場所を指定し、[次へ] をクリックします。
- または
- ◆ Identity Manager アクティベーションキーの内容をテキスト領域に貼り付け、[次へ] をクリックします。
- 10 [完了] をクリックします。

注: 使用するドライバを含む各ドライバセットを有効にする必要があります。資格情報によってツリーを有効にできます。

8.3 Identity Manager およびドライバのプロダクトアクティベーションの表示

各ドライバセットについて、メタディレクトリサーバおよび Identity Manager ドライバ用にインストールしたプロダクトアクティベーションキーを表示できます。

- 1 iManager を開きます。
- 2 [Identity Manager] > [Identity Manager の概要] の順にクリックします。
- 3  をクリックし、ツリー構造でドライバセットを参照して選択してから、 をクリックして検索を実行します。
- 4 [Identity Manager の概要] ページで、アクティベーション情報を表示するドライバセットをクリックします。

5 [ドライバセットの概要] ページで、[アクティベーション] > [情報] の順にクリックします。

アクティベーションキーのテキストを参照できます。エラーが報告された場合は、アクティベーションキーを削除できます。

注：ドライバセットの有効なプロダクトアクティベーションキーをインストールした後も、ドライバ名の横に「アクティベーションが必要です」と表示されることがあります。この場合、ドライバを再起動するとこのメッセージは消えます。

8.4 Identity Manager のドライバの有効化

Identity Manager の購入には、サービスドライバといくつかの一般的なドライバのアクティベーションが含まれています。

- ◆ **サービスドライバ：**メタディレクトリサーバを起動すると、次のサービスドライバが有効になります。
 - ◆ データ収集サービス
 - ◆ エンタイトルメントサービス
 - ◆ ID プロバイダ
 - ◆ ループバックサービス
 - ◆ Managed System Gateway
 - ◆ 手動タスクサービス
 - ◆ Null サービス
 - ◆ 役割サービス
 - ◆ ユーザアプリケーション
 - ◆ WorkOrder
- ◆ **共通ドライバ：**メタディレクトリサーバを起動すると、次の一般的なドライバが有効になります。
 - ◆ Active Directory
 - ◆ ADAM
 - ◆ eDirectory
 - ◆ GroupWise
 - ◆ LDAP
 - ◆ Lotus Notes

他のすべての Identity Manager ドライバのアクティベーションは別途購入する必要があります。ドライバのアクティベーションは、Identity Manager 統合モジュールとして販売されています。Identity Manager 統合モジュールには、1 つまたは複数のドライバを含めることができます。購入した Identity Manager 統合モジュールごとにプロダクトアクティベーションキーが提供されます。

Identity Manager 統合モジュールごとに [75 ページのセクション 8.2 「プロダクトアクティベーションキーのインストール」](#) の手順を実行し、ドライバを有効化する必要があります。

8.5 Analyzer の有効化

Analyzer を初めて起動すると、有効化するようにプロンプトが表示されます。アクティベーションを入力しないと Analyzer を使用できません。詳細については、『[「Analyzer 4.0.1 for Identity Manager 管理ガイド」](#)』の「[Analyzer の有効化](#)」を参照してください。

8.6 Designer および役割マッピング管理者の有効化

Designer および役割マッピング管理者は、メタディレクトリサーバまたはドライバを有効化するだけで済み、追加作業は必要ありません。

Identity Manager のトラブルシューティング

9

Identity Manager をインストールする際は、以下の情報に留意してください。

- ◆ 79 ページの「Identity Manager のインストール時の Lotus Notes のドライバの問題」
- ◆ 79 ページの「Windows 2008 SP2 の 32 ビットプラットフォーム上で Identity Manager のインストールが散発的に失敗する可能性があります」
- ◆ 83 ページの「2つのイベントが構文ストリームの属性に発生した場合、最初の属性の変更が失われる」
- ◆ 83 ページの「Identity Manager のアップグレード時の lcache の問題」
- ◆ 83 ページの「Identity Manager をアップグレードする場合、チャレンジ/レスポンス方式の回答が失われないように、正しい管理者アカウントが必要である」

Identity Manager のインストール時の Lotus Notes のドライバの問題

原因: Solaris 10 では、Identity Manager 4.0.1 を root 以外としてインストールすると、Lotus Notes ドライバで以下のメッセージが表示される場合があります。

```
ln: cannot create /usr/lib/locale/ja/wnn//ndsrep: File exists
ln: cannot create
cp: cannot create /usr/lib/locale/ja/wnn//
libnotesdrvjni.so.1.0.0: Permission
denied
ln: cannot create /usr/lib/locale/ja/wnn//
libnotesdrvjni.so.1: File exists
ln: cannot create /usr/lib/locale/ja/wnn//libnotesdrvjni.so:
File exists
```

アクション: 手でシンボリックリンクを作成します。シンボリックリンクのチェックや再作成に関する詳細については、『[「Identity Manager 4.0.1 Driver for Lotus Notes 実装ガイド」](#)』の「[インストール問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Windows 2008 SP2 の 32 ビットプラットフォーム上で Identity Manager のインストールが散発的に失敗する可能性があります

原因: フレームワークのインストーラに次のエラーが表示されます。

```
Java Platform SE binary has stopped working.
```

アクション: この問題を回避するには次の手順に従ってください。

- 1 `[-DCLUSTER_INSTALL="true"]` オプションを指定して Identity Manager を実行します。これにより、Identity Manager のファイルのみがインストールされ、eDirectory のスキーマおよびその他のファイルはインストールされません。

```
<install_drive>:\windows\setup\idm_install.exe -
DCLUSTER_INSTALL="true"
```

2 [eDirectory Maintenance (eDirectory の保守)] から [Import Convert Export Wizard (インポート変換エクスポートウィザード)] を使用し、Identity Manager スキーマを iManager によって拡張します。

3 LDIF ファイルを使用してデフォルトのオブジェクトを作成します。

- ◆ デフォルトのパスワードポリシー LDIF ファイル

```
dn: cn=Password Policies,cn=Security
objectClass: nspmPasswordPolicyContainer
objectClass: Top
cn: Password Policies
ACL: 1#subtree#[Public]#[Entry Rights]
ACL: 3#subtree#[Public]#[All Attributes Rights]
```

```
dn: cn=Sample Challenge Set,cn=Password
Policies,cn=Security
objectClass: nsimChallengeSet
objectClass: Top
cn: Sample Challenge Set
```

```
dn: cn=Sample Password Policy,cn=Password
Policies,cn=Security
objectClass: nspmPasswordPolicy
objectClass: Top
cn: Sample Password Policy
```

- ◆ デフォルトの通知コレクションポリシー LDIF ファイル

```
dn: cn=Default Notification Collection,cn=Security
objectClass: notifTemplateCollection
objectClass: Top
cn: Default Notification Collection
ACL: 1#subtree#[Public]#[Entry Rights]
ACL: 3#subtree#[Public]#[All Attributes Rights]
```

```
dn: cn=Password Expiration Notification,cn=Default
Notification Collection,cn=Security
notifMergeTemplateSubject: Password Expiration
Notification
notifMergeTemplateData::
PGH0bWwgeG1sbnM6Zm9ybT0iaHR0cDovL3d3dy5ub3Z1bGwuY29tL
2RpcnhtbC93b3JrZmxvdy9mb3JtIj4gDQo8Zm9ybTp0b2t1bi1kZX
Njcm1wdGlvbnM+IA0KPGZvc06dG9rZW4tZGVzY3JpcHRpb24gZGV
zY3JpcHRpb249IkZ1bGwgbmFtZSBieSB3aGljaCB0byBhZGRyZXNz
IHVzZXIiIGl0ZW0tbmFtZT0iVXNlckZ1bGx0YW11Ii8+IA0KPGZvc
m06dG9rZW4tZGVzY3JpcHRpb24gZGVzY3JpcHRpb249Ik51bWJlci
BvZiBkYX1zIHVudGlsIHh3c3N3b3JkIGV4cGlyZXMiIGl0ZW0tbmF
tZT0iRXhwRGF5cyIvPiANCjwvZm9ybTp0b2t1bi1kZXNjcm1wdGlv
bnM+IA0KPGhlYWQ+IA0KPHRpdGx1PlBhc3N3b3JkIEV4cGlyYXRpb
24gTm90aWZpY2F0aW9uPC90aXRzZT4gDQo8c3R5bGU+IA0KPCetLS
Bib2R5IH9mZm9udC1mYW1pbHk6IFRyZWJ1Y2hlZCBNUyB9IC0tPiA
NCjwvc3R5bGU+IA0KPC9oZWFKPiANCjxib2R5IEJHQ09MT1I9IiNG
RkZGRkYiPiANCjxwPkRlYXJgJFVzZXJGdWxsTmFtZS0sPC9wPiANC
jxwPlRoXMGbWVzc2FnZSBpcyB0byBpbmZvc0geW91IHRoYXQgeW
91ciBwYXNzd29yZCB3aWxsIGV4cGlyZSBpbjwvcD4gDQo8YnIvPiA
NCiAgJEV4cERheXMkIGRheXM8YnIvPiANCjxici8+IA0KPHA+UGxl
YXNlIHhsYW4gdG8gY2hhbmdlIHlvdXIgcGFzc2dvcmQgYmVmb3JlI
G10IGV4cGlyZXMuPC9wPiANCjxwPiAtIEF1dG9tYXRlZCBTZW51cm
l0eSAtIDwvcD4gDQo8cD4gDQo8aW1nIEFMVD0iUG93ZXJlZCBieSB
```


Ob3Z1bGwiIFNSQz0iY2lkOnBvd2VyZWRfYnlfbm92ZWxsLmdpZiIg
aGVpZ2h0PSIyOSIgd2lkdGg9IjgwIi8+IA0KPC9wPiANCjwvYm9ke
T4gDQo8L2h0bWw+IA0K
objectClass: notifMergeTemplate
objectClass: Top
cn: Password Expiration Notification

dn: cn=Password Reset Fail,cn=Default Notification
Collection,cn=Security
notifMergeTemplateSubject: Notice of Password Reset
Failure
notifMergeTemplateData: :
PGh0bWwgeG1sbnM6Zm9ybT0iaHR0cDovL3d3dy5ub3Z1bGwuY29tL
2RpcnhtbC93b3JrZmxvdy9mb3JtIj4NCiAgPGZvc06dG9rZW4tZG
VzY3JpcHRpb25zPg0KICAgIDxmb3JtOnRva2VuLWRlc2NyaXB0aW9
uIGl0ZW0tbmFtZT0iVXNlckZ1bGxOYW11IiBkZXNjcmlwdGlvbj0i
VGhlIHVzZXIncyBmdWxsIG5hbWUiLz4NCiAgICA8Zm9ybTp0b2t1b
ilkZXNjcmlwdGlvbiBpdGVtLW5hbWU9IlVzZXJHaXZ1bk5hbWUiIG
Rlc2NyaXB0aW9uPSJUaGUgdXNlcidzIGdpdmVuIG5hbWwDT0xPUj0
iI0ZGRkZGRiI+DQogIDxwPkRlYXJgJFVzZXJGdWxsTmFtZSQsPC9w
Pg0KICA8cD5UaGlzIGl0IGl0IGl0IGl0IGl0IGl0IGl0IGl0IGl0IGl0
29yZCBjb3VsZCBub3QgYmUgcmVzZXQgaW4gdGhlICRDb25uZWN0ZW
RTeXN0ZW10YW11JCBzeXN0ZW0uLiAgVGhlIHJlYXNvbiBmb3IgzMf
pbHVyZSBpcyBpbmRpY2F0ZWQgYmVsb3c6PC9wPg0KICA8cD5SZWFz
b246ICRGYwlsdXJlUmVhc29uJDwvcD4NCiAgPHA+SWYgeW91IGhhd
mUgYW55IGZ1cnRoZXIgcXVlc3Rpb25zLA0KICAgICBwbGVhc2UgY2
9udGFjdCB0aGUgaGVscCBkZXNrIGF0ICGwMTIpIDM0NS02Nzg5IG9
yIGVtYWlsDQogICAgIGF0IDxhIGhyZWY9Im1haWx0bzpoZWxwLmRl
c2tAbXlj21wYw55LmNvbSI+DQogICAgIGh1bHAuZGVza0BteWNvb
XBhbnkuY29tIDwvYT48L3A+DQogIDxwPiAtIEF1dG9tYXR1ZCBTZW
N1cm10eTwvcD4NCiAgPHA+PGLtZyBTUkM9ImNpZDpwb3dlcmVhX2J
5X25vdmVsbC5naWYiIEFMVD0iUG93ZXJlZCBieSB0b3Z1bGwiIHdp
ZHRoPSI4MCIgaGVpZ2h0PSIyOSIvPjwvcD4NCjwvYm9keT4NCjwva
HRtbD4NCg==
objectClass: notifMergeTemplate
objectClass: Top
cn: Password Reset Fail

dn: cn=Password Set Fail,cn=Default Notification
Collection,cn=Security
notifMergeTemplateSubject: Notice of Password Set
Failure
notifMergeTemplateData: :
PGh0bWwgeG1sbnM6Zm9ybT0iaHR0cDovL3d3dy5ub3Z1bGwuY29tL
2RpcnhtbC93b3JrZmxvdy9mb3JtIj4NCiAgPGZvc06dG9rZW4tZG
VzY3JpcHRpb25zPg0KICAgIDxmb3JtOnRva2VuLWRlc2NyaXB0aW9
uIGl0ZW0tbmFtZT0iVXNlckZ1bGxOYW11IiBkZXNjcmlwdGlvbj0i
VGhlIHVzZXIncyBmdWxsIG5hbWUiLz4NCiAgICA8Zm9ybTp0b2t1b
ilkZXNjcmlwdGlvbiBpdGVtLW5hbWU9IlVzZXJHaXZ1bk5hbWUiIG
Rlc2NyaXB0aW9uPSJUaGUgdXNlcidzIGdpdmVuIG5hbWU9IlVzZXJ
gICA8Zm9ybTp0b2t1bilkZXNjcmlwdGlvbiBpdGVtLW5hbWU9IlVz
ZXJMYXN0TmFtZSIgZGVzY3JpcHRpb249IlRoZSB1c2VyJ3MgbGFzd
CBuYw11Ii8+DQogICAgPGZvc06dG9rZW4tZGVzY3JpcHRpb24gaX
RlbS1uYW11PSJDb25uZWN0ZWRTeXN0ZW10YW11IiBkZXNjcmlwdGlv
bj0iVGhlIGV4dGVybmFsIGFwcGxpY2F0b24gYmFtZSIvPg0KICAg
IDxmb3JtOnRva2VuLWRlc2NyaXB0aW9uIGl0ZW0tbmFtZT0iRmFpb
HVyZVJlYXNvbiIgzGVzY3JpcHRpb249IlRoZSBmYwlsdXJlIHJlYX
NvbiIvPg0KICA8L2Zvc06dG9rZW4tZGVzY3JpcHRpb25zPg0KPGh
lYWQ+DQogIDx0aXR5ZT5Ob3Rpb2UgY2YgUGFzc3dvc0gU2V0IEZl


```
A+IC0gQXV0b21hdGVkIFNlY3VyaXR5PC9wPg0KICA8cD48aWlnIFN
SQz0iY2lkOnBvd2VyZWRFYnlfbm92ZWxsLmdpZiIgQUxUPSJQb3dl
cmVkJGJ5IE5vdmVsbCIgd2lkdGg9IjgwIiBoZWlnaHQ9IjI5Ii8+P
C9wPg0KPC9ib2R5Pg0KPC9odG1sPg0K
objectClass: notifMergeTemplate
objectClass: Top
cn: Password Sync Fail
```

- 4 NMASS メソッドをインストールします。
- 5 NMASS プラグインを iManager にインストールしたら、`[NMASS] > [NMASS Login (NMASS ログイン)] > [Methods (メソッド)] > [New (新規)]` に移動します。目的の NMASS メソッドの環境設定ファイルを参照し、インストールします。

注: 回避策を実行する前に、ログファイルを必ず参照してください。たとえば、Role Based Provisioning Module スキーマがすでに拡張されている場合、Role Based Provisioning Module ドライバをインストール中にそれを拡張する必要はありません。

2つのイベントが構文ストリームの属性に発生した場合、最初の属性の変更が失われる

ソース: Identity Manager 4.0.1 エンジンでは、キャッシュ内に STREAM 属性および OCTET_STRING 属性が保存されません。接続システムにイベントが同期されると、識別ポルトからこれらの属性をエンジンが読み取り、接続システムを更新します。エンジンは識別ポルトから読み取る前にこれらの属性が変更された場合、変更された値は接続システム内で更新され、中間的な変更は失われる可能性があります。

アクション: 属性が頻繁に変更されている場合は、SYN_STREAM ではなく適切な構文を使用します。

たとえば、XML オブジェクトが STREAM 属性に保存されている場合は、SYN_STREAM ではなく xmlData 構文を使用します。

Identity Manager のアップグレード時の lcache の問題

原因: Identity Manager をアップグレードすると、プラットフォームエージェントが目的どおりにイベントをログに記録しないことがあります。Linux 上で Identity Manager をアップグレードする際にプラットフォームエージェントはアップグレードされていないためにこの問題が発生します。Solaris 上では、プラットフォームエージェントは最新バージョンにアップグレードされますが、新しいプラットフォームエージェントではデフォルトポートが異なるので、lcache を再起動する必要があります。

アクション: アップグレードを開始する前に、lcache を手動で停止する必要があります。

Identity Manager をアップグレードする場合、チャレンジ/レスポンス方式の回答が失われるように、正しい管理者アカウントが必要である

ソース: Windows プラットフォームで旧バージョンの Identity Manager からアップグレードする場合、eDirectory のインストールに使用したのと同じ管理者アカウントを使用する必要があります。

説明：たとえば、ドメイン管理者アカウントを使用して **eDirectory** をインストールした場合は、**Identity Manager** をインストールする際に再度そのドメイン管理者アカウントを使用します。ローカル管理者アカウントを使用しないでください。

アクション：同じ管理者アカウントを使用しなかった場合、チャレンジ/レスポンス方式の質問に対するユーザの回答にアクセスできなくなります。このような問題が発生する理由は、(管理者アカウントが異なるので)インストール中にツリーキーが再作成され、新しいキーでは保存されている回答に正しくアクセスできないためです。ユーザがログインすると、新しいチャレンジ/レスポンス方式の回答を指定するようプロンプトが表示されます。

Identity Manager 4.0.1 には、次のようないくつかの新機能と拡張機能が含まれています。

- ◆ 85 ページのセクション 10.1 「Identity Manager 4.0.1 の新機能」
- ◆ 86 ページのセクション 10.2 「Identity Manager 4.0 の新機能」

10.1 Identity Manager 4.0.1 の新機能

- ◆ 85 ページのセクション 10.1.1 「Identity Manager Advanced Edition と Standard Edition の比較」
- ◆ 85 ページのセクション 10.1.2 「Telemetry」
- ◆ 85 ページのセクション 10.1.3 「リソース要求アクティビティ」
- ◆ 86 ページのセクション 10.1.4 「Identity Reporting Module に追加された新しいモジュール」
- ◆ 86 ページのセクション 10.1.5 「Designer のパレットに追加されたアプリケーション」

10.1.1 Identity Manager Advanced Edition と Standard Edition の比較

お客様のさまざまな要件を満たすために、Identity Manager 4.0.1 は、Advanced Edition と Standard Edition という 2 つのエディションで出荷されています。Advanced Edition には、エンタープライズクラスのユーザプロビジョニング向けの機能一式が含まれます。Standard Edition には、Identity Manager Advanced Edition で利用可能な機能のサブセットが含まれており、Identity Manager の以前のバージョンに存在したすべての機能がそのまま提供されます。Advanced Edition と Standard Edition で利用できる Identity Manager の機能を比較するには、「[Identity Manager Version Comparison \(http://www.novell.com/products/identitymanager/features/identitymanager-version-comparison.html\)](http://www.novell.com/products/identitymanager/features/identitymanager-version-comparison.html)」を参照してください。

10.1.2 Telemetry

Identity Manager Telemetry は、Identity Manager 4.0.1 で採用された新しいジョブです。このジョブは、使用量計算ツールまたはライセンス監視ツールとして機能します。これらのツールでは、ライセンスを追加したり、使用されていないライセンスをリタイアさせたりできるので、Identity Manager のお客様に価値をもたらします。また、お客様は、使用されていないユーザの価格設定が持つメリットも活用できます。

10.1.3 リソース要求アクティビティ

リソース要求アクティビティによって、ユーザに対するリソースの付与または取り消しを自動化できます。たとえば、新しい従業員が入社初日に必要となるすべてのリソースをプロビジョニングするプロビジョニング要求定義を書いたりすることが考えられます。リソース要求アクティビティを使用すると、その従業員に対する所定のリソースの承認を自動化できます。リソース要求アクティビティの詳細については、『[User Application: Design Guide](#)』の「[Resource Request Activity](#)」を参照してください。

10.1.4 Identity Reporting Module に追加された新しいモジュール

次のレポートが追加されました。

- ◆ 識別ボールド内のユーザステータスの変更：識別ボールドのユーザに関する重要なイベントを表示します。
- ◆ 識別ボールド内のユーザパスワードの変更：識別ボールド内のユーザパスワードの変更をすべて表示します。
- ◆ 受信者別のアクセス要求：受信者別にグループ化されたリソース割り当てワークフロープロセスが表示されます。
- ◆ リクエスト別のアクセス要求：リクエスト別にグループ化されたリソース割り当てワークフロープロセスが表示されます。
- ◆ リソース別のアクセス要求：リソース別にグループ化されたリソース割り当てワークフロープロセスが表示されます。

新しいレポートの詳細については、『[Identity Reporting Module Guide](#)』を参照してください。

10.1.5 Designer のパレットに追加されたアプリケーション

Designer のパレットに次のアプリケーションが追加されました。

- ◆ 黒板
- ◆ Google アプリケーション
- ◆ RSA

10.2 Identity Manager 4.0 の新機能

- ◆ [86 ページのセクション 10.2.1 「Identity Reporting Module」](#)
- ◆ [87 ページのセクション 10.2.2 「新しいドライバ」](#)
- ◆ [87 ページのセクション 10.2.3 「XDAS 監査のサポートに対応」](#)
- ◆ [88 ページのセクション 10.2.4 「ドライバの環境設定ファイルをパッケージが置換」](#)
- ◆ [88 ページのセクション 10.2.5 「役割マッピング管理者」](#)
- ◆ [88 ページのセクション 10.2.6 「Analyzer」](#)
- ◆ [88 ページのセクション 10.2.7 「統合インストーラ」](#)

10.2.1 Identity Reporting Module

Identity Reporting Module を使用すると、Identity Manager の環境設定のさまざまな側面に関する情報を表示するレポートを生成できます。これらには、1 つ以上の識別ボールドや管理対象システムから収集された情報も含まれます。Identity Reporting Module は、レポートを生成するのに使用できる、一連の事前定義されたレポート定義を提供します。さらに、サードパーティ製ツールで定義されたカスタムレポートをインポートするオプションも使用できます。

Identity Reporting Module には、次の 2 つの新しいサービスドライバが必要です。

- ◆ データ収集サービスドライバ
- ◆ Managed System Gateway Driver

レポートモジュールおよび 2 つのレポーティングドライバの詳細については、『[Identity Reporting Module ガイド](#)』を参照してください。事前定義されたレポートの詳細については、『[Using Identity Manager 4.0 Reports](#)』を参照してください。

10.2.2 新しいドライバ

Identity Manager 4.0.1 には次の新しいドライバが含まれています。

- ◆ [87 ページの「SharePoint ドライバ \(.NET リモートローダ\) 」](#)
- ◆ [87 ページの「Salesforce.com ドライバ」](#)

SharePoint ドライバ (.NET リモートローダ)

Novell Identity Manager 用の SharePoint ドライバは、識別ボールドと SharePoint 2007 または SharePoint 2010 サイトコレクション間で、ユーザとグループのメンバーシップイベントを同期できるようにします。単一のドライバは、1 つ以上の SharePoint サイトのユーザとグループのメンバーシップ情報を保持する単一のサイトコレクション用にこれらのイベントを処理できます。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 Driver for SharePoint 実装ガイド](#)』を参照してください。

Salesforce.com ドライバ

Identity Manager 4.0.1 では、クラウドアプリケーションに対してユーザの自動プロビジョニングと同期が可能になります。Novell Identity Manager 用の新しい Salesforce.com ドライバは、Salesforce.com クラウドアプリケーションにシームレスにユーザをプロビジョニングおよびプロビジョニング解除できるので、ユーザの ID 情報が識別ボールドとクラウドアプリケーション間で一貫するように保証します。Salesforce.com のドライバは、識別ボールドと Salesforce.com のクラウド間の安全なパスワード同期もサポートしており、認証プロキシサーバと自動ユーザプロビジョニング用に設定可能なユーザプロフィールをサポートしています。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 Driver for Salesforce.com 実装ガイド](#)』を参照してください。

10.2.3 XDAS 監査のサポートに対応

Identity Manager 4.0.1 は、Novell Audit プラットフォームエージェントの監査機能を強化する、XDAS ベースの監査をサポートしています。これは、Identity Manager、NMA、eDirectory、および役割マッピング管理者向けに共通の XDAS スキーマを使用します。新しい監査サービスは、Syslog、ファイルアペンダもサポートしています。詳細については、『[Identity Reporting Module Guide](#)』および『[Identity Manager 4.0.1 Reporting Guide for Novell Sentinel](#)』を参照してください。

10.2.4 ドライバの環境設定ファイルをパッケージが置換

Identity Manager 4.0.1 には、Identity Manager のポリシーコンテンツの高品質な構成要素を含むパッケージが導入されています。ドライバの作成には、ドライバの環境設定ファイルではなく、パッケージが使用されるようになりました。詳細については、『[「Designer 4.0.1 for Identity Manager 4.0.1 管理ガイド」](#)』の「[Identity Manager コンテンツの管理](#)」を参照してください。

10.2.5 役割マッピング管理者

役割マッピング管理者とは、IT システム内で付与できる権限および許可を分析する新しいツールで、それらの権限または許可を付与することができます。権限および許可は、IT スタッフやコンサルタントだけではなく、ビジネスアナリストも付与できます。詳細については、『[Novell Identity Manager Role Mapping Administrator 4.0.1 ユーザガイド](#)』を参照してください。

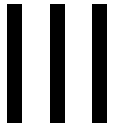
10.2.6 Analyzer

Analyzer は、識別データの診断、クリーンアップ、および Identity Manager を使用した管理に向けた準備を行うことができます。詳細については、『[Analyzer 4.0.1 for Identity Manager Administration Guide](#)』を参照してください。

10.2.7 統合インストーラ

Identity Manager 4.0.1 には、1 つのインストーラで Identity Manager のすべてのコンポーネントのインストールおよび設定を行う統合インストーラが付属しています。インストーラは、小中規模の環境における新規インストールに使用されます。詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 統合インストールガイド](#)』を参照してください。

Identity Manager のアップグレード



Identity Manager コンポーネントをアップグレードするには、Identity Manager 4.0.1 にアップグレードするための個別製品のインストーラを使用します。Identity Manager 4.0.1 Standard Edition から Advanced Edition へのアップグレードには、設定のみ変更する別のアップグレード手順があります。このアップグレードには Identity Manager インストーラを実行する必要はありません。Identity Manager のアップグレードの詳細については、『[Identity Manager 4.0.1 Upgrade and Migration Guide](#)』の「[Upgrade](#)」セクションを参照してください。

アップグレードとマイグレーション

11

開始する前に、アップグレードとマイグレーションとの相違点を確認してください。
『[Identity Manager 4.0.1 Upgrade and Migration Guide](#)』の「[Upgrading or Migrating](#)」を参照してください。

Identity Manager のアンインストール

IV

Identity Manager のいずれかをアンインストールする必要がある場合、各コンポーネントをアンインストールする必要があります。

- ◆ [95 ページの第 12 章「Identity Manager コンポーネントのアンインストール」](#)

Identity Manager コンポーネントの アンインストール

12

次にリストした順序で Identity Manager コンポーネントをアンインストールします。

- ◆ 95 ページのセクション 12.1 「eDirectory からのオブジェクトの削除」
- ◆ 96 ページのセクション 12.2 「メタディレクトリサーバのアンインストール」
- ◆ 97 ページのセクション 12.3 「リモートローダのアンインストール」
- ◆ 97 ページのセクション 12.4 「Roles Based Provisioning Module のアンインストール」
- ◆ 99 ページのセクション 12.5 「Identity Reporting Module のコンポーネントのアンインストール」
- ◆ 100 ページのセクション 12.6 「iManager のアンインストール」
- ◆ 101 ページのセクション 12.7 「eDirectory のアンインストール」
- ◆ 102 ページのセクション 12.8 「Analyzer のアンインストール」
- ◆ 102 ページのセクション 12.9 「Designer のアンインストール」
- ◆ 103 ページのセクション 12.10 「役割マッピング管理者のアンインストール」

12.1 eDirectory からのオブジェクトの削除

Identity Manager をアンインストールする最初のステップでは、すべての Identity Manager オブジェクトを識別ボールドから削除します。いずれかのドライバセットが eDirectory のパーティションルートオブジェクトの場合、ドライバセットオブジェクトを削除するには、パーティションを親パーティションにマージする必要があります。ドライバセットの作成時に、ウィザードにより、ドライバセットを 1 つのパーティションにするようメッセージが表示されます。

- 1 eDirectory データベースでヘルスチェックを実行します。エラーが発生した場合は、エラーを修復してから次へ進みます。
詳細については、『Novell eDirectory 8.8 管理ガイド』の「eDirectory (<http://www.novell.com/documentation/edir88/edir88/data/a5ziqam.html>)」を参照してください。
- 2 eDirectory ツリーに対して完全な権限を持つ管理者ユーザとして iManager にログインします。
- 3 [パーティションとレプリカ] > [パーティションのマージ] の順に選択します。
- 4 パーティションのルートオブジェクトであるドライバセットオブジェクトを参照して選択し、[OK] をクリックします。
- 5 マージプロセスが完了するまで待つから、[OK] をクリックします。
- 6 ドライバセットオブジェクトを削除します。
ドライバセットオブジェクトを削除すると、ドライバセットに関連付けられているドライバオブジェクトはすべて削除されます。

- 7 eDirectory データベースにある各ドライバセットオブジェクトに対して、すべて削除されるまで、[ステップ 3](#)～[ステップ 6](#)を繰り返します。
- 8 [ステップ 1](#)を繰り返して、すべてのマージが完了し、オブジェクトがすべて削除されたことを確認します。

12.2 メタディレクトリサーバのアンインストール

Identity Manager がインストールされている場合、アンインストールスクリプトがあり、Identity Manager サーバ上に保存されています。このスクリプトを使用すると、Identity Manager のインストール時に作成されたサーバ、パッケージ、およびディレクトリをすべて削除できます。

- ◆ [96 ページのセクション 12.2.1 「Linux/UNIX でのアンインストール」](#)
- ◆ [96 ページのセクション 12.2.2 「Windows でのアンインストール」](#)
- ◆ [96 ページのセクション 12.2.3 「ルート以外のインストールのアンインストール」](#)

12.2.1 Linux/UNIX でのアンインストール

Linux/UNIX 上の Identity Manager をアンインストールするには、`/root/idm/Uninstall_Identity_Manager/Uninstall_Identity_Manager`にあるアンインストールスクリプトを実行します。スクリプトを実行するには、「`./Uninstall_Identity_Manager`」と入力します。

root 以外のユーザで Identity Manager をインストールした場合、Identity Manager をインストールしたユーザのディレクトリに `idm` ディレクトリが配置されます。

12.2.2 Windows でのアンインストール

メタディレクトリサーバをアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。

- ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Identity Manager] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。
- ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Identity Manager] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

12.2.3 ルート以外のインストールのアンインストール

Identity Manager のルート以外のインストールをアンインストールするには、Identity Manager をインストールしたユーザでアンインストールスクリプトを実行する必要があります。このスクリプトは、`leDirectory_Base_Directory/opt/novell/eDirectory/bin/idm-uninstall` に保存されています。

このスクリプトによって、Identity Manager のインストール時に作成されたユーザ RPM データベースがクリーンアップされます。

12.3 リモートローダのアンインストール

リモートローダがインストールされている場合、アンインストールスクリプトがあり、リモートローダサーバ上に保存されています。このスクリプトを使用すると、リモートローダのインストール時に作成されたサーバ、パッケージ、およびディレクトリをすべて削除できます。

- ◆ [97 ページのセクション 12.3.1 「Linux/UNIX でのアンインストール」](#)
- ◆ [97 ページのセクション 12.3.2 「Windows でのアンインストール」](#)

12.3.1 Linux/UNIX でのアンインストール

Linux/UNIX 上のリモートローダをアンインストールするには、`/root/idm/Uninstall_Identity_Manager/Uninstall_Identity_Manager` にあるアンインストールスクリプトを実行します。スクリプトを実行するには、「`./Uninstall_Identity_Manager`」と入力します。

root 以外のユーザでリモートローダをインストールした場合、リモートローダをインストールしたユーザのディレクトリに `idm` ディレクトリが配置されます。

12.3.2 Windows でのアンインストール

リモートローダをアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。

- ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット)**: [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Identity Manager] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。
- ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット)**: [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Identity Manager] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

12.4 Roles Based Provisioning Module のアンインストール

Roles Based Provisioning Module には複数のコンポーネントがあり、各コンポーネントをアンインストールする必要があります。

- ◆ [98 ページのセクション 12.4.1 「ドライバの削除」](#)
- ◆ [98 ページのセクション 12.4.2 「ユーザアプリケーションのアンインストール」](#)
- ◆ [98 ページのセクション 12.4.3 「アプリケーションサーバとデータベースのアンインストール」](#)

12.4.1 ドライバの削除

ユーザアプリケーションドライバおよび役割ドライバとリソースドライバを削除する必要があります。

- 1 ユーザアプリケーションドライバおよび役割ドライバとリソースドライバを停止します。
 - ◆ **Designer:** ドライバ行を右クリックし、*[Live (ライブ)]* > *[Stop Driver (ドライバの停止)]* をクリックします。
 - ◆ **iManager:** [ドライバセットの概要] ページで、ドライバの右上隅をクリックし、*[Stop Driver (ドライバの停止)]* をクリックします。
- 2 ユーザアプリケーションドライバおよび役割ドライバとリソースドライバを削除します。
 - ◆ **Designer:** ドライバ行を右クリックし、*[削除]* をクリックします。
 - ◆ **iManager:** [ドライバセットの概要] ページで、*[ドライバ]* > *[Delete drivers (ドライバの削除)]* をクリックし、削除するドライバをクリックします。

12.4.2 ユーザアプリケーションのアンインストール

- ◆ **Linux/UNIX:** `/root/Roles_Based_Provisioning_Module_for_Novell_Identity_Manager/Uninstall Roles Based Provisioning Module for Novell Identity Manager` にあるアンインストールスクリプトを実行します。

スクリプトを実行するには、「`./Uninstall\ Roles\ Based\ Provisioning\ Module\ for\ Novell\ Identity\ Manager`」と入力します。
- ◆ **Windows:** ユーザアプリケーションをアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、*[プログラムの追加と削除]* > *[Roles Based Provisioning Module]* の順に選択し、*[変更と削除]* をクリックします。
 - ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** *[プログラムと機能]* > *[Roles Based Provisioning Module]* の順にクリックし、右クリックして *[アンインストール]* を選択します。

12.4.3 アプリケーションサーバとデータベースのアンインストール

ユーザアプリケーションは、次のアプリケーションサーバとデータベース上で動作します。

表 12-1 サポートされているアプリケーションサーバとデータベース

アプリケーションサーバ	データベース
JBoss 5.1.0	<ul style="list-style-type: none"> ◆ MS SQL 2008 ◆ MySQL バージョン 5.1 ◆ Oracle 11gR2 ◆ PostgreSQL 8.4.3
WebSphere 7.0	<ul style="list-style-type: none"> ◆ DB2 9.5b ◆ MS SQL 2008 ◆ Oracle 11gR2 ◆ PostgreSQL 8.4.3
WebLogic 10.3	<ul style="list-style-type: none"> ◆ MS SQL 2008 ◆ Oracle 11gR2 ◆ PostgreSQL 8.4.3

次の手順では、JBoss および PostgreSQL のアンインストール方法について説明します。別のアプリケーションサーバとデータベースを使用している場合の手順については、その製品のドキュメントを参照してください。

- ◆ **Linux/UNIX:** /opt/novell/idm/Postgres/JBossPostgreSQL_Uninstaller/Uninstall_JBossPostgreSQL にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./Uninstall_JBossPostgreSQL」と入力します。
- ◆ **Windows:** JBoss および PostgreSQL をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロール パネル] で、[プログラムの追加と削除] > [JBossPostgreSQL] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。
 - ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [JBossPostgreSQL] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

12.5 Identity Reporting Module のコンポーネントのアンインストール

Identity Reporting Module は複数のコンポーネントで構成されています。Identity Reporting Module をアンインストールするには、各コンポーネントをアンインストールする必要があります。

- ◆ 100 ページのセクション 12.5.1 「レポーティングドライバの削除」
- ◆ 100 ページのセクション 12.5.2 「Identity Reporting Module のアンインストール」
- ◆ 100 ページのセクション 12.5.3 「イベント監査サービスのアンインストール」

12.5.1 レポーティングドライバの削除

データ収集ドライバおよび Managed System Gateway ドライバを削除する必要があります。

- 1 データ収集ドライバおよび Managed System Gateway ドライバを停止します。
 - ◆ **Designer:** ドライバ行を右クリックし、*[Live (ライブ)]* > *[Stop Driver (ドライバの停止)]* をクリックします。
 - ◆ **iManager:** [ドライバセットの概要] ページで、ドライバの右上隅をクリックし、*[Stop Driver (ドライバの停止)]* をクリックします。
- 2 データ収集ドライバおよび Managed System Gateway ドライバを削除します。
 - ◆ **Designer:** ドライバ行を右クリックし、*[削除]* をクリックします。
 - ◆ **iManager:** [ドライバセットの概要] ページで、*[ドライバ]* > *[Delete drivers (ドライバの削除)]* をクリックし、削除するドライバをクリックします。

12.5.2 Identity Reporting Module のアンインストール

- ◆ **Linux:** /opt/novell/IdentityReporting/Uninstall_Identity Reporting にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./Uninstall\ Identity\ Reporting」と入力します。
- ◆ **Windows:** Identity Reporting Module をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、*[プログラムの追加と削除]* > *[Identity Reporting]* の順に選択し、*[変更と削除]* をクリックします。
 - ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** *[Programs and Features (プログラムと機能)]* > *[Identity Reporting]* の順にクリックし、右クリックして *[アンインストール]* を選択します。

12.5.3 イベント監査サービスのアンインストール

イベント監査サービス (EAS) は Linux でのみサポートされています。/opt/novell/sentinel_eas/Uninstall_Event Auditing Service/Uninstall Event Auditing Service にあるアンインストールスクリプトを実行します。スクリプトを実行するには、「./Uninstall\ Event\ Auditing\ Service」と入力します。

12.6 iManager のアンインストール

- ◆ **Linux:** root で、/var/opt/novell/iManager/nps/UninstallerData/UninstalliManager にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./UninstalliManager」と入力します。
- ◆ **Windows:** iManager をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、*[プログラムの追加と削除]* > *[Novell iManager]* の順に選択し、*[変更と削除]* をクリックします。

- ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Novell iManager] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

Tomcat と NICI は、コントロールパネル内で別のエントリとして表示されます。これらのプログラムを使用しなくなったら、プログラムごとにアンインストールできます。eDirectory が同じサーバにインストールされている場合、eDirectory が実行し続けるためには NICI が必要です。eDirectory をアンインストールするのでなければ、NICI をアンインストールしないでください。

12.7 eDirectory のアンインストール

eDirectory をアンインストールする前に、eDirectory ツリーで問題を引き起こさないように eDirectory のツリー構造とレプリカの配置を理解する必要があります。

eDirectory をアンインストールする前に、次の質問に答えてください。

- ツリー内に複数のサーバが存在しますか。

答えが「はい」の場合、このリスト内の他の質問に進んでください。答えが「いいえ」の場合、eDirectory を削除できます。

- このサーバはいずれかのマスタレプリカを保持していますか。

答えが「はい」の場合、eDirectory を削除する前にレプリカリング内の他のサーバをマスタに昇格させる必要があります。詳細については、『Novell eDirectory 8.8 管理ガイド』の「[Managing Partitions and Replicas] (<http://wwwtest.provo.novell.com/documentation/edir88/edir88/data/a2iik.html>)」を参照してください。

- このサーバはパーティションのコピーのみを保持していますか。

答えが「はい」の場合、このパーティションを親パーティションにマージするか、別のサーバにこのパーティションのレプリカを追加し、それにマスタレプリカを保持させる必要があります。詳細については、『Novell eDirectory 8.8 管理ガイド』の「[Managing Partitions and Replicas] (<http://wwwtest.provo.novell.com/documentation/edir88/edir88/data/a2iik.html>)」を参照してください。

eDirectory ツリーの準備が整っていることを確認したら、次の手順で eDirectory をアンインストールします。

- 1 これがシングルサーバツリーの場合、**ステップ 2** にスキップします。そうでない場合、eDirectory データベースでヘルスチェックを実行します。エラーが発生した場合は、エラーを修復してから次へ進みます。詳細については、『Novell eDirectory 8.8 管理ガイド』の「[eDirectory] (<http://www.novell.com/documentation/edir88/edir88/data/a5ziqam.html>)」を参照してください。
- 2 eDirectory をアンインストールします。
 - ◆ **Linux/UNIX:** /opt/novell/eDirectory/sbin/nds-uninstall にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./nds-uninstall」と入力します。
 - ◆ **Windows:** eDirectory をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Novell eDirectory] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。

- ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Novell eDirectory] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。
- 3 (オプション) これが複数のサーバツリーの場合、ツリー内に残っているサーバ固有のオブジェクトを削除してからヘルスチェックを再度実行します。これにより、サーバがツリーから適切に削除されたことが確認されます。
- 詳細については、『Novell eDirectory 8.8 管理ガイド』の「[eDirectory] (<http://www.novell.com/documentation/edir88/edir88/data/a5ziqam.html>)」を参照してください。

12.8 Analyzer のアンインストール

- 1 Analyzer が閉じていることを確認します。
- 2 Analyzer をアンインストールします。
 - ◆ **Linux:** < インストールディレクトリ >/analyzer/UninstallAnalyzer/Uninstall Analyzer for Identity Manager にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./Uninstall\ Analyzer\ for\ Identity\ Manager」と入力します。
 - ◆ **Windows:** Analyzer をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Analyzer for Identity Manager (Identity Manager 用の Analyzer)] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。
 - ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Analyzer for Identity Manager (Identity Manager 用の Analyzer)] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

12.9 Designer のアンインストール

- 1 Designer が閉じていることを確認します。
- 2 Designer をアンインストールします。
 - ◆ **Linux/UNIX:** < インストールディレクトリ >/designer/UninstallDesigner/Uninstall Designer for Identity Manager にあるアンインストールスクリプトを実行します。
スクリプトを実行するには、「./Uninstall\ Designer\ for\ Identity\ Manager」と入力します。
 - ◆ **Windows:** Designer をアンインストールする手順は、サポートされている Windows プラットフォームごとに異なります。
 - ◆ **Windows 2003 SP2 (32 ビットおよび 64 ビット):** [コントロールパネル] で、[プログラムの追加と削除] > [Designer for Identity Manager (Identity Manager 用の Designer)] の順に選択し、[変更と削除] をクリックします。
 - ◆ **Windows 2008 SP1 (32 ビットおよび 64 ビット):** [Programs and Features (プログラムと機能)] > [Designer for Identity Manager (Identity Manager 用の Designer)] の順にクリックし、右クリックして [アンインストール] を選択します。

12.10 役割マッピング管理者のアンインストール

- 1 役割マッピング管理者のインストールディレクトリにアクセスします。
このディレクトリはインストール中に定義されるので、インストールごとに異なる可能性があります。
- 2 コマンドラインから、stop スクリプトを実行して役割マッピング管理者を停止します。
 - ◆ **Linux:** stop.sh
スクリプトを実行するには、「./stop.sh」と入力します。
 - ◆ **Windows:** stop.bat
- 3 コマンドラインから、アンインストールスクリプトを実行してください。
 - ◆ **Linux:** rma-uninstall.sh [-h] [-s]
 - ◆ [-h]: ヘルプを指定します。
 - ◆ [-s]: サイレントモードを指定します。スクリプトを実行するには、「./rma-uninstall.sh」と入力します。
 - ◆ **Windows:** rma-uninstall.bat [-h] [-s]
- 4 インストールディレクトリを削除します。

